サクラ大戦

前夜

神崎すみれ……懸命に人生を闘う彼女はしかし、その故に、何よりも大切な宝物を失ってしまった。

李　紅蘭……時代は、最愛の父を彼女から奪い、その手に愛の欠片だけを遺した。

アイリス＝シャトーブリアン……高貴の血……その呪われた力の故に、彼女は、父母の手によって、愛に溢れた美しき牢獄に、人形のように封じられた……

あなたがこれまで目にしたものは、自らの居場所を得るため、乙女たち自らが選んだ人生での、試練の数々である。

そして今日、あなたが目にするのは、そうした人生に辿り着くまでの、乙女たちの悲しき魂の移ろいの記録である……

あ-1-10

サクラ大戦 前夜

あかほりさとる

監修・原案／レッドカンパニー

電撃文庫 ¥ 510

ISBN4-07-306199-2

C0193 ¥510E

発行◉メディアワークス
発売◉主婦の友社

定価：本体510円
※消費税が別に加算されます

あかほりさとる

1965年3月8日、愛知県生まれ。TVアニメ「NG騎士ラムネ&40」「キャッ党忍伝てやんでえ」「宇宙の騎士テッカマンブレード」などのシリーズ構成、脚本を務める。『小説・天空戦記シュラト』で小説デビュー。現在ノリにノッているマルチ・クリエイター。

【電撃文庫作品】

ソーサラー狩り 爆れつハンター 血封印
ソーサラー狩り 爆れつハンター② 魔法大工
ソーサラー狩り 爆れつハンター③ 転輪王〈前編〉
ソーサラー狩り 爆れつハンター④ 転輪王〈後編〉
ソーサラー狩り 爆れつハンター⑤ 魔人形
ソーサラー狩り 爆れつハンター⑥ 黒衣の聖母
ソーサラー狩り 爆れつハンター Special①
ソーサラー狩り 爆れつハンター Special②
ソーサラー狩り 爆れつハンター Special③
サクラ大戦 前夜

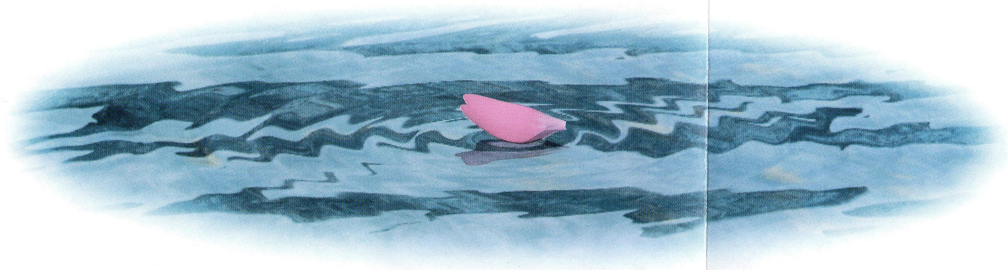
イラスト：松原秀典

OVAやゲームの作画、キャラデザ等で活躍の実力派。「ああっ女神さまっ」（OVA）等多くの人気作品を手掛ける。本作「サクラ大戦」でも総作画監督を務める。スタジオゑびす所属。

カバー／加藤製版印刷

サクラ大戦
前夜
あかほりさとる
監修・原案／レッドカンパニー
電撃文庫0175

電撃文庫
0175

DENGEKI BUNKO

サクラ大戦

前夜

あかほりさとる

監修・原案／レッドカンパニー
セガサターンソフト「サクラ大戦」より

prelude

サクラ大戦

前夜

あかほりさとる
カバー・口絵・本文イラスト／松原秀典

監修・原案／レッドカンパニー
セガサターンソフト「サクラ大戦」より

カバー・口絵・本文デザイン／小林博明（Ｋプラスアートワークス）

序　太正浪漫への扉

1

祖父が死んだ。
享年八十八歳。まさに大往生と言える。
最後まで寝たきりになることなく、少しばかり呆けはあったが、それでも健康を維持し続けた。直接の死因は肺炎。あっけないといえばあっけない。
とにもかくにも、僕にとっては初の身内の死であり、すべての予定をキャンセルして実家に帰ることにした。
ちょうどそのときはレッドカンパニーに新しい企画の打ち合わせで行こうとしていたのだが、残念ながらそれも延期となった。ひさしぶりの浅草で軽く一杯やりたかったのだが……。
電話口に出た広井（王子）さんは、
「そういうことなら行ってきなよ」
と、予定をキャンセルしたことにも怒った様子はなく、快く送り出してくれた。ただ、最後にひとこと、
「残念だなぁ……こいつをポリちゃんに見せたかったんだけど……」

ポツリともらしたそのひとことが妙に耳に残った。〝こいつ〟……なんだろ？人を驚かせることに関しては、業界で間違いなく一位であろう、広井さんの見せたいもの……。

（見たいなぁ……）

一瞬、帰るのをやめようかと本気で思ったほどだ。考えてみれば、祖父とはもう十年ほどちゃんと会っていない。十八歳のとき東京に出てきて、それからほとんど実家に帰っていなかったからだ。

それでも結局最後は〝身内の死〟という、必ず体験せねばならない初の行事が勝った。僕はやはり東京に出てきて漫画家をやっている妹と一緒に、最終の新幹線で愛知県に向かった。

2

僕の実家は愛知県半田市にある。

祖父、祖母、父、母、いずれも生まれは東京であったが、戦争の空襲から逃れて、ここにやってきたのだ。もっとも、そう聞かされていたのだが、近くに中島飛行機の工場があったことを知り、そちらで働くよう徴用されたというところが真相だと思う。

終戦後もそのままこの地に居着いてしまったため、僕は江戸っ子になる機会を永遠に逃してしまった。もしあのまま一家が東京に留まっていたら、僕も浅草あたりで成人して、レッドカンパニーに入社していたかもしれない。

閑話休題。

家に帰ると、すでに遺体は棺に収められ、仏間にあった。仏間といっても、もともと祖父の部屋だから、病院から自分の部屋に戻ってきたわけだ。

実際、訃報を聞いたときは、格別な感情はわかなかったが、こうして物言わなくなった祖父と対面すると、やはり改めて悲しみというものがこみ上げてくる。見ると妹は泣いていた。もしかすると僕も涙を流していたかもしれない。

赤堀初太郎。明治三十九年生まれ。

取り立てて波乱もなく、平凡な一生といえるか……。いや、波乱はあった。関東大震災、太平洋戦争、伊勢湾台風……古今未曾有な災害をいくつもくぐり抜けてきたという波乱が。

「おじいちゃんね、最後に悟に渡したい物があるって言ってたんだけど……」

「えっ？」

「なんなのかを言う前に……」

「……………」

祖母の話に、思わず目頭が熱くなる。

感慨深げに、僕はしばらくの間、棺の前に座っていた。子供の頃からの祖父との思い出も次々と浮かんでくる。

にぎやかでお調子者の僕とは違い、祖父は頑固で寡黙な人だった。さすがは明治男とでもいうべきか。よく怒られもしたが、時々そっと小遣いをくれたりもした。小さい頃、少し離れたところにある町工場で働いていた祖父を迎えに行くのが僕の日課だった。僕の姿を見ると、祖父は大きく手を振って、ニコニコ笑っていた。そして、帰りに必ず駄菓子屋に寄ってくれるのだ。そこで一回三十円のくじを引き、そして……。

もう、よそう。

「あれ……？」

思い出に浸るのをやめて、顔を上げた僕の目に飛び込んできたのは、箪笥の上にある、妙に古びた冊子だった。本……らしいけど……なんだ？

普通なら気にもかけなかったかもしれない。けれど、この日は違った。感傷的になっている僕は祖父のニオイのするものをとにかく目にしたかったのだ。

立ち上がり、手にとってみると、それは古びた日記帳だった。古びた……そう、実に古いものだ。表紙にかすれた文字で「太正十二年」とある。

「へえ……」
いつしか僕は頁（ページ）をめくっていた。
達筆（たっぴつ）だ。筆でしっかりと書いてある。悪筆の僕と違って、祖父は字がうまく、よく近所でも書き物を頼（たの）まれていたことを思い出した。
「あれ……？」
内容を読むというよりも、ただ文字面（づら）を見ていただけの僕だったが、いつしか奇妙（きみょう）な違和（いわ）感（かん）に囚（とら）われた。……なにかおかしい。
「あっ！」
気がついたようにもう一度表紙を見る。
『太正十二年』
そうだ。表紙も、そして文中に出てくる「太正」という文字も、「たい」の字がすべて点、が多いのだ。正しくは「大正」のはずだ。
「なんでこんな間違いしたんだろ……？」
それとも昔（むかし）は「太正」とでも言ったのかしら？
座り込んで考えているうちに、僕は帰郷（ききょう）の疲（つか）れから眠ってしまったらしい。
そして、僕は夢を見たのだ。あの夢を。

3

猛火の中、僕は走っていた。
右を向いても左を向いても、紅蓮の炎に覆われている。建物の崩れる音とともに聞こえてくるのは、人々の悲鳴。
この世の終わりだ。帝都、最期の日だ。
炎と煙の中で、やがて僕も死ぬだろう。そう考えながらもこう走るのは、やはり死ぬのが怖いからか？　果たして、僕はいったいどこに向かって走っているのか？　浅草も銀座も火に包まれて、みんな死んでしまったという噂を聞いた。真偽のほどはわからない。けれど、さもありなんと思う。これだけの炎、そしてこれだけの悲鳴なのだ。嗚呼……僕も死ぬ。もうすぐ死ぬ……。
「初太郎君！　初太郎君！」
呼ぶ声に、僕はようやく我に返った。どこまで走ってきたのか？　ここはどこだ？
視界の中に、煤だらけだが見知った顔が飛び込んでくる。
「広井さん？　広井星司さんですか？」

「そうだよ。よかった、無事だったか、初太郎君(はったろうくん)」
「広井(ひろい)さん、こいつはいったい？」
「戦争だよ」
「戦争？　どことです？　まさか露西亜(ロシア)の赤軍(せきぐん)が攻めてきたとか？」
「違う、違う！　君も噂(うわさ)だけは聞いているだろう！　黒之巣会(くろのすかい)だよ」
「黒之巣会⁉　それって……あの！」
「そうだ。今、この日本橋(にほんばし)で大々的な戦闘(せんとう)が行われているらしい」
「ここは日本橋だったのか……。陸軍(りくぐん)が動いてくれたのですね」
「いや、違う」
「えっ？」
「これはここだけの話にしておいてくれたまえ。戦っているのは帝國華撃団(ていこくかげきだん)だよ」
「帝國華撃団？」
そのとき、僕は煙の向こうに見た。重厚(じゅうこう)な鋼鉄(こうてつ)の塊(かたまり)を。それは本で見た、米国(アメリカ)の人型蒸気兵器(ひとがたじょうきへいき)に近い形をしていた。
「あれは……⁉」
「あれが帝國華撃団さ！」

「あれが……」
「さ、こうしちゃいられない！　鈴野君を探して、ここを逃げよう！」
「えっ？　鈴野君が？」
「やっこさん、好奇心の塊のような男だからな。噂を聞いて、ここに飛んで来たらしいんだ！
結局、心配で僕も来ちまったが……」
「わかりました！　僕も手伝います！　早く、鈴野君を！」
そのときだ。すぐそばで爆音が響いた。
「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」
僕も広井さんも凄まじい風に吹き飛ばされた。薄れゆく視界の中で、さっき見た人型蒸気兵器とは違う、邪悪な魔繰機兵が炎の中で崩れていくのがわかった。

4

祖父の葬式も無事に終わり、僕は東京に戻ってきた。
身内が死んだからといって、その後の生活が変わるわけではない。遅れた時間を取り戻すため、すぐにその日から仕事が待っていた。

浅草のレッドカンパニーに行くと、広井さんが待ちかねたように飛んできた。悔やみの言葉もそこそこに、広井さんはなにかを僕に見せたくてたまらないらしかった。
「ポリちゃんさ、これだよ、これ！　これ見てよ！」
「えっ？」
広井さんが取り出したのは非常に古びた本だ。表紙に『サクラ』と書いてある。著者は『鈴野十浪』……えっ？　鈴野⁉
「広井さん、これは？」
「これはさ、一九一二年に自費出版された小説なんだけどね。いやはや、おもしろい！　この時代にこんなことを考える人間がいたとはね！　架空年号『太正』（ほら、こんなふうに点があるんだ！）の中で戦う人型蒸気兵器を駆る乙女たちと、悪の魔繰兵器！　五十年ほど出るのが早かったよねえ！」
「えっ？　えっ⁉」
「実家の蔵で見つけたんだけどさ！　オレさ、こいつをアレンジして、ゲームにしてやろうと思うんだよね！　どう、ポリちゃん、一緒にやらない⁉」
僕はそのとき、呆然と、興奮する広井さんの顔を見つめていた。
あの奇妙な夢の中で見た青年の面影がそこにはあった。

「あの、広井さん、つかぬことを聞きますけど……広井さんの身内に、広井星司さんってい
らっしゃいませんか？」
「はん？　うちの爺さんだけど、それがどうかした？」
「あ……」
僕はしばらくの間、口をあんぐりと開けて、惚けたまま、その場に立ち尽くしていた。
「このゲームのタイトルはさぁ……そう、『サクラ大戦』！　『サクラ大戦』、いいだろ！
さっき公平さんと話してて、音楽はもう頼んじゃったから……あとは……そうそう、サター
ンだよ、サターン！　この間からセガとゲームやろうって話があって……絵は藤島さんに頼
めないかな……あと……」
広井さんの言葉が次々と耳から入ってくる。
広井さん、あなたはすごいことをやろうとしているんですよ！　それ、もしかしたら、本
当にあったことかもしれないんですから。隠されている歴史かもしれないんですから。
ふと思った。
あの夢が、きっと祖父の渡したいものだったに違いない。
「どうした、ポリちゃん？」
「あ、いえ……」

祖父の最後の贈り物はとんでもなく素晴らしいものだった。
おじいちゃん……ありがとう。安らかに。

オーホッホホホッ！
私、神崎すみれはえらばれるべく選ばれた、
花組のエリートですわ！
そう！　私は常にトップでなければ！
でも……。
次回「サクラ大戦　前夜　第一話」。
太正櫻に浪漫の嵐！
私の気持ち……だれも知らない。

第一話

1

華族という制度がある。

一八六九年（明治二年――「明治」ではない）の版籍奉還（新政府の政策の一環で、全国の各藩主に領地と人民を朝廷に返還させた。これがやがて廃藩置県に繋がり、現在と変わらぬ県が誕生する）のとき、当時の布達（明治十九年二月に公文式の制定以前に発布された行政命令のこと）にこうある。

「官武一途上下協同之思食ヲ以テ、自今公卿・諸侯ノ称廃セラレ、改メテ華族ト称スベク旨仰出サレ候事」

要するに従来の公家と大名諸侯を称して華族と呼ぶこととなったのだ。ただし、これは名ばかりの尊称で、経済的特権があったわけではない。明治維新という荒波の中に放り出され、すべての特権を失った公家と大名にせめて名誉だけは与えて、彼らの自尊心をくすぐり不満を抑えようとしたわけだ。

この華族は一八八四年（明治十七年）七月七日の華族令制定で正式に制度として完成される。すなわち、公爵、侯爵、伯爵、子爵、男爵の五爵制が誕生して、欧州の貴族と同じよう

に爵位を名乗るようになった。

少し長くなるがこの叙爵内規について少し述べてみたい。どうやったら叙爵される（華族になれる）かという規定だ。

公爵は「親王諸王ヨリ臣下ニ列セラルル者」「旧摂家」「徳川宗家」「国家ニ偉勲アル者」。

侯爵は「旧清華」「徳川旧三家」「旧大藩知事（十五万石以上）」「旧琉球藩王」「国家ニ偉功アル者」。

伯爵は「大納言迄宣任ノ例多キ旧堂上」「徳川旧三卿」「旧中藩知事（五万石以上）」「国家ニ偉功アル者」。

子爵は「一新前家ヲ起シタル旧堂上」「旧小藩主（五万石未満）」「国家ニ偉功アル者」。

最後に男爵は「一新後華族ニ列セラレタル者」「国家ニ偉功アル者」。

見てもらえばわかるとおり、必ず「国家ニ云々」という項目がある。これが華族の創出を非常に柔軟なものにしていた。

つまり、華族はその後も増え続けたのだ。大功ある軍人、成功した実業家。社会的地位が上がれば名誉を欲しがる者は多い。

そうした新興華族は、その経済的な富裕さとは反対に伝統を重んじる華族からは反発を受けていた。

そして、神崎家もそうした新興華族であった。

2

ガタ……

「今回も満点はただ一人。神崎すみれさんです」
やや肥満気味の中年女教師の声が教室に響きわたると、わずかなざわめきが走った。

一人の少女が静かに立ち上がる。髪を肩のところで切りそろえた美少女だ。かわいらしくリボンが後ろで結ばれている。気の強そうな瞳はまっすぐと前を見つめ、その誇らしげな表情には自信があふれていた。

すみれはゆっくりと教卓に向かって歩いた。それは一つの儀式。そう、彼女にとって同級生の前でこの答案を受け取ることは儀式なのだ。決して自慢というわけではない。これは彼女にとって使命ともいうべきことだった。

「お見事です、すみれさん。国語、英語、算術、幾何、ダンス。すべての試験に入学してか

らずっと満点を続けているのは我が校はじまって以来の快挙です。あなたはこの女子学習院の誇りです」

女子学習院は明治十八年に創設された華族女学校の後身であり、華族だけが通える特別な学校であった。故に管轄も文部省ではなく宮内省である。普通、華族の女子は女子学習院付属幼稚園から、六歳で女子学習院小学科に入る。従来、女子学習院は六年制の小学科、五年制の中学科、そしてさらにその上に二年制の高等科からなっていたが、太正十一年四月から制度がかわり、小学科と中学科をあわせて十一年の本科となり、さらにそれが前期四年、中期四年、後期三年に分かれた。

時は太正十一年。すみれ、十五歳。女子学習院本科後期一年生のときのことである。

「さあ、すみれさん。このまま精進し、日本の良き母、良き妻となってくださいね」

目の前の中年の女教師の口癖は常に〝良き母、良き妻〟であった。まだまだ男女差別の激しかった時代である。いかにレベルの高い女学校といえども、所詮は超高級花嫁学校にすぎない。

「はい、先生」

素直に微笑みすら浮かべながら返事をしても、すみれの頭の中では別の思いがあった。

（わたくしはそんなものにはならないわ）

家に縛られることを強制され、それをあたりまえのように受け止めていた当時の女学生たちの中ではすみれは異質であった。特に華族の女子としては。

答案を受け取り、振り向いたすみれを待っていたのは羨望と憧れの視線だった。女の園の中で抜きん出た人物は時として憧れ、さらには恋の対象となる。そして、すみれは学業でも運動でも社交的な作法でも、すべてにおいて他の者を引き離していた。

「…………」

ただすみれは知っていた。その中に明らかな悪意の視線が混ざっていたことに。その数も決して少なくはないことを。

「すみれ様」

校門に向かって歩いているすみれは背後から聞こえてきた声に振り向いた。

すみれを追って走ってきたのか、息を切らした幼い顔の少女の顔にはほんのりと赤みがかかっている。

「雪子様」

すみれが今日一番の笑みを浮かべた。それは教師などに向かって浮かべる笑みとは違い、真摯な喜びにあふれていた。

少女は綾乃麿雪子。藤原一族清華家に連なる名門で、綾乃麿侯爵の娘であった。
「どうなさいました、雪子様？」
すみれはやさしく雪子に語りかけた。
「あの……その……今日はまだすみれ様とお話をしていなかったから……」
雪子がはにかんだ調子で言う。すみれは雪子にとって憧れの人物だった。なにもかもが一番で、それでいてやさしい。敢えて誤解を招く言い方をするならば、雪子はこのときすみれに恋していた。男に接することがほとんどない雪子にしてみれば、すみれこそが理想だったといっても過言ではない。
「よろしいですわ。では、雪子様のお宅までお送りしましょう」
すみれは雪子の手をとった。
それだけで雪子の顔はもう見ていられないほど真っ赤になる。そんな雪子がすみれはかわいくてしかたないらしかった。
雪子は学校において、すみれのほとんど唯一の心休まる存在であった。同級生のすみれを見る目は、憧れ、恐れ、羨望嫉妬、そして蔑み。神崎男爵家は所詮彼女らにとって異端の者だ。華族と認めているのは国であり、人ではなかった。
けれど雪子は違った。すみれのことを心から慕っている。純粋無垢に育てられた雪子には

人を憎む、人を蔑むといったことすらなかったのだ。

「さあ、雪子様」

校門を出ると少し先の路地に黒塗りの蒸気自動車が止まっている。ようやく道を走っても人々の好奇の目がなくなったとはいえ、車は庶民にとっては高嶺の花であった。女子学習院とはいえ、車での送り迎えはほとんどいない。すみれはその数少ない一人だった。

車自体はそう大きいものではない。米国の有名な大衆蒸気車T型フォードを基に、すみれの実家の神崎重工が設計し直した〝彗馬〟だ。設計者の間ではT型フォードに対して、蒸気煙突が特徴的なことから「ケ型」などと呼ばれていた。米国の大衆車は日本では高級車であった。

バフォン……バフォン……

すみれと雪子を乗せると、ケ型は走り出した。蒸気エンジン特有の白い蒸気を上空に吐き出しながら。

「わぁ……」

車中、雪子は外を見て、無邪気に喜びの声をあふれさせていた。雪子の家に車はない。移

り変わる景色をこれほどまでに堪能できるのは、親族会議のため京都に蒸気列車で行くとき以外、ときどきすみれに乗せてもらうこの車だけだった。
「雪子様はお車がお好きですか？」
なにげにすみれは話しかけた。
「はい。すみれ様はいいなぁ。いつもお車に乗られて」
「そんな、わたくしなど……。今、お父様の会社が車を安くしようと努力されていますわ。すぐに雪子様のおうちにも……」
「うち……お金がないんです」
少し表情を曇らせて、雪子が言った。
「えっ？」
「お父様もお母様もなにもおっしゃらないけど、最近は……喧嘩も絶えなくて……」
「雪子様……」
雪子はそのまま黙り込んでしまった。雪子が自分から自分の家のことを言うのは初めてのことだった。
このころ、江戸時代まで特権階級として生きてきた華族は、そのほとんどが窮乏に瀕していた。政府から特別に経済的援助があるわけでもなし、先祖伝来の土地は才覚に長けた商人

に奪われた。これが封建社会ならば城や屋敷まで取られることはなかったが、すでに資本主義の世の中だ。

雪子の綾乃麿家も慣れない事業に手を出して失敗し、経済的に苦しくなっていたことはすみれも人づてに聞いていた。それが雪子自身の口から出ようとは。

「ごめんなさい、すみれ様。つまらないことを言ってしまって」

「そんなことありませんわ」

「あ、そうだ、すみれ様。一つお聞きしたいことがあるんですけど」

「なんですの?」

「〝成金〟ってなんですの?」

「えっ!?」

すみれは愕然と雪子を見た。

雪子は無邪気に微笑んだままだ。だれに聞かされたかはわからない。雪子は本当になにも知らないのだ。

「それは……」

すみれは硬直したように雪子の顔を見つめたまま、言い淀んだ。

ちょうどそのときだった。今まで黙っていた運転手の岡村が口を挟んだのは。

「お嬢様、綾乃麿様のお宅に着きました」
初老の運転手は車を止めると、素早く外に出て、雪子の側の扉を開けた。
「すみれ様、今日はありがとうございました」
先ほどの質問で起こった波乱などまるで知らずに、雪子は深々と頭を下げると外に出た。
「では、雪子様……」
すみれは必死に笑みを作った。これもまた儀式……。その笑みは校門で雪子に話しかけられたときの笑みとは明らかに違っていた。
雪子が屋敷の門をくぐったとき、中には一人の女性が立って雪子を待っていた。女性は雪子ではなく、車に乗ったすみれを見ていた。
刺さるような視線——
「お母様」
雪子の声が聞こえる。
すみれと雪子の母親の視線が合う。一瞬のことだ。が、その瞬間、すみれの耳には雪子の声でさっきの言葉が響いていた。
『成金』
車が動き出したことにすみれはしばらくの間気がつかなかった。

「お嬢様」
岡村の声でようやく我に返る。
「お気になさらないように」
「わかってるわ！」
すみれは反発したように叫んだ。

3

すみれの家、神崎家は代々小田原藩大久保家に仕える下級武士であった。
武士とはいっても無役であり、城への出仕などもすることはなく、わずかな扶持米をもらって暮らしを立てていた。
とはいえ、それで暮らしが立つほど世の中甘くなく、家の者はすべからく内職に勤しんでいた。
ただ神崎家が特殊なのは、当主の内職というのが、城の女に薙刀を教えることにあった。
薙刀は元は「長刀」と書き、その起源は遠く平安時代に見ることができる。南北朝時代に五尺、七尺という長い刀の登場で、次第に「薙刀」という字を当てるようになったとある。

けれど、神崎家では、江戸初期の神崎万次郎によって神崎風塵流が創始されたときから「長刀」の文字を使っていた。

神崎風塵流はその優雅な動きから、実践よりも形式美を求める奥の者たちにまで愛用されるようになる。

ただすでに天下太平。将軍家武芸指南役から大名にまでのし上がった柳生家のごとき事は起こりようもなかった。

たとえ武士といえども、上下の区分がはっきりついている封建社会において、神崎家はずっと下の地位に甘んじ、貧窮に喘いでいた。

変革の時が来たのは幕末においてである。

黒船の来航に始まる一連の外圧で日本が変わろうとしていた。二百数十年の間たまりにたまった封建社会の膿は吹き出し、尊皇か佐幕か、攘夷か開国かで国は割れ、心ある若者たちは次々と脱藩し志士となって活動を始めた。

すみれの祖父、若き日の神崎忠義もその一人であった。

ただ、忠義の考え方は普通の志士とは違っていた。その意味では忠義は志士とは言えなかったかもしれない。彼は単純に外国に憧れていたのだ。

これには小田原藩の場所的なことも大きく関わっているかもしれない。開いたばかりの外

国との窓口である横浜が近く、洪水ともいえるほどの情報が忠義の耳に入ってきていた。もちろん中にははなはだ誇張されたこともあったが。この時代、通信手段はまだまだ貧弱で、情報源に位置的に近いことがなによりも情報通になる方法であった。

外国という見知らぬ地への想いが、まだ少年といっても差し支えがない忠義の心を日に日にたぎらせた。寝ても覚めても忠義が思うことは自ら異国の地を足で踏むことであり、頭の中で外国は仏教でいう極楽浄土そのものとなっていた。

維新前夜。十六歳になった忠義はついに決意した。

脱藩し、横浜に走る。すでに幕藩体制は崩壊していたに等しかったが、まだまだ脱藩は重罪であった。日々藩の方向性に身を削り取られる思いをしている上役たちがそのストレスの解消をそうしたスタンド行為を起こした者の一族で行うことは十分考えられた。事実、忠義の老いた父親はささいな理由から切腹させられた。藩内を引き締めようとした藩重役たちの見せしめであることは明らかだった。

そうした事態がわかっていながら、忠義は出奔した。これにはもちろん家族全員の同意があった。神崎家はその長男にすべてを賭けたのだ。

横浜につくと忠義は密航して米国に渡った。

米国についたのが一八六一年春。

米国では南北戦争が始まろうとしていた。

米国の南北戦争は歴史の書にもっとも悲惨な市民戦争とある。だがその側面にはもう一つの暗黒の事実がある。すなわち、世界最初の大規模な「魔術戦争」。

南北戦争当初、リンカーン率いるアメリカ合衆国（北部）は人口二二〇〇万。戦争に耐えうる戦闘人口は四〇〇万人で、労働人口に至っては一一〇万人。国の五分の四の工業製品と三分の二の食料を生産していた。

一方、ジェファーソン・ディヴィス率いる南部連合政府は人口九〇〇万人。戦争に耐える戦闘人口は一二〇万人。労働人口は一〇万人でしかなく、北部に勝る産業は奴隷を大量に使役した綿花栽培しかなかった。

両者の力の差は歴然としていて、戦争が開始されれば一年のうちに南部は北軍に蹂躙されるだろうと言われていた。

しかし、一八六二年五月、南軍総司令官アルバート・ジョンストン将軍が戦死し、名将リー将軍が総司令官となると、戦況は一変した。リーは南軍勝利のためにあらゆる手段を試すことを厭わなかった。それが極めてオカルトに近く、荒唐無稽なものであっても。

かくして、ブードゥー教徒呪殺部隊を擁した南軍が圧倒的勝利を収めていく。戦場に響き

わたったブードゥーの呪殺の声は一瞬にして北軍の将兵を死に至らしめた。ブードゥーのマクンバ（呪殺時）が過ぎ去った後の戦場は累々と転がる死体で大地が見えなかったほどであった。
北軍は焦っていた。南軍の圧倒的な攻勢の前にワシントンD.C.は陥落寸前。魔術には魔術をとばかり招いたトランシルバニアの魔導士協会の連中もブードゥーの前に次々と狂死する有様だった。
ところがそんな北軍を一つの戦いが救うことになる。
時は一八六三年七月一日。場所はペンシルヴァニア州ゲティスバーグ。
これに負けると北軍は後がなかった。首都は南軍の軍靴に踏みにじられる。
いつものように北軍をブードゥーのマクンバが襲う。このころの北軍の戦術は、マクンバによって死ぬ者は折り込み済み。その後の戦力でいかに相手と戦うかというものであった。
マクンバは一日に一度しか使えない。
ところがこの初日のマクンバで生存者がいたのだ。戦場に近い村、すでに実用化されていた蒸気トラクターの中に置き去りにされた赤ん坊。
「蒸気トラクターだと⁉」
当時の北軍の総司令官ジョージ・ゴードン・ミードは藁にもすがる思いでこれに飛びついた。

赤ん坊が助かったのと同種のトラクターがかき集められ、二日目のマクンバの最中に突撃を敢行したのだ。
マクンバに絶対の信頼を置いていた南軍はこの突撃によって完全に虚をつかれた。前線に出ていたブードゥーの呪殺部隊が次々と血祭りに上げられ、トラクターの部隊の開けた穴に北軍の各隊が飛び込んだ。
七月三日。ついに南軍の戦線は崩壊し、リーは部隊を退却させる。
米国史上、『ゲティスバーグの奇跡』と呼ばれることになる戦いはここに終わった。
戦いの後、北は科学者、オカルティストを総動員して赤ん坊を救った蒸気トラクターを調査した。
その蒸気トラクターは安さを追求するあまり、鋳造のしやすい鉛を鉄に配合していたことがわかった。
鉛と鉄が性能の悪い高炉のような不安定な環境でまれに起こす結晶化。それこそが妖力を防ぐ特殊鋼。この特殊鋼は『シルスウス鋼』と名付けられた。
北軍は戦争時における爆発的な兵器の進歩のお手本のように、トラクターを進化させ、シルスウス鋼の装甲をまとった『人型蒸気』を造り出し、各戦線に投入した。
これにより戦局は決定的となり、一八六五年四月、南部の首都リッチモンドが陥落し、リ

―将軍も降伏した。
ここに南北戦争は終結したのである。
忠義が日本に帰国したのはこの一年後だった。

この間のことを忠義は帰国後も決して語ろうとしなかった。
ただ、凄まじい体験をしたことだけは間違いなかった。
後年、すみれが祖父の忠義に一度だけ聞いたことがある。おじいさまの若い頃はどうでしたか、と。
そのとき忠義はただ一言、
「地獄だった……」
そう言ったきり口をつぐんでしまったということだ。
晴れやかで希望にあふれていた忠義の表情は帰国後見る影もなく、どこか猜疑的で、人を信じず、人を出し抜くことに才知を傾けるようになっていた。自分の出奔で父親を死なせてしまったことに対する反動か、忠義は家族を非常に大切にした。が、その反面、他人には冷徹の仮面をもって接し、決して自らの心を明かそうとはしなかった。
帰国した忠義がまずしたことは幕府に対して米国の人型蒸気の輸入を働きかけることだっ

た。

一介の下級武士に過ぎなかった忠義の言葉を幕府が受け入れたことは今でも不思議に思われている。が、それほど幕府は追いつめられていた。

一八六七年、忠義は二度目の渡米を果たす。今度は徳川幕府の重臣として。忠義に与えられた肩書きは幕府蒸気隊隊長。このころ、薩長を中心とした西国雄藩でも幕府でもやたらと隊が頻発されていた。蒸気隊という名称もその一つだったのだろう。それでも幕府の正式な役職であることは変わりない。

忠義は南北戦争で成り上がった米モトロール社と交渉に入り、法外な値段ながらも買い付けに成功した。当時人型蒸気の輸出は認められておらず、その決定を曲げるために必要な金額が含まれていたという。忠義にしてみれば自分の懐が痛むわけでもなく、値段などいくらでもよかった。ともかく、忠義の目的はなんとしても人型蒸気を日本に持っていくことにあった。

それはなぜか？

忠義が操縦者乗り込み型人型蒸気「スタア」を持ち帰った一八六八年。幕府はすでに大政奉還し、戊辰戦争は始まっていた。

ここで一つの重大な犯罪が発生する。

忠義はスタアを操縦し(驚いたことに忠義は巧みにスタアを操縦することができた。おそらく南北戦争の間に覚えたのだろうと思われる)、日本にたどり着いたその日のうちに隠匿したのだ。

幕府の崩壊により、忠義と人型蒸気の資料は散逸しており、維新後このことが問題になることはなかった。というよりも新たな政府を構成した者たちは人型蒸気の存在すら知らなかった。

忠義がふたたび表の世界に顔を出すのは年号が明治となって四年目のことである。

忠義この年二十六歳。

忠義は神崎蒸気商会(後の神崎重工)を開設。創立時のメンバーには幕府によって欧米で工学を学んでいた加藤四郎、松本孝雄(後にタカ夫)がいる。

忠義は新政府に対して、猛然と人型蒸気を売り込んだ。しかも国産の人型蒸気というふれこみで。人型蒸気の兵器としての性能を説いて回った。

結局、富国強兵をスローガンに掲げていた政府はこれに乗った。神崎蒸気商会は政府から毎年補助金が与えられ、忠義は事業を拡大した。

一八七三年(明治五年)、国産初の人型蒸気「富士」が完成するが、それはまだ洗練されたものではなく、実用にはほど遠かった。

それでもそのころにはまたしても情勢が忠義に有利になっていた。米国（アメリカ）に独占（どくせん）されていた人型蒸気が海外に多数流出し、各国がこぞって兵器としての人型蒸気の開発に乗り出したのだ。もはや忠義の事業を邪魔（じゃま）するものはなにもなかった。「富士」から十年の歳月（さいげつ）をかけて、すべての国産人型蒸気のプロトタイプともいえる「天神（てんじん）」が完成。天神そのものは実戦配備（はいび）されることはなかったが、これを発展させて次々と軍用の人型蒸気が作られていった。

この十年の間に神崎蒸気商会は神崎重工業株式会社となり、拡大された事業はいくつかの会社となって神崎財閥（ざいばつ）を成していた。

一八八四年（明治十六年）、神崎忠義は「国家ニ偉功アリ」ということで、男爵（だんしゃく）の爵位（しゃくい）が贈（おく）られた。

この日より神崎家は華族（かぞく）の仲間入りをしたのだった。

4

ガタン……ガコン……

車の振動がすみれの身体（からだ）にも響いてくる。この当時、どこもかしこも舗装（ほそう）されているとい

うわけではない。というよりも舗装されている道など、たとえば銀座の煉瓦が敷き詰められた道などをのぞけば皆無と言ってよかった。そのため、車に乗っているとかなり揺れる。しかし、その振動もすみれを沈黙の世界から引きずり戻すことはできなかった。

「………」

すみれはボーッと虚空を見つめていた。

(わたくしはいったい毎日、なにをやっているのかしら……)

むなしい思いがある。がむしゃらにやってきた日々を振り返ったとき、すみれはそこになに一つ充実感を見いだせないでいた。

(成金……)

その言葉がすみれの頭を駆け巡る。

おそらく他のだれに言われたとしてもこれほどの衝撃はなかっただろう。いや、むしろ負け犬の遠吠え程度の感慨しか抱かなかったに違いない。しかし、その言葉は他ならぬ雪子の口から出たのだ。たとえ本人はその意味を知らなかったとしても、雪子のまわりの人間がそう思っていることは間違いなかった。

(もし雪子様がその意味を知ったとき、わたくしのことをどう思うのかしら……?)

怒りというよりも、すみれは猛烈に哀しい気持ちに襲われた。

何不自由なく育てられた少女時代。しかし、それは華族という特異な社会を知った途端、なんの意味もなさないことをわからせられた。まわりから受けるのは蔑みと嫉妬の目。

（だからこそわたくしは負けるわけにはいかないのですわ！）

すみれにできたことは勝ち続けることだった。学業でも運動でも作法でも、あらゆることで他の者に勝ち続ければ、少なくとも表立って何か言われることはない。

……しかし、それでなんだというのだ。表立って出ないだけで、彼らの中に新興華族、もっと言ってしまえば神崎家のような成金に対し差別意識があるのは変わりない。

そしてそれは陰で言われれば言われるほど、知ったときにすみれの気持ちをまるで千枚通しのように鋭く突き刺すのだ。

（なんか疲れてしまいましたわ……）

いったい自分は日々なにをやっているのか、こんなことをし続けてどうなるのか、そして将来どうしたいのか？

この時代、普通に考えれば、このまま女子学習院を卒業し、しかるべき人間と見合いして結婚し子を成す——それがあたりまえだった。

なんといってもすみれは神崎家の一人娘。神崎財閥は彼女と彼女の夫に引き継がれることになる。すでに両親の元には先を見越した財界人、政治家から縁談が無数に持ち込まれてい

た。神崎家を蔑んできた大華族ですらもその中にいた。
しかし、すみれはそんなことはまるで興味なかった。というよりも、結婚する気などまるでなかった。
日々のなんともいえぬこの欠乏感。心の飢餓感。それに対する答えを見つけることが今のすみれにとって唯一の目的であったといってよい。
妬みや嫉みとは無縁の、やりがい、生き甲斐を感じさせるなにか！
求めてやまないそれはいったいなんだというのか⁉

キイイイイ……

車が急ブレーキをかけ、すみれの思考は中断された。
「なんですの？」
岡村が前方を怪訝な表情で見つめている。
「ちょっと騒いでいる者たちがおりまして」
「えっ？」
すでに神崎家の豪邸の長い壁の前に車は差しかかっている。正門は目の前だ。

が、そこには五、六人、いやそれ以上の男たちが押しかけて騒いでいた。すみれの家の書生や使用人たちと激しくもみ合っている。
男たちはいずれも黒い股引きにどんぶり腹掛け、そして地下足袋といういでたちで、中には黒い三角笠をかぶっている者までいる。彼らが人力車の車夫であることはすぐに知れた。
怒声が響く。
「社長に会わせろ！」
「神崎重樹、出てこいっ！」
「オレたちの仕事を奪おうとしやがって！」
彼らの押しかけた意味を理解して、すみれは小さくタメ息をついた。
「またですわね……」
人力車は明治二年、東京日本橋で料理人をしていた和泉要助が輦台（江戸時代に川を渡る人を乗せてかついだ台）と西洋馬車からヒントを得て考案したのが始まりだ。最盛期には二万五〇〇〇台を超える人力車が帝都を走り回っていた。
が、ここに来て人力車業界は非常な危機感を抱いていた。
蒸気自動車の出現がそれである。
日本のモータリゼーション（自動車が広く普及し使われること）実現を目指す神崎重工が

中心となって日本蒸気自動車協会が設立されたのがこの太正十一年一月。神崎重工社長であり、すみれの父である神崎重樹は、日本蒸気自動車協会初代総裁の就任の記者会見でこう豪語した。

「あと五年でこの帝都から人力車を消してごらんにいれましょう！」

これが車夫たちの反感を買った。そのうえ実際に少しずつではあるが、蒸気自動車を街で見かけるようになり、焦った車夫たちの一部跳ねっ返りが実力行使に出るようになったのである。具体的には、日本蒸気自動車協会に抗議文を手渡すといった活動だったが、実際は主だった幹部の自宅に押しかけ暴れ回るという一種のいやがらせであった。

「お嬢様、裏口のほうから……」

「待って。この神崎すみれがあのような者たちに背中を見せることは我慢なりません。どかぬのならどかすまで」

「……わかりました」

岡村が車を発進させた。

「はへ⁉」

間近までケ型が迫ってきたのを見て、車夫の一人がす頓狂な声をあげた。

車はスピードを緩めず、そのまま門に突っ込んでいく。
「う、うわぁっ！」
さすがの車夫たちも暴れるのをやめて、いっせいに横に飛び退く。
車は門に入ったところで急に止まった。

ガチャ……

颯爽と降り立った少女に、車夫たちは目を丸くした。が、次の瞬間、腹を抱えて笑い出した。
「なにかと思えばガキか！」
「嬢ちゃん、いってえなんの用だい」
「おままごとならあっちへ行ってやってくんな！」
すみれはそんな嘲りの声に反応せず、手にしていた二本の棒を繋ぎ合わせた。棒はパチンと繋がり、木の長刀（薙刀）が出現していた。
「わたくしの出番ですわね」
すみれがニッコリ微笑んだ。

と同時に長刀が動いていた。
長刀を地面とほぼ水平に構えた中段の構えから、そのまま振り上げ一気に振り下ろす。上下振りの動作。続けざま、長刀を立てる八相の構えに移り、そこから斜めに振り下ろす斜め振りの動作。さらにはそれを逆に行う下からの斜め振り。最後は長刀の切っ先を背後に向けて持ち、真横に払う横振りの動作。
一連の連続技――八方振りを終えるのにすみれが要した時間はわずかに数秒。優雅さとダイナミックさを兼ね備え、見るものを魅了する動きだ。
「神崎風塵流 胡蝶の舞」
車夫たちはいずれも鳩尾を強く打たれ、その場に倒れ込んだ。全員見事に気絶している。
「ふん、たわいもないこと。……しかし、少しはすっきりしましたわ」
すみれは十五歳にしてすでに神崎風塵流免許皆伝の腕前だった。
すみれが屋敷の中に入っていくのを、少し離れた路地から見つめる影があった。
長い髪の女だ。このころはまだ珍しい、身体にぴったり合ったスーツを着ている。歳の頃は二十二、三。美女である。
「………」

彼女はすみれの姿が見えなくなると、一人納得したように小さくうなずいた。

5

屋敷に戻ったすみれを迎えたのは、神崎家の奥を取り仕切る女中頭のヤタであった。ヤタはめったなことでは感情を表に出さない女性で、今年五十を超える。すみれに対しても必要以上のことを言わないが、気がつくとヤタはよくすみれのそばにじっと立っていた。それはヤタなりのすみれへの気遣いだったのかもしれない。
「ただいま戻りましたわ」
「お帰りなさいませ、お嬢様」
「お父様とお母様は？」
「会社のお仕事と撮影のお仕事で遅くなるそうでございます」
「そう……」
わかっていた応えだった。
すみれの両親とも、家にいたことなどほとんどない。
すみれの父親、神崎重樹は神崎財閥の中核である神崎重工の社長で、もちろん神崎財閥の

代表でもある。青年時代英仏に留学し、英国流の洗練されたスマートさで社交界でも名を馳せていた。ただ父である忠義に比べて迫力に欠けるとの評判もある。
一方、すみれの母親、神崎雛子（旧姓冴木雛子、芸名冴木ひな）は銀幕のスターであった。
そもそも活動写真（映画）は一八九四年、発明王エジソンによるキネトスコープに端を発する。これは一人覗き穴から覗くと九十秒ほどの動く写真を見られる機械だった。活動写真とはこのキネトスコープの訳語で、日本には一八九六年（明治二十八年）に輸入され、翌年にはスクリーンに映すシネマトグラフとバイタスコグラフが輸入された。これらも結局は活動写真と呼ばれることになる。
新しいもの好きで商才に長けていた神崎忠義(当時五十二歳)はこれは商売になると、さっそく活動写真会社を設立。数年後には各地の直営の活動写真館も充実し、初の黒字を出した。
明治三十三年、神崎活動写真株式会社は当時二十二歳の神崎重樹を社長に迎えた。重樹自身、経営者としての初の体験であり、言ってみれば修業であった。重樹は第一回神映新顔を企画し、スターを作り上げようとした。この第一回の新顔として見事にデビューしたのが東京下町の町家の娘であった雛子であった。
雛子はその容姿と、艶めかしい演技から瞬く間に活動写真ファンの心をつかみ、大スターの階段を駆け上がっていくことになる。活舌はあまり得意ではなかったが、無声映画の時代、

それは大きな欠点とはならなかった。

一九〇六年（明治三十九年）、重樹と雛子は結婚し（映画会社社長とトップ女優の結婚は当時でも結構センセーショナルであった。結婚に反対する熱烈な冴木ひなファン数百人が神崎家の前で座り込みをするなどという事件も発生した）、翌一九〇七年（明治四十年）一月八日、長女としてすみれが誕生した。二人の子供は現在まですみれ一人である。結婚後も雛子（冴木ひな）は引退せず、ファンをホッとさせたが、それは同時にすみれに孤独を強いることになった。

忙しい両親を持ち、すみれには親子団欒というものがほとんどなかった。親子三人水入らずで遊びに行ったことなど皆無である。それが幼いすみれの人格形成にどれだけの影響を与えたか想像に難くない。すみれは愛に飢えると同時に、そうした姿を人に見られたくないという複雑な感情の中で成長していった。

「…………」

両親が留守という、いつもと同じ状況でありながら、その日のすみれは少し感傷的になっていた。車夫たちを長刀で翻弄した爽快さはとっくの昔に消えている。

部屋に戻り、ベッドに腰掛けたとき、すみれはだれかの抱擁を欲していた。それは物理的な抱擁ではなく、精神的な抱擁だ。

（お父様……お母様……雪子様……）

人生の目標の飢餓感と愛の飢餓感が複雑な化学反応を引き起こし、ベッドの上にうずくまった。手足を縮め、赤ん坊の眠るスタイルとなる。

なにかが不安。だれかいて。だれかわたくしを抱きしめて——

そのときだ。

ゾワッ……

むき出しになったすみれの心に触れたのは、やさしい包容力あふれる感情……ではなく、すべてを食らってやるという暗黒の想いだった。

背中に冷たいものが走り、すみれは飛び起きた。

部屋の隅になにかがいる。

肉眼では見えない。が、すみれは感じていた。それはすみれにとって危険なものだ。いや、生きとし生けるものにとって危険な存在！

（あの感覚……！）

それを感じるのは初めてではなかった。前にも感じたことがある。ここ最近だ。

そして、すみれはその都度戦ってきた。
「来るわ！」
すみれは素早く壁の長刀に手をかけた。先ほど車夫を相手にした木製のものではない。本物だ。
「はっ！」
すみれが大きく長刀を横に払った。
手応えは……なかった。
「！」
確かに斬ったはずだった。が、まるで手応えがなく、すり抜けてしまったのだ。普通の物理攻撃では効かない相手——
（そうだったわね！）
キッとすみれが反対側の壁に移動したそいつをにらみつける。常人には見えない光がすみれの手から飛び出し、長刀を覆うとしていた。
黒の存在はそれを恐れ、逃げ出そうとする。
「ハッ！」

ザシュッ！

今度は手応えがあった。

長刀がそいつと接触したとき、すみれは見た。その奇妙な生き物の姿を。猫ほどの大きさで四肢に尻尾があり、さらには蝙蝠のような羽根を持っていた。なによりも頭部がグロテスクだった。巨大な顎を持ち、人間が生理的にいやがる容姿だった。

「はぁはぁはぁ……」

長刀を構えたまま、すみれはしばらくその場に立ち尽くしていた。そのとき、背後のベランダに人の気配がわき起こる。

「見事なものね」

「だれ？」

振り向いたすみれの前に、すみれのことを路地から見つめていたあの美女が立っていた。

「あなたは……？」

「私の名は藤枝あやめ。神崎すみれさん、あなたにお願いがあって参りました」

「えっ？」

ニッコリ微笑む美女の顔をすみれは呆然と見つめていた。

6

我に返ったすみれの、あやめに対する反応（はんのう）は、実に彼女らしいものだった。
「なんですの？　人の部屋にいきなり押しかけるとは失礼な。わたくしに逢（あ）いたければ、ちゃんと正面から人を介（かい）していらっしゃい」
あやめはわずかに苦笑（にがわら）いする。
「不躾（ぶしつけ）な訪問はお詫（わ）びするわ、すみれさん。けれど、私が正式にあなた逢いに来たとしたら、おそらく神崎家は私をあなたに逢わせてくれなかったでしょうね」
「どういうことですの？」
「私はあなたを……そう米国（アメリカ）ふうに言うならばスカウトに来たの」
「スカウト？」
「今、あなたが倒した存在……あれについてどう思う？」
「えっ？」
「あの人間に生理的嫌悪感（けんおかん）を抱かせる生き物……あんなのが今帝都（ていと）の闇（やみ）に潜（ひそ）んで帝都を襲（おそ）おうと隙（すき）をうかがっていたとしたら」

「なにが言いたいんですの、あなたは？」

「今、帝都は重大な危機に直面しているわ。あなたが倒したああいう闇の存在が帝都を襲おうとしている。昨日、今日と本格的な侵攻がなかったのは運がいいだけなのかもしれない。そして彼らには普通の武器では太刀打ちできない」

「あ……」

すみれは思い出していた。最初の長刀の攻撃ではあいつを倒せなかったことを。すみれの中にある特殊な力を発揮したとき、初めてあいつを倒せたことを。

「彼らと対抗できるのは、強い霊力を持った人間だけ」

「霊力って……あぁっ！」

すみれが驚いたように声をあげた。

「あなたは霊力について知っているわね。蒸気併用霊子式人型蒸気――別名霊子甲冑の試作一号機〝桜武〟に乗ったのだから」

「あのときの……」

三年前――すみれは十二歳のときのことを思い出していた。

一九一九年、十二歳のすみれは祖父忠義に逢いに川崎の神崎重工の工場に向かっていた。

たまたま学校の遠足で川崎まで行ったとき、祖父が来ていることを知り、会っていこうと思ったのだ。

両親と会う機会が少なかったすみれだが、それは祖父とも同じであった。

この年、忠義七十四歳。神崎重工の代表権のない会長職のみ務めているが、実質神崎財閥は忠義の支配下にあった。忠義に対してはまだまだ重樹も逆らえない。そのため、祖父の日日も多忙を極めていた。

「おじいさまにお久しぶりにご挨拶を」

すみれが川崎の工場に着いたとき、忠義は〝関係者以外立入るからず〟の研究施設にこもっていた。

もちろんそんなことで臆するようなすみれではない。一度こうと決めたら絶対に退かぬのだ。

「わたくしは神崎忠義の孫娘！　関係者ですわ！」

なかば強引にすみれは研究施設に入り込んだ。

研究施設の中は実に広かった。女学校の講堂の十倍以上ある。

「なんですの、あれは？」

その中央に置かれているものにすみれは目を瞠った。

人型蒸気だ。それも巨大な。すみれ自身、神崎重工製の人型蒸気はいくつか知っている。けれど、そこにあるのはそのどれとも違っていた。

「……？」

すみれはその人型蒸気に近づいていった。

ガコン……

「！」

いきなり人型蒸気の中央にあるハッチが開き、中から人が現れた。軍服を着ている。

「うう……」

ハッチは地上から二メートルほどの所にあった。彼はそこで立ちくらみをしたかのようにフラ〜ッと地上に向かって落下した。

「あ！」

一連の行動をすみれは呆然と見つめていた。

「だらしない！　帝国軍人たる者が！」

背後からきつい声が響く。忠義の声だ。

「おじいさま⁉」
振り向くと、忠義と白衣の人物たちがこちらに向かってくるところだった。
神崎忠義。明治から太正にかけての財界の立役者の一人。財界の巨人としては、渋沢栄一、三菱を作った岩崎弥太郎と並び称される。今でも政財界に隠然たる力を有し、恐れる者は多い。
だが、孫娘の前では忠義も好々爺然とした祖父であった。
「やはりすみれか。かわいらしいリボンですぐにわかったぞ」
「おじいさま！」
すみれは忠義のもとに駆けていった。
その間も白衣の男たちは急がしそうに人型蒸気や倒れている軍人を調べ回っていた。
その中の主任と思われる男が忠義に近づいてきた。肩に大きな鞄のような機械をかついでいる。
「御前、だめですね。わずかな霊力を使い果たし、精神的な疲労で昏睡状態です」
「情けない！　それでも桜武は腕一つ動かせなかったではないか！」
「やはり霊子力不足が原因です。彼はこれでも、今まで調査した中では最大の霊力の持ち主でしたが……」

「米田君に連絡を取りたまえ。別の人材を軍部から派遣してもらう」
「今度は慎重を期しましょう。せめて、この霊子計の針を振り切るくらい……」
主任がなにげに肩の機械――霊子計のスイッチを入れた。

バシィイイイイン！

「うわぁあぁあっ！」
突然、霊子計がスパークを発し吹き飛んだ。
「なにっ⁉」
忠義も主任も呆然と立ち尽くして、顔を見合わせている。人型蒸気――〝桜武〟を調査していた白衣の男たちも愕然と主任のほうを見つめていた。
やがて忠義と主任はほぼ同時にすみれの顔を見た。
「？」
「御前……」
「うむ……」
忠義と主任はなにごとか話し合っていたが、やおら忠義がすみれのほうを向くと、やさし

く語りかけた。
「すみれ、あの人型蒸気に乗ってみる気はないかな？」
「えっ？」
忠義も、主任も、そして駆けつけてきた白衣の男たちも明らかに自分になにかを期待している。すみれは子供心にそれを敏感に感じとっていた。そして、すみれはこうした期待に常に応えてきたのだ。
「わかりましたわ」
「おお、そうか。これはな、霊子甲冑試作第一号機、桜武と言うんじゃ」
「霊子甲冑？」
「やがて、この日本に必ず必要となるものじゃ。特に帝都にな……」
一時間の後、すみれは桜武の中にいた。簡単な操縦法は聞いている。すみれがやることは桜武を二、三歩歩かせて、手を動かすこと。ただそれだけだ。
〈ではすみれ、始めるぞ〉
「はい、おじいさま」
無線機から響いてきた祖父の声にすみれはうなずいた。小さい手が桜武の始動キーを回す。
十二歳の少女では、桜武の操縦席は大きすぎる。その中でこの始動キーの場所だけは楽に手

が届くところにあった。

ガゴン……

ゆっくりと桜武の始動音が響く。
そして、いきなりだった。

ゴォオオオオオオオオン！　ガゴォン！　ドゴォオオオン！

「きゃあっ！」
すみれが悲鳴をあげた。
桜武がいきなり手足をメチャクチャに動かして暴走を始めたのだ。
「なにっ⁉」
「いったいなにが⁉」
桜武は手をぶんぶん振り回しながら研究施設の中を走り出す。やがて身体のあちこちから
スパークが起こり煙が吹き出て——

ガギィイイイ……

十分後、ようやく桜武は止まった。明らかにオーバーヒートだった。

後にわかったことは、すみれの霊力が強すぎて、桜武の霊子反応基盤が対応しきれなかったということだった。

この問題はこのすみれの事件を教訓に作られた通称〝三色スミレ〟――シロ、ムラサキ、キの三体の試験機体によって解決されていくことになる。その試験機体から導き出されたデータによって、一九二二年（太正十一年）、すなわち今年完成する予定の機体の名は光武といった。

「わたくしに特殊な力があるのは知っていましたけれど……」

あやめの顔を見つめながら、すみれはつぶやくように言った。

「すみれさん、その力、この帝都のため、日本のため、そして世界のために役立ててくださらないかしら」

「えっ!?」

「帝國華撃団……この帝都におかれる、さきほどの闇の者たちと戦う秘密部隊。そこがあなたの力を必要としているのよ、すみれさん」

「……………」

すみれは無言であやめの顔を見つめ続けていた。

荒唐無稽な話であるが、あやめの真摯な表情からそれが嘘ではないことがわかる。あやめには人に疑いを抱かせない、そんな不思議な魅力があった。

けれどすみれは首を振った。

「せっかくですけど、お断りしますわ」

「すみれさん……」

「わたくしには神崎財閥の一人娘としてやらなければならないことがたくさんありますの。今、そこから逃げ出すわけにはまいりません」

「……………」

あやめは落胆したような表情を一瞬表すが、すぐに微笑みを浮かべた。

「すみれさん、帝國華撃団はいつまでもあなたを待つわ。考えを変えることがあったなら、いつでも来て」

それだけ言い残すと、あやめはベランダから姿を消した。

「不思議な女……」
ベランダを見つめ、すみれがポツリとつぶやいた。

7

翌日、女子学習院に登校したすみれは雪子が休みであることを知った。
「昨日はなにごともありませんでしたのに……」
軽い病気かなにかだと自分を納得させようとしても妙に気になって仕方がなかった。
そのすみれの勘は当たる。
翌日も、そのまた翌日も、結局一週間、雪子は学校に姿を見せなかったのだ。
そして一週間目の日、教師は衝撃的なことを口にした。
「綾乃麿雪子さんは学校を退学されました」
すみれは大きな石で思いっきり頭を殴られたような感覚を味わっていた。
(退学……!?　雪子様……?)
雪子を送った日の母親の視線が気になって、あれ以来雪子の家に近寄るのを遠慮していた
すみれだが、その日の帰りは違った。

綾乃麿家の前に車を停めさせると、すみれは降り立った。
「………」
綾乃麿家の門は開け放しになっている。屋敷には人の住んでいる気配もない。
(これはいったい……?)
そのとき、屋敷の中から出てくる影があった。
「!」
雪子だった。
青白い顔をした雪子が、まるで夢遊病者のような様子でふらふらと屋敷の玄関から出てくるところであった。
「雪子様!」
すみれは思わず大きな声を出した。
「!」
雪子も気づく。が、雪子はすみれの顔を見ると表情を硬くした。
「雪子様、いったいどうされ……」
「寄らないで!」
歩み寄ろうとしたすみれに向かって、雪子が激しい口調で叫んだ。

「雪子様……⁉」
今までの雪子からは考えられないことだった。あの純粋で物静かな雪子からは。
「雪子様、いったい……？」
「あなたもあの一族の一人なのですね！　私の父からすべてを奪ってしまった一人なのですね！」
「雪子様……？」
「私はあなたに憧れていました。あなたのことを友達以上の存在だと思っていました。けれど、その私に対してあなたたちの仕打ちは……ひどい。ひどすぎます！」
雪子の目には涙があふれていた。憎悪の視線がすみれを突き刺す。
「雪子様、わたくし、本当になにも知らないのですわ。なにがあったのですか、教えてくださいまし！」
すみれも必死だった。まったく身に覚えがなく、一方的に責められることはすみれにとっても我慢ならない。
雪子はしばらく黙り込んでいたが、やがて口を開いた。
「父は事業に失敗し、あなたのおうちの会社の一つ、神崎銀行にこの家も他のすべてもとられてしまうことになりました」

「えっ？」

「父と母は離婚もしました。私は母に引き取られ、遠い所に参ります。もう二度と逢うこともないでしょう」

「雪子様……」

「神崎銀行はもう失敗だとわかっていた父の事業をさらにたきつけ、完全な失敗とだれの目にもわかるまで続けさせたそうです。父からすべてを奪うため」

「そんなことが……」

「………」

雪子はそのまま歩き出した。すみれのほうを向こうともせず、すみれの横を通り過ぎる。

「雪子様！」

「……さようなら、成金のお嬢様」

「……！」

呆然と立ち尽くすすみれを振り返ることなく、雪子はそのまま門の外に消えていった。

「………」

すみれの心をなんともいえぬ孤独感が襲っていた。両親の温もりを求める心とはまた違う、吹き荒ぶ孤独感が。そして、強烈な喪失感があった。

8

その日の夕食は、皮肉なことに珍しく家族の者がすべてそろっていた。
祖父、忠義。父、重樹。母、雛子。そしてすみれ。
食事の最中、ずっと重苦しい雰囲気が部屋を覆っていた。その原因がもちろんすみれにあったことは言うまでもない。すみれは周囲に怒りの波動をまき散らしていた。明らかに不機嫌だということを露骨に示していた。途中、重樹と雛子は何度も顔を見合わす。忠義はなにも言わなかった。
配膳を担当する使用人たちも、息が詰まりそうな緊張感を味わっていた。忠義の背後に控えている執事の宮田恭青だけは表情を変えていなかったが（彼は滅多に表情を変えないことで有名だった）、それでも時々、チラリとすみれを見る。
その日のすみれは抜き身の白刃だ。寄らば斬るぞという雰囲気の。
やがて食事が終わったとき、視線を一度も上げなかったすみれがちょうどテーブルの真正面に位置する忠義を見た。挑戦的な目だった。
「おじいさま、お尋ねしたいことがあります」

「……なにかな」
「綾乃麿侯爵家についてですわ」
「…………」
「どういうことですの?」
すみれはただそれだけを言った。それだけで祖父がすべてを理解すると知っているのだ。
「すみれ」
「すみれさん、おじいさまに……」
重樹も雛子もどこか戸惑ったような表情を浮かべている。一応すみれを制しようとしてはいるが、それがなんの効果も生み出さないことは当人たちにも理解できた。
しばらく黙り込んでいた忠義だったが、やおら険しい表情をすると、ただ一言、つぶやいた。
「仕事じゃ」
それは明確な拒否であった。仕事である以上、すみれの関知するところではない——忠義はそう言っているのだ。
「……雪子様はわたくしの大切なお友達でした。成金の娘であるわたくしは雪子様のおかげでずいぶん救われました」

すみれの口から『成金』という言葉が飛び出したとき、重樹と雛子は硬直した。表情を変えなかったのは忠義だけであった。
「わたくしは自分のことを優れた人間であると思ってました。また、そうなろうと常に努力してまいりました。けれど、そんなわたくしはお友達一人守ることができないのですね」
「すみれ、いいかげんに……」
重樹がなにかを言いかけたときだった。

ガタッ……

すみれがいきなり立ち上がった。
「わたくしはいったいなんのために日々生きているのでしょう。成金の娘と呼ばれたくないために、他の華族の方々から蔑まれたくないために……そのためだけに努力する。そんな自分がいやになりました。そんな境遇がいやになりました」
すみれは忠義、重樹、雛子を順に見つめると、深々と頭を下げる。
「今日までわたくしを育ててくださってありがとうございました、おじいさま、お父様、お母様。今日を限りにわたくしはこの家を出ます」

「す、すみれ⁉」

「すみれさん！」

「……………」

忠義はもうなにも言わなかった。

重樹と雛子が慌てて騒ぎ立てる中、すみれは落ち着いた様子で自分の部屋に戻っていった。

9

その夜の神崎邸は静まり返っていた。

すみれが手荷物を持って玄関を出てきても、だれも騒ぎ立てる者はなかった。

後で聞くところによると、それもすべて忠義の指示だった。すみれには好きにさせろ——そういうことだった。忠義は、お嬢様育ちのすみれがすぐに音を上げて実家に戻ってくると考えていたわけではない。むしろ、すみれの意地っ張りな部分をだれよりもよく知っていたのが忠義だった。そして、忠義も意地っ張りだった。忠義の言いつけでは、さすがの重樹も雛子も逆らえない。すみれの両親には、すみれや忠義とは逆にそういう従順なところがあった。

「待っていたわ」

すみれが門を一歩出たとき、声がかかる。

暗(くら)い道に立っていたのはあやめだ。

「藤枝(ふじえだ)あやめさん……でしたわね」

すみれが言った。すみれにも彼女が待っているような気がしていたのだ。

「すみれさん、帝國華撃団(ていこくかげきだん)はあなたを歓迎するわ」

あやめはニッコリ微笑(ほほえ)んでいた。

すみれも同じく微笑んで、もっとも自分にあった言い方で、それに応(こた)えた。

「あやめさん。わたくし、特別に帝國華撃団に入ってあげてもよろしくってよ」

「ありがとう」

二人は並んでゆっくりと歩き出した。

帝國華撃団がいかなる所か、まだすみれにはわからない。やりがいを感じられるのかどうかもわからない。けれど、少なくとも心にぽっかり空(あ)いたこの喪失感(そうしつかん)を埋(う)めてくれるような気がしていた。

はあ～、幸せやなぁ～。
朝から晩まで機械いじってても
だれにも文句言われへん。
昔のことを思い出すと夢のようや。
そう、あのころは……。
次回「サクラ大戦　前夜　第二話」。
太正櫻に浪漫の嵐！
だれや、苦労は買ってでもしろ言うたんわ！

第二話

1

その日、僕は神戸に向かう新幹線の中にいた。
ある作品の取材で吉野、奈良と回っていたとき、ふと神戸に行ってみようと思い立ったのだ。
普通に大阪回りの在来線で行けばよかったかもしれないが、京都まで出て新幹線に乗った。一刻も早く神戸に着きたかった。まるでそこに久しく会えなかった恋人がいるかのように。
それほど神戸という街に執着したのには理由がある。ある女性のことを調べていて、彼女が暮らしていたのが神戸であることがわかったからだ。それはずいぶん昔のことではあったが、そのときから僕にとって神戸はどうしても行かなければならない街になった。
新幹線が新神戸駅に到着する。
改札口を出るのももどかしく、僕はタクシーに飛び乗った。
前もって連絡してホテルはとっておいた。メリケンパークにできたばかりの、大きくて美しいホテルだという。ただ残念ながらホテル自体にはあまり興味がない。うれしかったことは港のすぐそばにあること。窓から海が見えることだ。

タクシーから見た神戸はすでにあの阪神大震災の爪痕が消えていた。象徴的でもあった、あの横倒しになった高速道路――阪神高速道路も復旧し、ちょうど前日開通したという。それでもまだ郊外に行くと、崩れた建物が数多く残っているとタクシーの運転手が教えてくれた。

大震災。僕は奇妙な気分にとらわれた。今、僕が関心のあるその女性も、過去、帝都を襲った震災（と一般に思われている災害）に大きく関係していたらしい。彼女の日本で最も思い出深い土地は、奇しくも同じ〝震災〟という名称を戴いた地震によって壊滅的な被害を被った。もちろん偶然の一致に過ぎないが、因縁のようなものを感じてしまう。

タクシーは旧居留地の横を通り過ぎていく。

ここだ。彼女はかつてここで暮らしていた。石積みの外壁を持つ商船三井ビル（大阪商船三井船舶神戸支店）が右手に見る。残念ながら彼女はこのビルの完成は目にしてはいない。太正十一年、このビルが完成したときには彼女はもうこの街にはいなかった。

ホテルに着いたときには、すっかり陽が落ちていた。

荷物を部屋に放り込むと、そのまま最上階のバーへ急ぐ。窓際の席に座ると、視界に夜景が広がった。

「神戸に来たんだ」

色とりどりのライトでショーアップされた港、そして街。彼女がいた頃もこんなに夜景がきれいだったんだろうか。

今からおよそ八十年ほど前。

太正八年（一九一九年）。

彼女――李紅蘭は初めてこの神戸の地を踏んだ。

2

李紅蘭は一九〇六年三月三日、北京で生まれた（中国の場合は旧暦が普通だが、ここでは混乱を避けるため新暦で表す）。

中国はまだ満州族の王朝「清」の時代であった。

父、李策杏は貿易商を営んでいた。紅蘭はこの策杏と母、香燕にとって三番目の子供に当たる。容蘭、芳蘭、紅蘭――三人ともすべて女で、紅蘭は三女というわけだ。

李家はなかなか裕福だった。当時、経済の爆発的成長は世界的な傾向で、中国（清朝）といえども例外ではなかった。国際経済の中に中国経済も組み込まれ、貿易が盛んになり、交通通信網も驚異的な勢いで整備されていった。一八九〇年の鉄道総延長距離が二二〇キロメ

ートル、内陸・沿海航路の汽船輸送量が九四八万トンだったのに対し、一九一〇年には鉄道が八二三三キロメートル、汽船輸送量が三一七三万トン。鉄道で実に三十七倍、汽船輸送量でも三倍強の発展を見せている。国際貿易はこれらの社会資本の整備と同じ速度で右上がりに成長していった。貿易商であった李策杏はこの時流にうまく乗れたわけだ。

紅蘭が生まれたときには、すでに李家は北京郊外に大きな屋敷を構え、大勢の使用人を雇って生活していた。

策杏は非常に好奇心の強い男で、新しい物に目がなかった。仕事柄、異国人とのつきあいも多く、彼らからまだ中国には珍しい機械などを手に入れると、必ず分解してみないと気が済まなかった。そんなときいつも横でじっと見ているのは幼い紅蘭だった。

ただ策杏はおせじにも器用とは言えず、分解してはみたものの後で組み立ててみると動かなくなってしまうこともあった。

その日もそうだった。

取引先の英国商人から懐中時計をもらったのはいいが、ついいつも癖で分解して、元に戻せなくなってしまったのだ。相手とはまだ取り引きが終わっておらず、次に会ったとき時計のことを聞かれるだろう。そのとき壊してしまったではあまりにも体裁が悪すぎる。

途方に暮れた策杏を救ったのは、まだ四歳になったばかりの紅蘭であった。

紅蘭はそのときも策杏の横で時計の分解をじっと見つめていた。策杏が時計を元に戻せないで思い詰めた顔つきになったとき、小さな手が横から伸びてきたのだ。

（えっ……？）

驚いた顔の策杏の前で紅蘭は懐中時計を分解し、組み立て直してしまった。その際、策杏が付け忘れていた部品もすべて付けて。

カチカチカチカチカチ……

ネジを巻くと時計は動き始める。最初にもらったときとまったく同じ、規則正しい音を響かせながら。

策杏は、懐中時計を手にニコニコしている紅蘭の顔を愕然と見つめていた。この子は天才だ、と。

その後、機械をもらったり買ったりしてきては紅蘭に与えた。紅蘭はもらうとすぐにその場で分解してしまう。が、一時間もすればそれは元の姿に戻った。紅蘭のさわる機械は多種多様に亘った。時計、蓄音機、映写機、カメラ、ついには小型の蒸気エンジンまで。そのうちに紅蘭は壊れている機械の修理までこなすようになってしまった。天才少女の名は口コミ

で広がり、李家には壊れた機械が多数持ち込まれるようになったほどだ。
家族はそんな策杏と紅蘭の行為をあきれた様子で見ていたが、本人たちはまるで気にならなかった。
一〇歳になったらこの子を米国に留学させよう——策杏は紅蘭について次第にそんなことを思うようになった。自身、貧しい農家の生まれで学校に行かなかった策杏は我が子にはきちんとした教育を受けさせようと思っていた。二人の姉には家庭教師をやとっている。が、紅蘭の才能を伸ばすにはこの中国では無理だと思っていた。伝統的な慣習の残る中国で、女子が技術系の道に進むことは不可能に近い。やはりそのためには異国の地に、それも比較的女子の権利も確立されている米国に。
愛するわが子を幼いうちから異国にやることに策杏は抵抗がないわけではなかったが、機械を見つめる紅蘭の顔を見て、感傷的な気分を断ち切った。機械を見つめるとき、紅蘭は心底幸せそうな顔をしていた。
このまま行っていれば紅蘭も米国で技術教育と淑女教育などを受けて、大学で教鞭をとるような人生を歩んでいたかもしれない。が、結論から言ってしまえば、紅蘭は生涯「学校」というところに通うことはなかった。
一家を突然襲った恐るべき運命が紅蘭から「学校」に行く機会を永遠に奪ってしまうこと

となる。

辛亥革命の勃発である。

3

中国東北地区（日本で言うところのいわゆる満州）の冬は極めて厳しい。

遼東半島南端の大連といった比較的温暖な場所でも、十二月から三月上旬まで屋外での作業がほとんど不可能になるほどだ。

そんな寒い冬のある日。

大連郊外にある農家の裏の井戸で、一人の少女が必死に水をくんでいた。

まだ歳のころは十を超えたくらいだろう。大きな澄んだ目をしているが、その目をときどき細めたりして物を見ようとしている。どうやら目が悪いらしいが、眼鏡はかけていない。

厳しい寒さにも関わらず、少女は手袋をつけていなかった。さすがに水仕事に手袋は使えないというわけか。ときどき手をこすり合わせて必死に暖をとろうとする。だが、自然はそんな努力をあざ笑うかのように強い風を起こした。

ひゅるるるるうううう……

少女は身を縮こまらせた。

冬場の水仕事。今と違って温水器も水道すら家の中にない当時、最高につらい仕事だった。

が、驚いたことに少女の顔につらさを見つけることはできなかった。少女は微笑んでいたのだ。

水桶がようやくいっぱいになって、少女はそれを持ち上げ運び始めた。

「紅蘭！」

家の中からきつい声が飛ぶ。

「はい」

慌てて返事をして、少女は歩みを早めた。

そう、少女は紅蘭であった。

一九一一年十月十日。

揚子江中流にある湖北省東部の都市武昌（現在は漢陽、漢口とともに武漢市を形成する。湖北省の省都）で兵士三〇〇〇人が清朝打倒の反乱を起こした。これを口火として燎原の

炎のごとく革命派兵士の武装蜂起は全国に広がった。
干支を使う伝統的紀年法では一九一一年は辛亥年に当たる。それゆえこれを辛亥革命というのである。
革命の勃発は中国にとって意外なことではなかった。清朝は病んでいた。近代化は遅々として進まず、欧米列強の無理難題も際限がない。日清戦争。義和団事変。これらの賠償金だけで清朝の財政は破綻していた。加えて役人の腐敗は上から下まで枚挙にいとまがない。国を憂う心ある者たちの蜂起はまさに必然。時間の問題であったのだ。
明けて、一九一二年一月一日。
江南の旧き都南京において、「中華民国」の成立が宣言された。共和制を称するこの革命政権は満州族の征服王朝である「清」の支配から中国を解放し、漢民族の国家樹立を目指していた。この暫定政権の大統領にあたる臨時大総統には早くからの革命指導者で、革命勃発後に急遽亡命先のアメリカから帰国した孫文が就任した。
すでにこの時点で中国全土二十四省のうち、十五省が清朝政府に反旗を翻していた。もはや清朝の抵抗は無駄としか思えない。まだわずか六歳の皇帝、宣統帝（愛親覚羅溥儀）が退位し、清朝は命運絶たれるはずであった。
が、この期におよんで満州族の貴族たちは抵抗を決意した。東北地方や北京近辺から兵士

をかき集め三万の部隊とすると、かつて軍機大臣を務め、現在は閑職に追いやられていた袁世凱将軍につけて送り出した。このとき袁世凱が受け取った命令は、あまりにも無謀なものだった。可及的速やかに南京を攻略せよ――

もともと北洋新政などの近代化政策を推進していた開明的な軍人政治家である袁世凱の目は時流を見るのに敏であった。

彼は黄河河畔まで進軍したところで全軍に命令する。

「北京を攻略する！」

驚異的な速さで引き返した袁世凱軍は一月十五日、北京に突入した。

残っていた清軍との間に戦闘が発生し、北京市周辺は戦火に巻き込まれた。

「逃げろ！　逃げるんだ、紅蘭！」

火に包まれた自分の家を紅蘭は呆然と見つめていた。策杏の声も紅蘭には届かない。

その日、袁世凱軍の攻撃はまさに奇襲であり、市民は避難する間もなかった。

ダンッ！　ダンッ！　ダガァァァン！

あちこちで銃声が響いていた。
不運なことに李家はちょうど戦場の真ん中になってしまっていた。
「父様⁉　母様⁉」
ようやく我に返った紅蘭は両親を求めて声を張り上げる。
「紅蘭！」
煙の中から母親の声がした。が、次の瞬間——

ガガアアアン！

「きゃあああああああああああっ！」
銃声とともに母の悲鳴が響きわたった。
「母様……⁉」
その後しばらくの間、あたりから聞こえるのは燃えさかる火の音だけであった。
パチパチ……バチッ！　ババババ……

呆然と紅蘭は立ち尽くしていた。あまりのことに気が動転して、泣くことすら忘れていた。

「あ……あ……」

使用人たちも二人の姉の姿もどこにも見られない。父親の姿もない。あるのはただ紅蓮の炎だけだ。

遠くでまた銃声と爆音が鳴り出した。

「あ……」

そのとき、紅蘭の目は炎の中に人影をとらえた。よく見知った背格好。

「父様！」

策杏だ。策杏はふらついた足取りで紅蘭のほうに歩いてくる。

いてもたってもいられず、紅蘭は策杏のほうに走り出した。そのまま策杏に抱きついていく。策杏の手がゆっくりと紅蘭の肩を抱いた。

（よかった……）

安堵感が紅蘭の心を覆う。

だが、改めて策案の顔を見たとき、その気持ちが大きくぐらついた。策杏は額から大量に血を流していた。

「父様……？」

策杏はやさしい目で紅蘭を見た。
「紅蘭、これから私の言うことをよく聞くんだ」
「えっ？」
「強い子になれ。どんなときでもくじけちゃいけない。どんなときも笑顔でいなさい」
「父様……？」
「おまえなら大丈夫だ……紅蘭……」

ドサッ……

策杏の身体が前のめりに倒れた。背中には無数のガラスの破片が刺さっていた。紅蘭はわからなかったが、銃痕もあった。
「父様！　父様！」
「これを……」
策杏は懐にあった懐中時計を紅蘭に渡した。それはあの紅蘭の才能を初めて策杏が知ることになった懐中時計であった。
紅蘭の小さな手に懐中時計が収まると、策杏はわずかに微笑んだ。

「……紅蘭……行きなさい。生き延びるんだ……紅蘭……」
息も絶え絶えに策杏は話し続けた。
紅蘭はその場から動かなかった。父親にすがりついたまま、泣き続けていた。それはやがて父親の声が永遠に止まった後も……。
その後、戦闘はますます激しくなった。が、戦場の真ん中にいるのに、不思議なことに紅蘭には流れ弾も当たらなかった。いや、一度紅蘭めがけて飛んできたのだが、なぜか紅蘭は傷一つ負わなかった。しかし、紅蘭がそのことを気に留めることはなかった。
戦闘はやがて終わりを告げた。
紅蘭は生き延びたのだった。
袁世凱の反乱により清朝は滅んだ。
そのまま袁世凱は北京において臨時政府を担うことを宣言する。それは孫文の南京政府と真っ向から対立するものであった。
内戦が始まる。
中央の統制の弱まった地方では、駐屯していた軍人たちが勝手に利権集団を作り、周辺の支配に乗り出し始めた。「軍閥」と呼ばれた彼らはその時々に応じて北京政府、南京政府の

どちらかに荷担した。

治安は乱れ、難民が多く発生し、戦火に追われた人々や脱走兵の中には盗賊や匪賊に身を落とす者まで現れた。

日本と欧米列強は自らの権益確保のためにさまざまな謀略を画策したが、それすらも大勢を左右することはなかった。

中国国内は混沌としていた。

北京を逃げ出した紅蘭は数多くの難民たちとともに東に向かった。

北京の東にある開港都市天津から船に乗りそのまま遼東半島に至る。紅蘭もその中にいた。

ほとんど食べるものもない逃避行。

もう紅蘭は泣いていなかった。船底で、黙り込んだまま両手を握りしめ、じっとうずくまっている。手の中には懐中時計があった。

(父様……)

それだけが紅蘭の心の支えだった。

遼東半島の大連市に着くと、難民たちは降ろされた。行くあてなどだれもない。まだ幼かった紅蘭の前にあるのは死しかないように見えた。

（だめ……もう……）
港からどれだけ歩いただろう。すでに寒さも紅蘭の身体は感じなくなっていた。
ドサッ……
紅蘭はその場に崩れるように倒れた。
（あたし……死ぬんだ……）
ぼんやりとそんな考えが浮かぶ。ずっと握りしめていた手をゆっくりと開いた。
懐中時計があった。
「…………」
うっすらと涙が流れてくる。そのとき、策杏の最後の言葉が思い出された。
『強い子になれ。どんなときでもくじけちゃいけない。どんなときも笑顔でいなさい』
紅蘭は必死に笑顔を作った。もはや他になにができるというのだ。ただの一つでも父親との約束を守りたかった。

（ごめんなさい……父様……）

しかし、紅蘭は死ななかった。

このどん底の中で、父親との約束を守ろうとした紅蘭への褒美のように、幸運が彼女のもとを訪れた。紅蘭が倒れたのは農家の軒先で、音に気づいたその家の者が中に運び込んで手当してくれたのだ。

そのまま紅蘭はその家に拾われた。

裕福な貿易商の三女としてなに不自由なく生活していた紅蘭は、その日から農家の里子として、ほとんど使用人同然の生活を強いられることとなった。

4

農家の朝は早い。

起床は日の出前。そして、すぐに仕事は始まる。

この時代、まだ電灯は一般的ではなく、ランプは普及していたが、それもそう長い時間使えるわけではなかったため、日の出と日の入りが生活の基本であった。

長い冬が終わり、ようやく春の温もりが大地を覆うようになってきた頃、農家の一年も始

まりを告げる。
一九一九年も三月に入ろうとしていた。紅蘭が大連郊外の農家である趙家（満州族は姓以外に氏族名を持ちそちらのほうでも表記する。ちなみに趙家は覚爾察氏族）に拾われてすでに七年が経っている。
農家の生活に紅蘭も完全に溶け込んだ。
紅蘭の一日はざっとこんな感じだ。朝、日の出とともに起き、家族のために井戸から水をくんでくる。そのまま食事の準備をして朝食。後片付けをして、家族を追って畑に出る。そのまま昼まで畑仕事。昼に小一時間休息をとって、日の入り近くまでまた畑仕事。一足先に帰って食事の準備をし、後片付けが終われば寝られる。食事は一日二回。睡眠時間は八時間。現在の十三歳の少女からすれば信じられないくらい過酷な一日である。睡眠時間が比較的普通にとれるのが救いか。
もっとも、紅蘭は眠る時間をあることに充てていた。
夜、家族が寝静まったとき、そっと抜け出して納屋に行く。そして、昼間休憩時間に搾っておいた菜種油を使って明かりをとり、大好きな機械いじりをしていたのだ。
ほとんどの場合、対象となるのは父親の形見の懐中時計であった。それを飽きずに分解しては元に戻す。そんなことをもうすでに何千回と繰り返している。そのため紅蘭の頭の中

には時計のしくみが完全に入っていた。工具さえあれば応用で別の時計を作る自信もあった。が、今はまだその工具はわずかしかない。工具は紅蘭の手作りだった。壊れた農具や木や鉄クズを拾ってきては、それを根気よく削って工具に仕立てていく。時計を分解するとき使っている細いドライバーもそうして作ったものだ。それは驚くほど精密にできていた。

「あは……」

その日も無事時計を組み立て終えて、紅蘭は満足そうに微笑んだ。

このときが紅蘭には一日でもっとも幸せなときだった。機械をいじっていれば、昼間の仕事の辛さも忘れることができる。

困ったことがあるとすれば、作業をずっと暗いところでやっていたので、目がすっかり悪くなってしまったことだった。いろいろと作業に不自由で、眼鏡が欲しかったのだが、そんなもの買ってもらえるわけもない。金銭的な余裕ももちろんだが、理由が理由だけに言い出せなかった。

「さて……」

菜種油はあとわずか。それにそろそろ寝ないと家族に気づかれるかもしれない。

ガタ……ガタガタ……

「！」
納屋(なや)の戸口が鳴って、紅蘭はビクッとしてそちらを見た。
家族のだれかに見つかったのだ。
不安な表情が紅蘭の顔に浮かぶ。
（やばいなぁ……）
紅蘭の機械いじりを家族の者は知っていた。ほとんどの人間は興味を持っていないが、里親である暁明(ぎょうめい)だけはこれを目の敵(かたき)にした。
最初に見つかったときにはこっぴどく叱(しか)られるだけでなく、何度もぶたれた。
「なにやってんだろうね、この役立たずが！　おまえのような無駄飯(むだめし)食らいを置いておくほどうちは余裕がないんだよ！」
「すいません」
「すいませんじゃないよ、バカ！　出ていきな！」
「ごめんなさい、ごめんなさい」
「さっさとどこかに行っちまいな！」
このときは夫である郭宣(かくせん)が取りなして、なんとか出ていかずにすんだが。

二度目に見つかったときはもっとひどい仕打ちを受けた。いきなり懐中時計を奪い取られ、庭の大きな石に向かって叩き付けられたのだ。

暁明とて、その懐中時計が紅蘭にとって唯一の父親の形見であることは知っている。それでも容赦がなかった。もっとも、数日かかって紅蘭は丹念に部品を集め、見事に修復している。ただし、さすがに文字盤を覆っていたガラスは粉々に割れて使いものにならなかったが。それ以来、紅蘭の時計には文字盤のガラスがない。

どうやら暁明にしてみれば、紅蘭の機械いじりが忌々しくて仕方ないらしかった。自分からすればなにをやっているのかわからず、里子のくせに生意気だというわけだ。さらに、それが高じて、夜そんなことができるのは昼間畑仕事で手を抜いているからと信じた。もう一つ、暁明が紅蘭につらく当たる理由がある。趙家は満州族である。が、紅蘭は漢族だ。満州族の王朝であった清朝崩壊後、満州族は各地で漢族から迫害を受けた。そのことはこの満州族の本来の生活圏である東北地方にも伝わった。満州族の一人として、暁明は漢族への怒りを紅蘭にぶつけることで解消しているらしかった。

ガタガタ……

晩明に見つかれば、今度もまたただではすまないだろう。

「……………」

紅蘭は身を固くした。

「紅蘭」

聞こえてきたのは意外にも若い女の声だった。

「慶美さん⁉」

入ってきたのは晩明の本当の息子である郭英の嫁の慶美だった。紅蘭よりも三つ年上の十六歳だ。

趙家は農村によくある大家族であった。当主である郭宣とその妻の晩明。息子は二人いて、上が郭加、下が郭英。郭加は妻との間に子供が三人いて、彼らも一緒に暮らしている。郭英の妻慶美はまだ子供を産んでいない。紅蘭を入れれば十人の大所帯だった。

『打倒媳婦、揉到麵』ということわざが満州族にはある。

よく殴った嫁、よく揉んだ麵はよい——という意味だ。

このことわざ通り、嫁は婚家で鍛えねばならないとされ、舅、姑、さらには夫からよく打たれた。

趙家の場合、男は比較的穏和な性格だったが、その分、晩明が慶美をよく殴った。慶美と

しては耐えるしかない。
兄の嫁恵芳は暁明からほとんど殴られたことがない。この差は、恵芳が男の子を生んでいるからだった。満州族では男の子を生んで初めて嫁は期待された務めを果たしたことになり、そうなってようやく家族の中で地位を得ることができるのだ。
同じ暁明から迫害される者同士、紅蘭と慶美は仲がよかった。
慶美の姿を見て、紅蘭はフーッと安堵のタメ息をついた。
「慶美さんでよかったわ。お義母さんだったら、今ごろぶたれているもの」
「毎日毎日、紅蘭よくやるわねぇ。お義母さん、怖くないの？」
「怖いけど……でも、あたしこれがないと何のために生きているのかわからないもの。見つかったときは見つかったときよ！」
紅蘭は元気よく答えて、ニッコリと慶美に微笑みかけた。
「あたしは紅蘭ほど……強くないし……」
年上の慶美のほうがいつも落ち込んだ表情となり、紅蘭が慰めるという図式ができあがっていた。
「あたし、この家にいる場所がないんだわ」
慶美がつぶやくように言った。

「なに言ってんのよ。慶美さんは郭英さんのお嫁さん。もっと堂々としてなきゃ」
「でも……」
「でもじゃない！　がんばろう。ね」
紅蘭は笑顔で慶美を見た。
慶美はその笑みで、ようやく救われたようにコクコクとうなずいた。
（本当に居場所がないのはあたしよ……）
慶美と一緒に母屋に戻りながら紅蘭はそう思ったが、決して声には出さなかった。

5

三月三日が来て、紅蘭は十三歳になった。
誕生日だからといって特に祝ってもらえるわけでもなかったが、代わりに仕事は休みとなり、紅蘭はわずかな駄賃をもらって遊びに行けることとなった。
（休みはひさしぶり……）
紅蘭はこの休みを待ちに待っていた。
冬の間、近所の噂で聞いたある場所にどうしても行ってみたかったのだ。

大連郊外。紅蘭の住む村からは歩いて二時間の距離のところにそれはあった。もちろん紅蘭は歩いてやってきた。
「わあ……！」
平地がどこまでも広がる。が、そこはきれいに整備されていて、表面には石一つない。さらには、まっすぐな白い線が引かれている。
滑走路。間違いなくそれは滑走路だった。
そして、滑走路の端には、紅蘭が見たくてたまらなかったものが置いてあった。
「あれだ！」
思わず紅蘭は声をあげた。
小さなプロペラと二枚の翼を持つ、そう、それは複葉機——
「あれが空を飛ぶ機械！　飛行機！」
何度も想像し思い描いたものが今、目の前にあった。
とはいえ、さわることはできない。飛行場の周りは厳重な柵に覆われていて関係者以外は入ることができなかったからだ。
けれど、見ることができただけでも紅蘭は満足だった。

ここで、この当時の飛行機事情について少し述べておかねばならない。
一九〇三年十二月十七日、米国のライト兄弟の作った「ライトフライヤー」が人類初の有人動力飛行に成功する。
この成功をきっかけとして、航空機産業は飛躍的発展を遂げる……はずであった。
だが、飛行機の前に強力な競争相手が立ちはだかった。
蒸気エンジンを積んだ飛行船の存在である。
ドイツのフェルディナンド・フォン・ツェッペリン伯爵はアメリカ南北戦争の北軍として参加し、自ら偵察気球に乗って戦場へと赴いた。
そして、危機的状況に陥っていた北軍がかの人型蒸気によって盛り返していくのを彼は上空から見つめ続けたのだ。
戦後、さらなる発展を続ける人型蒸気に彼は注目した。特にその小型で強力な蒸気エンジンに。
彼が考えたのは飛行船の製作だった。人型蒸気に使われた蒸気エンジンを発展させ、軽量大出力の蒸気機関を飛行船に搭載すれば極めてコストパフォーマンスの高い空の移動手段を生み出すことができる、と。
人型蒸気の大手、米国モトロール社と組んだツェッペリン伯爵は、一八九八年、ドイツで

飛行船工場を設立する。やがて作られたツェッペリン号L1は全長二五〇メートル、乗客を一五〇人乗せ、時速三〇〇キロを超えるスピードで空を飛べるという画期的なものだった。初期の頃は水素ガスを使っていたが、爆発の危険性が高いということで、水素ガスについで軽く、安全性も遙かに高いヘリウムガスに換えられた。このころ、飛行船に搭載される蒸気機関はすでに推進力以外に浮力にもその動力を割り当てることができるようになっていた。
安価で大量輸送、しかもそこそこに速い飛行船の登場は、世界中に驚きと喜びを持って迎えられた。投資家たちはこぞって飛行船業界に投資し、世界中に飛行船の航路が作られた。
これにより飛行機の発達は十年遅れたと言われている。
ようやく飛行機の価値が認められたのは、軍事の分野であった。その小型さ、そしてスピードと運動性——飛行機はこれより兵器として発展していく。やがて新たな軍用機の開発に、各国はしのぎを削ることになった。
紅蘭がやってきた大連飛行場は日本陸海軍の軍用機実験場だった。大連のある遼東半島は日露戦争後、日本の租借地となっていた。

シュオオオオオオオオオオン……

「わーっ！　わーっ！　わーっ！」
先ほどから飛行機が離陸するたびに紅蘭は奇声を上げて大騒ぎをしていた。
紅蘭は完全に飛行機に魅了されていた。
自分が今まで機械いじりが好きだったのは今日、この飛行機に会うためだったとすら思い出していた。
（あたし、あれを作ってみたい！　飛行機を作ってみたい！）
結局、その日は夕暮れまで紅蘭は飛行場の柵にかじりついていた。

ブオオオオオオオオオオオン……

複葉機がゆっくりと降りてくる。手慣れた着地をして、複葉機は滑走路の上に降り立った。
紅蘭のいる場所と反対側に大きな建物がある。飛行機の格納庫だった。
本来ならばそちらに向かうはずの飛行機は、なぜか反対の紅蘭のほうに近づいてきた。
「えっ？」
驚く紅蘭の前で飛行機は止まった。操縦席から飛行服姿の男が飛び降りてくる。彼はそ

のまま紅蘭に近づいてきた。
「あ……⁉　えっ……⁉」
紅蘭はドキドキしたまま、そのときを待った。
やがて、彼は立ち止まり、顔にかけていた飛行眼鏡をとる。
（………！）
まだ若い。二十歳を少し超えたぐらいか。やさしい笑みがそこにはあった。
「飛行機、好きなのかい？」
青年は流暢な中国語（北京語）で話しかけてきた。
「は、はい」
「空からも見えたよ。キミが一人、大騒ぎしているところ」
「え、えっ⁉」
紅蘭の顔がみるみる赤くなる。
クスリと青年は笑うと、いきなり手を伸ばして紅蘭を抱きかかえた。
「きゃっ！」
そのまま紅蘭の身体を柵の内側に降ろす。
「えっ？　えっ⁉」

わけもわからず立ち尽くしている紅蘭に青年はニッコリ微笑みかけた。
「内緒にしておくから」
飛行機にさわっていいよ——青年の目がそう言っていた。
「やったーっ！」
紅蘭は喜びのあまりころびそうになりながら飛行機に近づいた。まるで放っておけば逃げてしまう鳥に出会ったみたいに。
コクピットをのぞき込む。
「うわーっ！」
翼にさわってみる。
「うわーっ！」
プロペラとその向こうのエンジンを間近で凝視する。
「うわーっ！」
すべてが驚きと感動の連続だった。
（これ分解してみたい……）
さすがにそれは声に出しては言えなかったが、物事に対してこれほど心底思ったことはない。

整備士と思われる男たちが何人もやってきたため、紅蘭は機体から離れた。非常に惜しい気分だったがしょうがなかった。
「ありがとうございました」
「ずいぶん熱心に見ていたね。いい目をしている」
「機械、好きなんです。いつか、あんな飛行機を作ってみたいんです」
「飛行機を……？」
青年は少しまじめな顔になって紅蘭をじっと見つめた。そして、紅蘭の瞳にある真剣な意志に気づいたようだ。
「がんばろう、お互い」
「えっ⁉ あ、はい！ ……あの、軍人さんですか？」
「ああ、海軍少尉だ。僕もやっとのことで飛行機の操縦士の資格を取ることができたんだよ。僕にとっても飛行機は夢なのさ」
「………」
今まで、紅蘭にとって軍人はあのいやな思い出を思い出させるだけの存在でしかなかった。が、この日を境に少し違う見方ができるようになった。
（軍人にもいい人がいる……）

あたりはかなり暗くなっていた。陽はほとんど沈みかかっている。
「もう遅い。帰りなさい」
「あ、はい」
礼を言って去ろうとして、紅蘭は最後にもう一度青年のほうを振り向いた。
「あの……明日も飛ぶんですか？」
「うん？　そうだよ。明日は遠距離飛行に挑戦だ。日本まで……は無理かもしれないが、東に向かって飛ぶんだ」
「東に……」
紅蘭のいる趙家はここから東にあった。もし明日空を見ていたら、この人の飛行機が見えるかもしれないな——そんなことをふと思った。
トボトボと飛行場を離れる紅蘭の姿を見つめている人影があった。女だ。長い髪の軍服姿の女性。美女だ。そう、彼女は——
「ヘイッ、ミス・アヤメ！」
背後からいかにも英国紳士然とした男が彼女に話しかけてくる。彼女——あやめはわずかにそちらを向くが、すぐに紅蘭のほうに視線を戻した。

「ホワット?」
思わず首をすくめる紳士を気にもとめず、あやめは紅蘭を見続けた。
「あの子……まさか……」
あやめは紅蘭のあとを追いかけて歩き出した。

6

楽しい時間があれば、その後にあまり迎えたくない時間が来ることもある。
月明かりと星明かりだけが頼りな暗い夜道を歩きながら、紅蘭はそう思った。
(まいったなぁ……)
いくら休みをもらったとはいえ、ここまで遅くなっては、叱られるのは免れない。
ヒステリックな暁明の顔を思い出して、少しばかり足取りが重くなる。
(でも、ま、しょうがない。楽しかったもの)
今日のことを思い出すと自然と笑みが浮かんだ。飛んでいる飛行機。間近で見た飛行機。
そしてあの海軍少尉の青年——

『いつか、あんな飛行機を作ってみたいんです』

ふとあの青年に言った自分の言葉が思い出された。それはまったくもって不可能な夢に思えた。

(今のままじゃだめだ。今のままじゃ……)

趙家にいるかぎり夢が実現することはないだろう。おそらく、農家の娘として一生を終えるに違いない。

けれど、趙家を出ることは十三歳の紅蘭にはまだ考えられる選択ではなかった。あまり居心地のいいところとは言えなかったが、少なくとも趙家の人たちは自分を七年間育ててくれたのだ。それに家を飛び出したとしても行くあてはどこにもない。

(でも……でも……あたしはやっぱり飛行機を作ってみたい)

紅蘭が自分の将来について真剣に考えたのはこれが初めてのことだった。それまでは生きていくことに精一杯でそこまで頭が回らなかった。だが、今日からは違う。

(やっぱり話そう。怒られてもいい。自分がどうしたいか、ちゃんと話さなくちゃ)

家に戻ったら郭宣と暁明に将来について話すことを、紅蘭は決意していた。おそらく郭宣はムスッとしたままなにも言わないだろう。もしかしたら好きにさせてくれるかもしれない。

が、暁明には激しく罵られることを覚悟していた。恩知らず！　これだから漢族の女は！
——頭ごなしに言われるのは間違いなさそうだ。
「ふう……」
怒られるのは慣れているが、気持ちのいいものではない。しばらくは仕打ちがさらにきつくなることを今から思って、紅蘭は小さくタメ息をついた。
（やっぱりあの家にはあたしの居場所はないな……。あたしはあの人たちにとってどこまで行っても部外者）
冷静な思いが紅蘭にあった。それでもまだ慶美がいる。覚英と慶美は好きで一緒になったわけではない。この時代、親が決めた縁談を女が断ることはできなかった。慶美とは同志のようなものを紅蘭は感じている。
（慶美に将来のことを話したら反対されるかな……？）
慶美があの家の中で自分のことを頼りにしているのはよくわかる。おそらく反対するだろう。あたしを見捨てるのか、と。
（前途多難だ……）
そんなことを考えていたため、二時間の道のりはあっという間だった。
が、村のそばまで来て、怪訝な思いにとらわれる。村が異様に明るいのだ。

（えっ？）

ヒヒイイイイイイイン……

あちこちで馬のいななきが響き、騒然とした雰囲気が伝わってくる。明るいのは松明の光だ。

「馬賊！」

その恐ろしい集団のことを思い出し、紅蘭は戦慄した。

7

東北地方の独特の騎馬武装集団である馬賊は清朝末期に起こり、元々は義によって結ばれた仁侠集団であるという。

が、混沌とした中国情勢は多数の難民を生み、馬賊とは名ばかりの盗賊集団をも生み出していた。

馬賊が大連近郊に現れるのは極めてまれだったが、その滅多に起きないことが今夜起こっ

たのだ。

紅蘭はそっと村の中に入り込んで物陰から顔を出した。

村の中央の広場に村人たちが集められている。馬賊の数は十人を少し超えるぐらいだ。村人たちが集められているのとは反対側に馬が留められていて、なんと馬で引く重砲まであった。

（なんてこと！）

集められた村人の中にはもちろん趙家の人々もいた。郭宣も郭英も青ざめた表情をしている。あの気の強い暁明ですらそうだ。慶美に至っては、恐ろしさのあまりか、その場にペタンと座り込んでいた。

「これで村人は全部か⁉」

馬賊の頭目らしき男が叫んだ。

手下が飛んできて、耳打ちする。うんうんとうなずいているところを見ると納得したようだ。

村人たちはなにもすることができず、ただ黙って待つしかなかった。彼らの運命を握っているのは目の前の馬賊たちだった。

紅蘭もまたなにもすることができず……いや、そうではない。紅蘭は果敢に動き出した。

自分一人の力ではもちろん馬賊と対抗できない。が、それならば武器があれば、と思ったのだ。

紅蘭は馬賊たちの馬にそっと近づいた。人間になれているのか、特に馬は騒がない。それとも紅蘭ごとき小娘ではとるに足らないと馬ですら思っているのか。

紅蘭は例の重砲に近づくと、必死にその構造の理解に努めた。武器は初めてだったが、かつて幼少の頃さまざまな機械にふれていたことが役に立った。

その間、馬賊たちは好き勝手なふるまいを始めていた。村人たちをすべて縛り上げると、家々にあった酒を集めて酒盛りを始めたのだ。すでに各家の蓄えは集め終わっているようだった。

「頭、こいつらどうします⁉」

酒に酔った勢いで、手下の一人が頭目にきいた。

頭目もしたたかに酔っていた。

「そうだな。騒がれるのも面倒だ。全員殺しちまうか」

頭目の言葉に村人たちは硬直する。

「殺すんならちょっと待ってくださいよ！　せっかくだ。楽しませてもらいましょうぜ！」

そういうと手下たちは村人の間に割って入り、年頃の娘を連れ出した。

「やめて！　やめて！」
「へっ、おとなしくしろっ！」
「きゃっ！」
娘の中には慶美の姿もあった。慶美も青ざめた顔ながら、必死に抵抗していた。慶美は暁明たちが愕然となることを口にする。
「やめて！　あたし、お腹の中に赤ちゃんが……！」
「知ったことか！」
手下は乱暴に慶美を組み伏せようとした。
そのときだ。
「待ちなさい！」
馬賊たちの前に紅蘭が姿を現した。
「あん？」
もちろん娘一人が出たところで動揺する馬賊たちではない。それどころか笑い出す始末だ。
「これはこれはお嬢ちゃん、いったいどうしたんだい？」
からかい口調で馬賊たちははやし立てる。が、紅蘭は毅然と叫んだ。
「みんなを放しなさい！」

「へへっ。放さないとどうなるのかな?」
「こうよ!」
ゴゴォォォォォォォォォォォォオン!
いきなり爆音が響く。
重砲の弾から火薬をとって作った即席の爆弾が爆発したのだ。
「なにっ!?」
ヒーン! ヒヒィィィィィィィン!
爆発の衝撃で馬たちが騒ぎ逃げ始めた。馬を留めてあった縄を切ったのも紅蘭だった。
「小娘がっ!」
思わぬ騒動を引き起こされて、馬賊たちは怒り心頭紅蘭に殺到した。娘たちは解放され、全員が紅蘭めがけて走ってくる。
紅蘭はこのときを待っていたのだ。

「ほいっ！」
紅蘭が隠し持っていた紐を引っ張った。

ドゴォォォォォォォォォォォォン！

重砲の発射音が響く。
「なんだっ⁉」
馬賊たちの歩みが止まった。が、なかなか着弾する様子はない。
「けっ、なにしやがった！」
殺気立った馬賊たちはジロリと紅蘭を見据える。
そこへ——

ヒュォォォォォォォ……ドゴォォォォォォォォォォォォォォォォン！

「うわあああああああああああっ！」
重砲の弾は真上から降ってきた。

あの短時間の間に紅蘭は重砲を改造し、一種の迫撃砲に作り替えたのだ。普通の重砲では地面と平行攻撃になり村人の間にもけが人が出てしまうかもしれない。その点、迫撃砲ならばほとんど垂直に撃ち出すことができ、狙いさえうまくつけば馬賊たちだけ選別して攻撃できる。紅蘭はそう考えたのだった。

（今だ！）

爆発の衝撃に吹き飛ばされ、馬賊たちは地面に突っ伏した。

その間を紅蘭は一直線に村人のもとに駆け寄る。手にしていた鎌で次々と村人の縄を切った。

「小娘ッ！」

ようやく馬賊も起き上がって、紅蘭のほうを見据えた。

紅蘭は別に相手を殺そうとしたわけではない。だから弾の威力は当然抑えてあったし、狙いもだいたいの所にしか据えてない。

馬賊たちは動けなくなった者もいたが、半数はそのまま武器を持って突っ走ってきた。

「きゃあぁっ！」

馬賊が銃を構え、それを見た慶美が悲鳴をあげた。

ガシイッ！

「うがっ！」
だが、その馬賊は次の瞬間、大地に倒れ込んでいた。
「大丈夫、あなたたち⁉」
片言の北京語が響く。女の声。あやめだ。
あやめは持っていた長い刀を抜きはなっていた。ただし、峰打ちだ。命に別状はない。
「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」
そのままあやめは突進した。あやめの剣の前に馬賊は次々と沈黙していった。
「すごい……」
あやめの活躍に紅蘭も、そして村人たちも呆然と見とれていた。
「そうそう。ミス・アヤメは強いね」
「えっ⁉」
いつの間にか紅蘭たちの横に例の英国紳士が立っていた。
「おじさんは？」
「私、パーシー・ホワード。英国の技師ね」

「技師？」
「人型蒸気と霊子力機関が専門ね」
「へっ⁉」
紅蘭がそのパーシー・ホワードと名乗る英国人技師と話をしているうちに、あやめの戦いは終わっていた。
最後に残った頭目の喉を、あやめの剣の峰がとらえた。
「うごっ！」
頭目は悶絶し、白目を剥いて気絶した。
「やったぁ！」
村人が歓声をあげる。
「よかった……」
紅蘭も安堵の吐息をもらす。
が、まだだ。
最初の爆発で倒れていた馬賊の一人が、銃を構えて立ち上がったのだ。
「死ねっ！」
銃は偶然近くにいた慶美を狙っていた。

「だめっ！」
思わず紅蘭の身体が動いた。
しかし、それより早く慶美をかばって銃の前に身をさらしたのは暁明だった。
「撃たないで！」

バシュンッ！

銃が放たれた。
そのときには銃と暁明の間に紅蘭の身体が入り込んでいた。
「あっ！」
「紅蘭！」
紅蘭は確かに胸を撃ち抜かれたはずだった。
「いたぁ……あれ⁉」
しかし、地面に倒れたはずの紅蘭はすぐに起き上がった。
「あれ？　あれ⁉」
紅蘭に向けて銃を放った馬賊はすでにあやめの剣の前に白目を剝いていた。

「あ……」
不思議がる紅蘭が懐から出したものはあの懐中時計であった。銃弾はまともに懐中時計に突き刺さっていた。
「父様……」
懐中時計を見つめながら、紅蘭はぽつりとつぶやいた。心の中に、幼い日最後に見た父策杏の笑顔が広がった。

「見ましたか」
「この目ではっきりとね」
立ち尽くして懐中時計を見つめる紅蘭の背後であやめとホワードが話し合っていた。
「懐中時計に当たったのは偶然じゃないね」
まじめな顔をしてホワードが言う。
「あの子の力が弾の弾道をねじ曲げて、懐中時計に弾を当てたね」
「霊力」
「そのとおり」
「やはり賢人機関の報告書にあった少女というのは彼女……」

「ミス・アヤメ、また一人、キミは見つけることができたね。ミスター・ヨネダも喜ぶだろう」

しばらく呆然と懐中時計を見ていた紅蘭だったが、はっと気づいて慶美のほうに向き直った。

「慶美さ……あっ……」

そこに見たのはお互いをいたわる慶美と暁明の姿だった。

「お義母さん、お義母さん」

「よかった、よかった。お腹の子も無事だったし……」

その光景を見て、紅蘭の頭の中をなんともいえない寂しさが覆っていた。

(あたしの居場所やっぱりないな……)

そんな気持ちを振り切るかのように紅蘭は笑った。最高に美しい笑顔だった。一筋頬を伝うものをともなって。

「紅蘭さん」

名を呼ばれて紅蘭は振り向いた。

あやめが微笑んで立っている。

「どうしてあたしの名を？」
「あなたをずっと探していたんです」
「えっ⁉」
「北京で内戦のとき、すべての銃弾をそらした少女……」
「あ、あの……？」
「突然のことで驚くかもしれないけど……あたしたちと一緒に日本に来てくださらない」
「えっ⁉」
「私たちにはあなたの力が必要なの」
「あたしの力……？」
あやめの目は澄んでいた。信じるに足る目だった。
それに、もうここには紅蘭の居場所はない。
紅蘭はもう一度趙家の人々を見た。郭宣も郭英も、あのきびしかった暁明も、そして慶美もみんな笑っている。が、その笑顔は紅蘭に向くことはなかった。
もう一度紅蘭は笑みを浮かべた。趙家の人々のために。別離の笑み。
「はい」
紅蘭はあやめのほうを向いて、静かにうなずいた。

8

太正八年四月、紅蘭は船で神戸に到着した。

神戸の外国人居留地にはパーシー・ホワードの屋敷があった。日本に慣れることと、紅蘭たっての希望でしばらくの間、紅蘭はここで生活することになる。

パーシー・ホワードのもとで、紅蘭は人型蒸気と霊子力機関について勉強した。霊子力機関、それが人の霊力をもとに動く機関であることもそのとき知った。

あやめは霊力を持った人間たちを集めるため、世界放浪の旅に出た。

太正十年十月。

あやめは旅から戻り、その足で神戸を訪れた。もちろん、紅蘭に会うためである。

「いやあ、あやめはん、おひさしぶりですなぁ！」

あやめを出迎えた紅蘭は、大連で会ったときとは違い、チャイナドレスに眼鏡をかけて見違えるような姿で現れた。流暢な日本語……とは言えず、おかしな関西弁を操って。

「どうしたの、紅蘭、その言葉？」

「えっ⁉　うちの日本語どこかおかしいですかいな？　パーシーはん！」
　奥からパーシー・ホワードも出てくる。
「別ニ、変ジャナイヨネ。ウチラノ日本語、完璧、完璧！」
　後から聞いたところによると、親日家のパーシーは京都、奈良、吉野などの古都に魅せられ、神戸からよくそちらに足を延ばして何日も滞在したとのことだった。もちろん紅蘭も一緒に。
　紅蘭の日本語はそうした過程で身についてしまったものだ。
「ホワード、紅蘭は？」
「一言デイエバ天才ネ！　モウ、ウチヨリモナニモカモ上ネ」
「えへへ」
　紅蘭が照れくさそうに笑った。
「でも飛行機は失敗ばかりなんですわ」
「飛行機？」
「うちの夢です。いつか実現したいと思ってるんです」
　あやめは満足そうに聞いていたが、やおら真剣な表情になって言った。
「紅蘭、東京に行くわよ。帝都に」

「えっ⁉」

「そこでもうすぐ発足する帝國華撃団(ていこくかげきだん)にあなたは入るの」

「帝國華撃団⁉」

「あなたの技術者としての腕(うで)、そして来(きた)るべき戦いのとき、戦士(せんし)としての腕が必要とされているのよ」

「うちにまかしといてください！　うちはやりまっせ！」

紅蘭(こうらん)が元気よく叫ぶ。

あやめも安心したようにうなずいた。

「紅蘭、向こうに行けばたくさんの仲間がいるわ」

「えっ……⁉」

「あなたとともに寝起きし、ともに戦う仲間たちが」

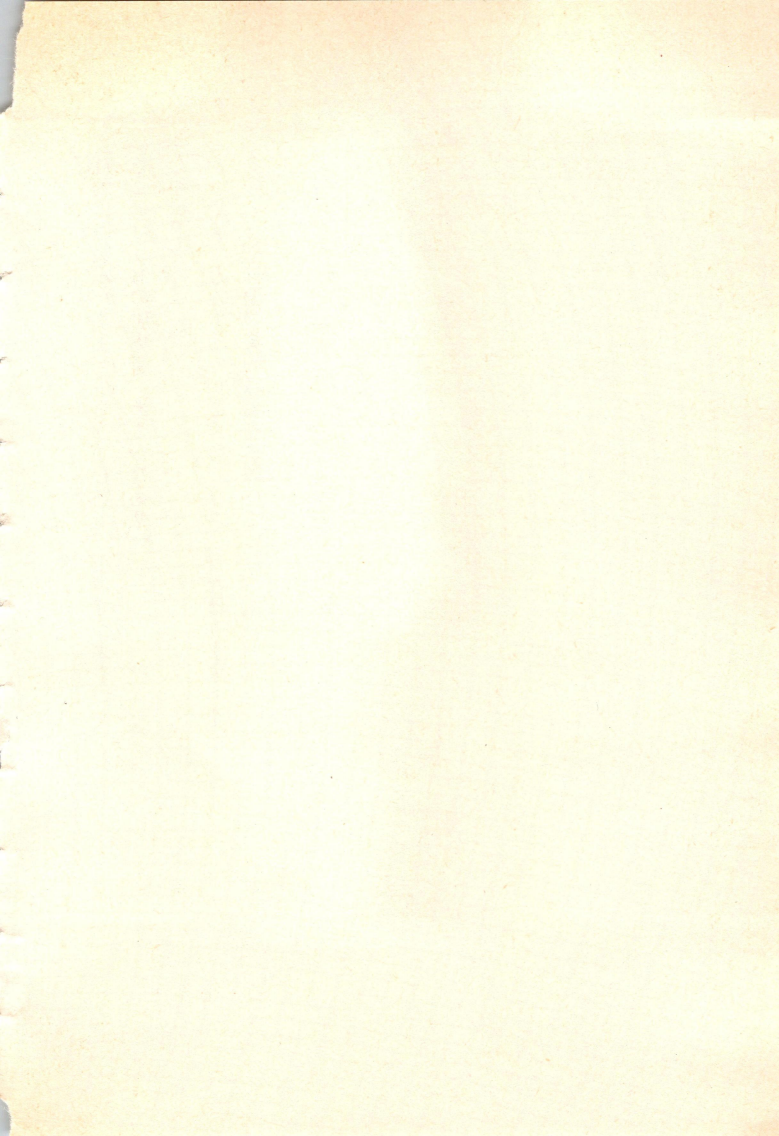
「仲間……」

紅蘭は戸惑(とまど)ったようにあやめを見た。

「あ、あの、うちの昔(むかし)のことは言わんといて下さい。そういうの知られるの苦手(にがて)で……」

「わかったわ」

「ありがとうございます」

紅蘭は微笑(ほほえ)んだまま、少しうつむいて、小声でつぶやいた。
「そこにはうちの居場所、あるかなぁ?」
「なぁに?」
「あ、いえ、なんでもないですぅ。うち、がんばりますっ!」
このとき、紅蘭の笑顔は最高に輝いていた。

アイリスねぇ、アイリスねぇ、
今、パリに来てるの。
お洋服いっぱい見たり。
シャネルの店で出たばっかの香水買ったり。
わーい！　わーい！　わーい！
でも、変なおじさんたちがやってきて……。
次回「サクラ大戦　前夜　第三話」。
太正櫻に浪漫の嵐！
アイリス、怒ったら怖いんだよォ！

第三話

1

〝フランスの庭〟とも呼ばれるロワール地方は、フランス最長の川であるロワール河畔一帯を指す。ここは十五世紀から十六世紀のヴァロア朝時代、フランスの政治と文化の中心地であった。ジャンヌ・ダルクが解放したことで有名なオルレアンはこのロワールの中心的な都市である。

そのオルレアンから南西におよそ五十キロ。ロワール川に面したそこにソローニュ城はあった。

幅二二〇メートル、奥行き一三二メートル、部屋数は五〇〇を超え、フランス全土においてはベルサイユ宮殿に次ぐスケールを持つ。その建築には四十年もの歳月が費やされており、レオナルド・ダ・ヴィンチをはじめとするルネッサンスを代表する建築家、芸術家がその腕を競った。

近くにあるシャンボール城と同じく、この城を建てさせたのは、フランス・ルネッサンス最盛期を統治したフランソワ一世である。彼はこれだけの城をたった一人の愛妾の心を慰めるために造ったと伝えられている。愛妾の名はイリス・ナヴァル。

それからおよそ四〇〇年。城は奇しくも最初の当主と同じ名前を持つ少女を受け入れていた。

一九二一年当時、八歳のイリス・シャトーブリアン。愛称、アイリスである。

「うふふ」

アイリスはいつものように南の廊下を一人歩いていた。

いや、一人ではない。親友のジャンポールも一緒だ。この物言わぬ親友は、アイリスが五歳のときに両親から贈られたクマのぬいぐるみだった。そのときからアイリスは片時もこの親友を離さず一緒にいる。

窓から差し込む陽にブロンドの髪が輝く。目はどこまでも澄んだように青い。「愛くるしい」という言葉がそのままこの世で姿形を得ればこうなるのではないか。そんなことすら考えてしまう。

それなのに、それほどの美少女を前にして城の者たちの態度はどうだ。

アイリスとすれ違ったメイド、使用人の男たちは皆うやうやしくお辞儀する。だが、どこかよそよそしいのだ。瞳の奥にあるのはなにかに対しての怯え。そう、目の前の少女に対して。

「ふふん」
アイリスはそんな大人たちの態度を気に留めていないようだった。少なくとも表面的には。挨拶をしてくる大人たちに極上の笑みを返している。
いったい大人たちが彼女に対して持つ感情の意味は⁉
南の廊下の突き当たりにはこの城でアイリスが最も気に入っている部屋がある。
中に入れば、そこは全面ガラス窓に覆われた部屋であることがわかる。部屋の中には無数のぬいぐるみ。外に広がるのは美しい花畑。
「おはよう、ポール、シャルル。おはよう、アンジュー、ジャンポール、リュネ」
アイリスはぬいぐるみの一つ一つに声をかけた。ジャンポールと同じく、どのぬいぐるみもアイリスにとっては大切な友達なのだ。
一通りぬいぐるみに声をかけると、アイリスは窓に近寄った。
窓の外は広い庭園になっていて、すぐ前には色とりどりの花壇がある。今は六月、日本と違って梅雨のないフランスでは一番過ごしやすい季節だ。花々もそれがわかっているのか、今を幸いにと咲き乱れていた。
だが、アイリスはその花をそれ以上間近で見ることができなかった。見られるのはガラス越しのみだ。

部屋には外への扉がない。いや、さらにガラスというガラスには細い鋼線が張り巡らせてあった。決して割れないようにと。それは窓ガラスを守るためというよりは、中にいる人間を閉じこめるためのものと考えざるを得ない。
だれかが窓を破って逃げ出すとでもいうのか？
「きれいなのに……」
つまらないといった口調でアイリスはつぶやいた。
「いいよ……みんな遊ぼう」
アイリスはぬいぐるみたちのほうに向き直った。
「おいで、ジャンポール、それにシャルル」
少し離れたところに置かれていたクマのジャンポール、さらにはその横にあった犬のシャルルにアイリスは声をかけた。
次の瞬間、驚いたことにその二つのぬいぐるみはふわふわと空中に浮かび上がったではないか。
「アンジューもリュネもリシュリューもフランソワも、みんなおいで」
アイリスの声とともに次々とぬいぐるみたちが浮かび上がる。
「みんな、グルグル回れ、回れ」

ぬいぐるみたちはちょうどアイリスのまわりを回るように飛び始めた。
「きゃは」
ぬいぐるみたちは生きているのか⁉　なにかあやかしの存在なのか⁉　それとも——
「やっぱりつまんない」
五分ほどしたところで、不意にアイリスが不機嫌そうな表情になった。その瞬間、ぬいぐるみたちがバタッと床に落ちる。唯一ジャンポールだけがアイリスの腕に収まった。
「だれかと遊びたいな……。外に遊びに行きたいな……」
アイリスがふたたび外を見た。

バリイイイイイイイイイイイイン！

突然、窓ガラスにヒビが走る。それも全面に渡って。
しかし、鋼線で補強されている窓ガラスは完全に割れることはない。
「ちぇっ」
アイリスが不満そうに口をとがらせた。
城の大人たちを怯えさせていたのは、アイリスのこの力だった。

2

アイリスのシャトーブリアン家はもともとはシャンパーニュ地方に領地を持つ貴族だった。実際、アイリスもシャンパーニュ地方で生まれている。

先祖をさかのぼれば十世紀にカペー朝のもとで王を凌ぐ勢力を誇ったシャンパーニュ伯にまで行き着く。そのシャンパーニュ伯の傍流の家系だった。とはいえ、名門には違いない。

シャトーブリアン家は第三共和制下のフランスでは珍しく、貴族をはっきりと名乗っていた。フランス革命、それに続く激動のナポレオン時代を見事に乗り切ったのだ。それには理由がある。

革命政府を牛耳ったロベスピエールも、皇帝ナポレオンもシャトーブリアン家の財力とヨーロッパ中に張り巡らされた金融ネットワークを無視することはできなかった。十五世紀以来、イタリアの諸都市国家と手を結び、一大金融財閥としてのし上がったシャトーブリアン家は、ハプスブルク家、ブルボン家がヨーロッパの表の顔とすれば、紛れもなく裏の実力者であった。これがシャトーブリアン家を生き残らせた。

無論、血塗られたヨーロッパの政治闘争の中で当主が暗殺の対象となることも珍しくない。

ましてや裏の世界でヨーロッパを支配しているとなれば言わずもがな。けれども代々の当主はそれらの実力行使すらも乗り切った。彼ら一族には不思議な力を有するものが多かった。予知、念動力……人智を超えたそういった能力が彼らの命を救った。が、それが〝霊力〟だとわからなかった時代、キリスト教的観念から言えばそれは悪魔の力に他ならなかった。人人はその力を忌避し、一族は必死に隠し続けるよりなかった。

それは現在においても変わることがない。

シャトーブリアン家始まって以来の力を見せたアイリスは、それゆえ隠されねばならない存在だった。

アイリスがその凄まじいまでの力を見せたのは一九一四年、ようやく一歳になったばかりのことだった。

一九一四年八月四日、ベルギーに侵入したドイツ帝国に対し、イギリスは正式に宣戦布告する。

ドイツ、オーストリア＝ハンガリー対イギリス、フランス、ロシアのヨーロッパ全土を巻き込んだ戦い——欧州大戦の始まりである。

戦場へと向かう兵士たちは、ドイツでもフランスでもイギリスでも皆楽天的に考えていた。

「クリスマスまでには帰れるさ」
しかし、これがまる四年に亘る時間と九〇〇万人の戦死者を出すことになろうとは。
開戦と同時にドイツは戦前のシュリーフェン・プラン（ドイツ前参謀総長であり、天才的な軍事戦略家であるアルフレート・フォン・シュリーフェン伯爵が企図した二正面作戦で、ロシアが動員を完了する前に、防備の手薄なベルギーからフランス北東部を突破し、パリを占領するというもの。なお、実際の作戦は参謀総長ヘルムート・フォン・モルトケの土壇場の作戦修正により失敗に終わった）に従い、ベルギーに侵入。ドイツ軍はフランス国境を突破し、最大二五〇キロの距離を蹂躙して、パリに迫った。
この蹂躙された地域にシャンパーニュ地方も含まれていた。

銃撃音と爆音の響く中、車の列は次々と発進する。
シャンパーニュ地方の一都市、ランス近郊の白亜の豪邸での光景だ。豪邸の主はロベール・ド・シャトーブリアン。二十七歳の年若ながら、シャトーブリアン家の当主だった。
ロベールはシャトーブリアン家の頂点に立つ人物だ。決して愚かではない。思慮深く、情勢の判断は常に的確だ。そのロベールにとって生涯最大の失点とも言っていい出来事がこの日に起こっていた。ドイツ軍の動員力を甘く見ていたのである。まさか、ドイツ軍がシャン

パーニュにこうも容易く迫ってくるとは。
もちろんロベールにも言い訳はある。戦争勃発に伴い、ヨーロッパ各地にあるシャトーブリアン家の財産の保全、さらには新たなビジネスチャンスへの対応などに追われていて、もっとも身近な危機に対する認識がおろそかになっていたのだ。
とはいえ、いくら言い訳をしたところで始まらない。
「クッ……」
車の中でロベールは唇をかみしめた。自らのうかつさを呪う気持ちで頭の中は満ちあふれていたが、霧のように立ち込めるその思いを必死に振り払い、ともかくこの危険から脱出することに全神経を注いだ。
(間に合うか……。間に合ってくれ！)
日頃、滅多に神に祈らないロベールだが、このときばかりは必死に祈り続けた。
ふと横を見ると妻のマルグリットが不安そうに自分のほうを見つめている。そして、妻の腕の中にはロベールの宝物があった。ようやく一歳になったばかりの娘――アイリスだ。
アイリスは眠っている。
「あなた……」
震える声で話しかけてくるマルグリットにロベールは力強く言った。

「大丈夫。大丈夫だから」
妻に……というよりも、それは自分に言い聞かせているかのようであった。
だが、そんなロベールの必死の思いは無惨にも打ち砕かれる。

ドゴォォォォォォォォォォォォォン！

突然、間近で爆音が響き、車列は大きく乱れた。
「ああ……！」
続いて、連なる森の中から現れる騎兵、そして銃を手にした兵士の群れ。ドイツ兵だ。

ズガァアン！　ズガァァァァァン！

銃撃音が響きわたり、ロベールは思わずマルグリットとアイリスをかばって座席の上に伏せた。

ガゴォン……ゴゴン……

車もその場で停止する。
「どうした!? なぜ走らない!? 全速力で……」
「そ、それが……」
運転手が情けない声をあげて、前を示した。
先頭を走っていた車が炎上していた。蒸気エンジンに運悪く弾が当たったらしい。
「……なんということだ」
「あなた、後ろ!」
「えっ!?」
すでに騎馬隊は寸前まで近づいていた。
フシュウ……ズゴン……ズゴン……
ようやく実戦兵器として戦場に投入されるようになった、人型蒸気の蒸気音も響いてくる。
「………」
ロベールの顔に絶望感が走る。馬上の兵士たちの顔が見えたのだ。開戦直後ということも

あって、兵士たちの目は殺気立ち、血走っている。紳士的な交渉を望んでも不可能に近いことが見てとれた。ましてやこちらはこの時代にはまだ珍しい車に乗っている。相手はこちらのことをどう思っただろう。

『生意気なヤツだ』

『気取りやがって』

『きっと金持ちだ！　捕まえて奪っちまえ！』

『殺せ、殺せ、見せしめだ！』

戦場心理で飢えたる狼となった兵士たちによって、自分たちは虐殺される――

「マルグリット……アイリス……」

ロベールは家族のほうに向き直った。そのまま二人を抱きしめる。

「あなた……」

「すまん……私のせいだ……」

「そんなことありません」

「マルグリット……」

マルグリットはアイリスの顔を見た。

「私は殺されてもいい……でも、せめてアイリスだけは……」

「アイリス……」

そのときだ。

銃撃音や爆音の中でも平然と眠り続けていたアイリスが突然目を開け、いきなり泣き始めたのだ。

オンギャア……オンギャア……オンギャア……

アイリスの泣き声が戦場に響きわたる。

と同時に凄まじい震動がその場を襲った。

「きゃあああああああああ！」

「うわあああっ！」

ズガガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアン！

なにかが崩れる音が響き、ロベールたちの乗った車はひっくり返りそうになるほどの衝撃を受けた。

揺れはどのくらい続いただろう。
不思議なことにやはりアイリスが泣き止むと同時に、揺れはピタッと止まった。
「いったいなにが……!?　ああっ！」
ようやく顔を上げ、後方を振り返ったロベールは我が目を疑った。
今まで普通の地面だった所が大きく裂け、深い谷を作っていた。谷がドイツ兵と自分たちを大きく分けている。
「奇跡だ……」
愕然とつぶやきながら、ロベールはハッと気づいたようにアイリスを見た。アイリスはすやすやと眠っている。激震はアイリスが起きて泣き出している間のみ起こった。偶然でないとすれば、自分たち一族の持っている不思議な力――それをアイリスが発動した。
「………」
一瞬、ロベールはアイリスに空恐ろしいものを感じていた。
「車を出せ！」
わき起こった思いを振り払うように頭を振ると、ロベールは叫んだ。
ロベールたちはパリ、さらにはロワール地方へと逃れ、シャトーブリアン家は窮地を脱したのだった。

その後、アイリスのことは一族の重大な関心事となった。特に一族の重鎮たちは世間に知られることを恐れた。やがて、マルグリットは反対したが、老父ルイからも強く促され、ロベールはアイリスを屋敷となったソローニュ城から出さないことを決意した。

3

イデオロギーに凝り固まった人間たちは得てして偏執的なものの考え方をする。他人から見ればどうにも実現不可能なことも、彼らからすれば当然成って然るべき事柄なのだ。

そこに陰謀の生まれる余地がある。

ソローニュ城から少し離れたトゥールの町の古びた宿屋の一室でも、そんな類の人間が額をつき合わせて話し込んでいた。

「計画は大丈夫か」

その場にいる他のだれよりも貫禄のある、四角張った顔の男が低い声で言った。

一同がうなずく。室内には五人。

彼らの前には一枚の絵図面があった。広い城の地図――ソローニュ城の詳細な図面だった。

「確かにロベールには娘がいるんだな」
ふたたび四角張った顔の男が口を開いた。
「間違いありません、シャルグラン様」
そばにいた男の答えに、シャルグランと呼ばれた男は満足そうにうなずく。
「決行は明日ですな。明日はシャトーブリアン伯も城にいるはずです。あわよくばシャトーブリアン伯の命も……」
「そうだ！　シャトーブリアン伯に死を！」
「共和制に死を！」
男たちが次々にぶっそうな言葉を口にした。あくまで他の部屋に聞こえないように。
シャルグランが興奮する一同を制して言った。
「諸君、シャトーブリアンに目にもの見せてくれようぞ！　共和主義者に肩入れしたエセ貴族に正義の刃を！　そして、ふたたびユリの花をフランス全土に！」
「おおっ！」
男たちは決意の表情で拳を天に突き上げた。
ユリの花とはかつてのフランス王家、ブルボン家の紋章であった。

一つの凶悪な陰謀とは別に、もう一つの、他人が聞いたら失笑しそうな陰謀も発動しようとしていた。それは、シャトーブリアン家のソローニュ城を囲む塀の一角で。

正門から遠く離れた石積みの高い塀の前に三人の少年が座り込んでいた。夜だというのに彼らは動く気配がない。というよりも、どうやら彼らはここで夜を明かすつもりらしい。

少年の年齢は八歳、十二歳、十七歳といったところか。顔つきが似ているところから兄弟と思って間違いなさそうだった。

「兄ちゃん、腹減った……」

一番年下の少年が一番年かさの少年を見て言う。

「オレも……」

中の少年も同じく言う。

「ジャン、ジョルジュ、我慢しろ！　明日になりゃ、その辺の畑でなんか食えるもん見つけるからさ！」

少し怒ったような口調で一番年かさの少年が言った。

少年たちの名は下からジャン・ドレ、ジョルジュ・ドレ、ジャック・ドレと言った。三兄弟である。彼らは戦災孤児だった。

欧州大戦は彼らのような戦災孤児を多数生み出した。七〇〇〇万人の兵士が戦い合い、

九〇〇万人の戦死者を出し、負傷者に至ってはさらにその何倍……。これほどの戦争の傷跡は戦後二、三年ではまだまだ癒えそうにない。彼らのような戦災孤児だけでなく、普通の家族でもちゃんとした家に住めない人間が数多くいたのだ。

彼らはパリから流れ流れてロワールまでやってきた。理由は簡単だ。パリに人が大勢流入し、彼らのねぐらが大人たちに奪われ、飯もまともに食えないようになったからだ。

生きていく場所を求めて彼らは彷徨っていた。このソローニュ城の塀の前にいたのはまったく偶然だった。

「でかい家だね、兄ちゃん」

ジャンが塀の向こうにそびえたつ城の塔を見上げて言った。

「バカ、家じゃねえよ。城だよ！　ほら、ルーブルとかと一緒さ」

得意げにジョルジュが言う。

「ふ～ん……」

ジャンは感心したようにすぐ上の兄の言葉を聞いていた。

その間、ジャックもまた黙ってソローニュ城を見つめていた。昼間、近くの人間に聞いたところによればシャトーブリアンとかいう想像もできないほどの金持ちが暮らしているという。

「中の住んでいる人はきっとおいしいものを食べてるんだろうな」
「だよな」
ジャンとジョルジュの話はどうしても食べ物のほうにいく。
が、ジャックは違った。
「この中の連中から金を巻き上げる方法はねえかな……？」
ポツリとジャックがつぶやく。
「えっ？」
長兄がなにを言ったかよくわからず、二人の弟は振り返った。
「この中の連中から金をとるにはどうしたらいいか⁉」
ジャンとジョルジュにたずねるというよりも、自問自答の口ぶりで、ジャックはもう一度同じことを言った。
「お金が余ってるかもしれないから、くださいって言えばくれるかも」
「バカ、それじゃあだめさ！　なんかさ、簡単な仕事でもさせてもらおうか？　皿洗いでも、なんでも」
ジャンとジョルジュが答えるのを案の定ジャックは聞いていなかった。なにごとか考え込んでいたが、やおら顔を上げて言った。

「誘拐(ゆうかい)……」
「えっ？」
驚(おどろ)いたように二人の弟は兄の顔を見る。八歳のジャンでも誘拐の意味は理解していた。
「誘拐って悪いことでしょ」
ジャンが恐(おそ)る恐(おそ)るジャックに話しかけた。
「まあな……」
「そういうことやっちゃいけないんじゃ……」
ジョルジュも不安そうな顔つきでジャックに言う。二人は知っていたのだ。この長兄がやると言ったら本当にやってしまうことを。
「バカ！　いいんだよ！　オレたちみたいなかわいそうな人間がやるんだ！　神様だって許してくれらあ！」
「で、でも……」
「誘拐するったってだれを……？」
「ここんちだって子供くらいいるだろ。子供だよ、子供！　ガキ！」
「で、でも……」
「そういうことはやっぱり……」

「ジャン、腹一杯食いたいだろ」
「う、うん」
「ジャック、ちゃんとした家に住みたいだろ」
「そりゃそうだけど」
「だったら決まりだ！　オレは誘拐をする！　この家のガキを誘拐して、オレたちは金持ちになるんだ！」
いささか不謹慎な夢を語りながら、ジャックは目を輝かせた。
ジャンとジョルジュは不安そうに顔を見合わせるばかりだった。

4

アイリスには予感があった。その日、自分になにか大きな出来事が起こるという。
今のアイリスにとって希望はたった一つ。それは外に遊びに行くことだ。
頼めばどんなものだって聞いてくれる父親も、ただ一つ外に遊びに行くことだけは許してくれなかった。母親に至っては泣きそうな表情になってしまう。
泣き、わめき、ただをこね、力をつかいまくり……そんなことを繰り返してもどうしても

外に出してもらえなかった。

五歳になって、自分が外に出られない理由が自分の持つ力のせいだとようやくわかった。それが普通の人間にはないものだと知ったのもこのころである。

子供の心は敏感だ。使用人たちの目にどこか怯えがあることもアイリスは気づいていた。

そして、それがやはりこの力のせいであることも。

やがてアイリスは外に出たいと言わなくなった。

もちろん外に出たいという気持ちは前よりも強くなっていたが、それ以上に人から疎まれるのが怖かったのだ。

「アイリス……ひとりぼっちなんだ」

どうしようもない孤独感を幼い心は感じていた。

両親はアイリスの力のことなど気にもせず扱ってくれる。けれど、違うのだ。アイリスとは別の人間だ。自分とは違い、外に自由に出て、だれからも疎まれることのない人間なのだ。

「遊びに行きたいな……。だれかと外に遊びに行きたいな」

その思いがかなうかもしれない——そんな予感がアイリスにはあった。

5

その日、ロベール・ド・シャトーブリアンは居城ソローニュ城で美しい女性の訪問を受けていた。
ロベールの前のソファに腰を下ろした女性は、東洋的な顔立ちながら、フランス人的な感覚からしても十分美しいと認められる。
彼女は「藤枝あやめ」と名乗った。
シャトーブリアン家の頂点に立つロベールが東洋の一女性の訪問をなぜ許したのか。それはある筋からの強力な紹介があったからである。彼女もまた、ヨーロッパの裏の顔を知っているようであった。
「あなたのような美しい女性に我が城に来てもらえるとは光栄です、マドモアゼル」
「お上手ですわね、ムッシュ」
あやめの口から流暢なフランス語が紡ぎ出され、そのままニッコリと微笑んだ。
人を引き込んでしまいそうな微笑み。さすがのシャトーブリアン家当主も思わず見とれたように視線を動かせなくなる。

「どうしましたか？」
微笑んだままあやめが言う。
「あ、いや……東洋の神秘を垣間見たような気持ちになりました。美しさとは素晴らしいものですな」
「……美しさは時に人をだまします。ムッシュ、私の心にもしもとんでもない悪魔が住んでいたとしたら、あなたは一目で見抜かれますか？」
「さあ……私は美しさに見とれたまま、その悪魔の虜になってしまうことでしょう」
あくまでウイットに富んだ会話をロベールは続けた。お互いにまだ手の内を見せない。あやめの訪問の目的がなんなのか。相手が切り出さない以上、ロベールのほうから切り出せば交渉はあやめに有利に進む可能性もある。そのあたりの駆け引きは裏の金融界で十分学んでいる。
不意にあやめは立ち上がって、窓に近づいた。
窓の外には南の庭園が広がっている。そして、あのアイリスお気に入りの南の長い廊下も見える。
「このお城はとても美しいですわ。私の国のどの城よりも」
「ありがとう、マドモアゼル」

「あまりに美しいので、その裏に隠されたことに気づかないほど」
突如、部屋の空気が凍りついた。
険しい表情となったロベールがあやめを見つめる。あやめはまだ背を向けたままだ。
「あの南の廊下……なぜああまで頑丈な造りになってますの？　まるでだれかを閉じこめているかのように」
あやめの一言がロベールの心に鋭い刃となって襲いかかった。
「……………」
「ねえ、ムッシュ」
あやめが振り向いた。顔に浮かぶのは東洋的な笑み――が、今度はとてつもなく挑発的に見えた。
「あなたの目的は……？」
激昂しそうになる自分をロベールは必死に抑えつけていた。相手のペースに乗せられたら負けなのだ。
「賢人機関から聞きました。あなたの娘、イリス・シャトーブリアンのことを」
「！」
アイリスの名が出たとき、ついにロベールは激しい感情を顔に出していた。おまえはいっ

たいなにが言いたいのだ——と。

〝賢人機関〟——それがロベールにあやめを会わせた組織だった。その意向はシャトーブリアン家としても無視できない。

「賢人機関とあなたがどういう関係なのかは知らない。しかし、アイリスのことはそっとしておいてほしい！」

「認められましたね」

「……！」

思わずロベールは舌打ちをした。ロベールの負けだった。あくまでとぼけるふりをして相手を追い返すことすらできたのだ。挑発的な態度をとるあやめのペースにまんまと乗せられてしまった一瞬だった。

「シャトーブリアン伯」

あやめは真剣な表情になっていた。さっきまでの挑発的な態度など微塵もない。真摯で切実な顔つきだ。

「私たちはどうしてもあなたの娘さん……アイリスさんの力が必要なのです」

「…………」

「世界的な情報網を持つシャトーブリアン家ならもう知っているでしょう。霊力のことを」

「……知っている。私たちの一族の中にそれを発現する者が生まれてくることも」
「そしてアイリスさんはとてつもなく巨大な力を持って生まれた」
「…………」
「賢人機関のほうで一九一四年のシャンパーニュでの事件は調べました。ドイツ軍の進撃を止めた怒涛の力……」
「やめてくれっ！」
ロベールが大声で叫んだ。冷静沈着を旨とするロベールからすれば極めて珍しいことだった。
「アイリスには触れないでくれ！　アイリスは私の宝物だ！　アイリスは私のすべてだ！」
「しかし、あなたはその宝物を閉じこめ、隠しています！」
あやめも強い口調で言った。あやめにとっても今が正念場だった。
「遊び盛りの子供を外に行けないような生活をさせる。彼女はそれで本当に幸せでしょうか？　シャトーブリアン家の力を使えば彼女が手に入れられないものはない。たった一つ、自由をのぞいて」
「う……」
「なぜです？　八歳の子供にとって最もつらいことを……なぜそんなことをするのです⁉」

「それは……」
「人々が平和に暮らすためにもアイリスさんの力は絶対に必要です。だからこそ賢人機関も私たちに協力してくれています。そしてこれはアイリスさんのためにもなるのです！」
「……あなたはいったい何者だ？」
「やがて日本で発足する〝帝國華撃団〟の副司令、藤枝あやめ」
「…………」
「アイリスさんを日本の私たちのもとに預けてください！　日本ならアイリスさんの自由があります。なぜなら、帝國華撃団の隊員たちは皆、アイリスさんのように強い霊力を持つ者たちだから」
「えっ……⁉」
「アイリスさんの気持ちがわかるから……。仲間とともにいればアイリスさんが隠れ住む必要はありません！　ムッシュ、シャトーブリアン伯……人々の安らぎのために！　そして、アイリスさんの自由のために！」
あやめはまっすぐロベールを見つめてくる。ロベールにもあやめの必死な思いがわかった。
だが、だからといって――
「私はアイリスを……」

そのときだ。

ズガガアアアアアアアアアアアン！

突然、爆音が響きわたり、城内が大きく揺れた。

衝撃で、あやめもロベールも床に倒れ込む。

「なんだ⁉」

「これは……⁉」

二人は起き上がり、窓に近づいた。

城の一角から煙が立ち上り、完全武装の兵士たちが侵入してくるのが見えた。

6

爆薬を使って、極めて強引な方法でソローニュ城に侵入したのは、あの宿屋で陰謀を話していたグループ——シャルグランたちだった。

「狙うは娘と……シャトーブリアン伯ロベールの命だ！」

もちろん、シャトーブリアン家にもボディガードたちはいたが、武装が違いすぎた。シャルグランたちは爆弾を投げつけ、強引に突き進む。

ズガァァァァァン！　ドゴォォォォォォォォォォォォン！

爆音と銃撃音で城内はパニックになっていた。そのパニックの中をシャルグランたちは奥へと向かっていた。

パニックになっていたのは城内だけではない。
塀の外で城の中をうかがっていたドレ三兄弟も爆音でパニックになっていた。
一番下のジャンは覚えていなかったが、ジョルジュ、そしてジャックに至ってははっきりとした記憶があった。あの欧州大戦のときの記憶が。
彼らは欧州大戦が始まる直前の頃、フランス北西部、大西洋に近いフランドル地方にいたのだ。やがて開戦。迫ってくるドイツ軍兵士。興奮した兵士たちによる虐殺——
両親は殺されたが、兄弟たちは瓦礫の中に身を潜めてようやく助かった。ジャンが泣き出さないように必死になって口を押さえていたことをジャックは今でも思い出す。

「わ、わ、わ……！」
「兄ちゃん……！」
三人はガクガクと身体を震わせ、立ちすくんでしまっていた。
爆音をアイリスは不思議な思いで聞いていた。
もちろん不安感はある。が、これが自分の新たな運命を切り開く始まりだという漠然とした思いもあるのだ。
その日もアイリスはお気に入りの南の部屋にいたが、そこを抜け出した。もちろん、ジャンポールを連れて。
「あっち……」
自分の頭に浮かぶイメージのまま、アイリスは歩き出した。
シャルグランたちは確実に目的地に近づいていた。
城の内部は何度かの打ち合わせで徹底的に理解している。そこまで城の中を調べ上げたのはシャルグランの部下の一人だった。彼は一年以上、この城の使用人になりすましていた。
シャルグランは一隊を率いて、ロベールの執務室に向かっていた。別の一隊がシャトーブ

リアン家の一人娘、イリス・シャトーブリアン——アイリスを捕らえに向かっている。
「ここだ！」
シャルグランは叫ぶやいなや、ドアを蹴破った。

バンッ！

そのまま室内に飛び込み、持っていた銃を乱射する。

ズガガガガガガガガガガガガァアン！

室内に今日ロベールがいることはわかっている。もしいれば、これでロベール・ド・シャトーブリアン伯の命はこの世から消えていることは間違いなかった。
ロベールはいた。シャルグランの視界にはっきりと映っている。ただし、無傷のままで。
「なにっ⁉」
ロベールの前に女がいた。髪の長い東洋系の女——あやめだ。そして、銃の弾はすべてあやめの前の床に落ちていた。

「バカな！」

ズガガガガガガガガガガガガガガガガッ！

ふたたびシャルグランと部下たちは銃を撃った。今度こそ確実にロベールを狙って。

だが、あやめとロベールのまわりには、まるで透明な壁があるかのように、すべて弾がはじかれてしまう。

「なんだと⁉」

信じられないといった顔つきでシャルグランが立ちすくんだとき、シャトーブリアン伯の声が響いた。

「おまえはシャルグラン！　エティエンヌ・シャルグラン！」

「ちっ！」

その声に我に返ったシャルグランはふたたび銃を構えようとした。

が、それよりも早く疾風のごとくなにかが動いた。

ジャキイイイイイイイイイイン！

白刃が舞う。
シャルグランの銃は銃身の真ん中で真っ二つに斬られていた。続いて、部下たちの銃も。
「なにっ⁉」
あやめの剣だ。
隠し持っていたあやめの懐剣がものの見事に鉄の銃身を斬り裂いたのだ。
「はあっ！」
さらに電光石火のごとくあやめが動く。
近くにいた男の襟首をつかまえて、そのまま円を描いて床に叩きつけた。円の動き――合気道。
あやめは大藤流合気柔術の使い手だった。
「やっ！」
男たちはあやめのその動きについていけなかった。シャルグランをのぞく他の男たちはすべてあやめの手によって床の上で大の字に転がった。
ロベールがシャルグランをにらみつける。
「シャルグラン、貴様！」

「ロベール！　おまえらシャトーブリアン家さえなければ、先の大戦でフランスは負けていた。そして、無能な共和制に代わって、このフランスには栄光のユリの花が咲き乱れていたはずだったのに！」

ひとしきり叫ぶと、シャルグランは懐から黒い塊を取り出した。

「危ない！」

あやめが叫び、ロベールに向かって飛ぶ。

「死ね、ロベール！」

シャルグランが塊をロベールに向かって投げるや否や、廊下に飛び出した。

ドガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアン！

室内を大爆発が包み込んだ。

7

廊下を歩くアイリスの前に銃を構えた男たちが次々と飛び出してきた。

アイリスは怯えたふうもなく、キョトンとした表情でそれを見ている。
「おじさんたち、だれ？」
男たちは殺気立っていた。激しい口調でアイリスを詰問するように叫ぶ。
「イリス・シャトーブリアンか⁉」
だが、アイリスはそれでも男たちを怖がらなかった。
「そう。アイリスだよ。おじさんたち、アイリスと遊んでくれるの？」
男たちはアイリスの言葉を聞いていなかった。
「捕まえろ！」
男たちの一人が叫び、いきなりアイリスに飛びかかってくる。
「やぁん」
アイリスはするりと男をかわした。
男にはアイリスが素早い動きで走ったと見えただろう。しかし、アイリスの足は床についていなかった。例の力を使ってアイリスは自分の身体を飛ばしたのだ。
「鬼さん、こちら！　アイリスはこっちだよ！」
アイリスはうれしそうに駆けていく。
男の一人が銃を構えるが、別の一人に止められた。

「バカ、やめろ！　大切な人質だ！」
慌てて男たちはアイリスのあとを追った。
爆弾の威力は凄まじいものだった。
瀟洒なシャトーブリアン伯の執務室は見るも無惨な状態になっている。花瓶や壺などの陶器製のものはすべて割れ、窓ガラスも一枚も残っていない。木製のものは折れ、または黒こげになり、机やソファも吹き飛んでいる。床に倒れたシャルグランの部下たちも血を流して重傷だ。
そんな状況の中でもシャトーブリアン伯ロベールとあやめは無事だった。ふたりを無傷で保ったのはただ一つ、あやめのあの不思議な力だった。
「マドモアゼル、あやめ……あなたのその力はアイリスと……」
「………」
あやめは静かにうなずいた。
「私もアイリスさんと同じ霊力の持ち主です。だから、アイリスさんの気持ちはわかるつもりです」
「………」

「シャトーブリアン伯、もう一度アイリスさんのことを考えてください。アイリスさんを私に預けてください」

「…………」

ロベールは無言だった。だが、前よりもいくらかは好意的にはなっていた。あやめを見つめる柔和な顔がそれを物語っている。

そこへ、執事と思われる身なりの男が数人の護衛の男たちと飛び込んできた。

「旦那様！　旦那様！　ご無事ですか⁉」

執事は部屋に入り、ロベールがしっかりと立っているのを見ると、安心したようにへなへなと座り込んでしまった。

「よかった、旦那様……」

「ミシェル、私は大丈夫だ。それよりもやつはどうした⁉　シャルグランは？」

「シャルグラン……？」

「そうだ！」

「い、いえ……だれにも会いませんでしたが」

「そうか……」

考え込むふうのロベールに対して、あやめが口を開いた。

「あの男を知っているのですか?」
「ああ……。エティエンヌ・シャルグラン。狂信的な王党派集団〝白旗党〟の大幹部だ」
王党派——フランス革命以前の国王を抱く政治形態を目指す者たちを称して言う。
フランスではナポレオン帝政の後、王政復古が起こった。亡命していたルイ十八世がパリに入場し、革命以前のアナクロニズムな儀式が次々と復活したのである。この王政は次のシャルル十世まで続き、そこで民衆によって七月革命が起こる。民衆が選んだのはオルレアン家のルイ・フィリップであった。が、この七月王政も長くは続かず、その後第二共和制、さらにはナポレオン三世による第二帝政へとフランスは進んでいく。
シャルグランたち〝白旗党〟の求めているのは、これらの時期の不安定な王政でなく、フランス革命以前の強力な王政だった。
ちなみに白旗とはブルボン王家の旗である。現在でもフランスの国旗——赤、白、青の三色旗の白はこの王家の白であるという。
「彼と私はソルボンヌの同期生だった。在学中から彼は私のことを敵視していた。裏切り者とね。彼は今は落ちぶれてしまったが、名門を誇った大貴族の家柄だったんだ」
「かつての栄光を王政復古によって取り戻したいというわけですね……」
「それがいかに今の時代とかけ離れているかわかっていない……。哀れな……」

どこか憐れみのこもったつぶやきをロベールがもらしたときだ。
今度は美しい女性がドアから姿を見せた。
透き通るような清楚な女性――シャトーブリアン伯の妻のマルグリットだった。
「おお、マルグリット」
「あなた……あなた……」
マルグリットの顔は真っ青で今にも倒れんばかりだった。自宅が襲撃された――というだけではなさそうだ。
すぐにロベールもそれに気づき、表情を一変させて口を開いた。
「なにかあったのか?」
「アイリスが……アイリスがどこにもいないんです!」
「なんだって⁉」
ロベールも、あやめも、その場にいた全員の間に衝撃が走った。

8

その少女は空から降ってきた――という表現がぴったりだった。

爆音も銃撃音も止んで、ようやくドレ三兄弟が落ち着きを取り戻したときだ。

ドシイイイイン！

「うわっ！」
「兄ちゃん！」
塀の向こうからジャックの上にいきなり女の子が落っこちてきたのだ。
「きゃはは！　ごめんなさい！」
降ってきた少女――アイリスが笑顔で言った。
兄のことを心配していたジャンとジョルジュは、一瞬兄のことを忘れ、ポカンと口を開いたままアイリスを見つめていた。まるで人形のような、自分たちとは異質な、清楚で上品な存在に心を奪われたように。
「おい！　どいてくれ！」
ジャックの声にジャンとジョルジュは我に返った。
「ど、どいてくれよ！　下にいるのは兄ちゃんなんだ」
「うん」

アイリスもジャックの背中から飛び退いた。
「いてえ……。なんなんだ、いったい……」
ぶつくさ言いながら起き上がったジャックも、弟たちと同じように一瞬ポカンとアイリスに目を奪われた。
アイリスがニッコリと笑みを浮かべてジャックの顔をのぞき込んでいた。
「お兄ちゃんたち、だあれ？」
天使の微笑み――
三人の兄弟はまるで魔法にかかったように呆然としゃべっていく。
「オレ、ジャン」
「オレはジョルジュ」
「ジ、ジャックだ」
「ふぅ～ん、ジャンにジョルジュにジャック……。えへっ、お兄ちゃんたち、よろしくね」
ふたたびアイリスが笑みを浮かべた。
そのあとは、もうアイリスの独演場だ。呆然とした兄弟を前にアイリスは一方的にしゃべりまくる。
「アイリスねえ、ずっと外に出てみたかったんだ！　でもねえ、パパもママも絶対に出ちゃ

だめって言うの。でね、でね、アイリスずっと我慢してたんだけどォ……今日、変なおじさんたちが来て、鬼ごっこしてる間に外に出られちゃったんだよ。なんでかアイリス知らないけど、壁とか壊れてたの。それでね、アイリスね……」
アイリスの話はまだまだ続く。が、このときにはジャックは気づいていた。
怪訝な顔でジャックが口を開く。
「おまえ、ここんちの子か？」
「うん、そうだよ」
返事を聞くや否や、ジャックが叫んだ。
「ジャン、ジョルジュ、捕まえろ！」
けれど、二人の弟たちは未だに魂が抜けたように呆然としたままだ。
「くそっ！　このォ！」
ジャックがアイリスに飛びかかった。
「きゃっ！」
見事にジャックの腕はアイリスの身体を抱きしめている。
「やったぜ！　これで金が……」
「なにすんのよ！」

アイリスが怒(おこ)った顔つきで叫んだ。

ドォォォォォォォォォォォォォン！

「うわぁぁぁっ！」

ジャックの身体が大きく吹き飛ぶ。

「兄ちゃん⁉」

なにが起こったのかという顔つきでジャンとジョルジュがジャックを見た。ジャックも一人と同じ顔をしている。

「女の子に対して失礼よ！」

なおも不機嫌(ふきげん)な声でアイリスが言った。

ヒュン！　ヒュン！　ヒュン！

「うわぁぁぁぁっ！」

「や、やめてくれ！」

アイリスのまわりの石が浮かび上がり、それが兄弟たちに降ってくる。
必死で石をよけながら、兄弟たちはそれをアイリスが起こしていることを知った。
そして出てしまったのだ。ジャックの口から。その刺激的な一言が。
「あ、悪魔だ！　化け物だ！」
「え……」
ピタッと石の攻撃が止まる。空中にあった石もすべて地面に落ちた。
アイリスは悲しそうな表情でジャックを見ていた。ジャックは怯えたような顔つきになっている。ジョルジュも同じだ。
「あ……」
アイリスは今にも泣き出しそうな顔つきに変わっていた。「化け物」と呼ばれたことがこの少女をどれだけ傷つけたか。それはアイリスが恐れていた、絶対に言われたくない言葉だった。
「お兄ちゃんたちも違うんだね……」
アイリスは寂しそうにつぶやいた。
ジャックとジョルジュは怯えた表情のままなにも言わない。
「行こう、ジャンポール」

ジャンポールを抱きしめ、アイリスは歩き出そうとした。が、その歩みが止まる。
「すごい、すごいよ！」
ジャンが目を輝かせて、興奮したように叫んでいた。
「すごいなぁ、おまえ！　もう一回やってよ！　かっこいい！」
「えっ⁉」
アイリスは驚いてジャンを見た。
ジャンは真剣に興奮し、感心している。アイリスの力をうらやましがっている。
「オレもやってみたい！　どうやったらできるの？　ねえ！」
ようやくアイリスの顔に笑みが戻る。
「なんか他の人はできないみたいなの。アイリスだけ」
「いいな、いいな」
「えへっ」
同じ歳くらいの子供の会話を聞きながら、ジャックもジョルジュもようやく警戒心を解き始めた。
「おまえ、今からどうするの？」
「アイリスねえ、パリに行ってみたいの」

「パリに？」
「うん」
「パリならオレたちくわしいから案内してやるよ！」
「ホント？」
「いいよね、兄ちゃん」
「あ、ああ……」
ジャンの元気な声に気圧されたように、ジャックとジョルジュはうなずいた。
「やったぁーっ！」
アイリスはジャンポールを高く突き上げて、全身で喜びを表現していた。もう悲しみの表情は微塵もなかった。

ソローニュ城から少し離れた森の一角で、シャルグランがいらついたように叫んでいた。
「まだか⁉　娘はまだ見つからないのか⁉」
「確かにこっちに来て……」
そのとき、一群の男たちが駆けてくる。
「見つけました！　変なガキどもと一緒にいるところを！」

「なんだと！　なぜ捕まえなかった！」

「それが……町の中に入っちまって……。今、モラとマチィエのやつが追ってます」

「クッ……なんとしても捕まえるんだ！　オレたちも行くぞ！」

「はっ！」

シャルグランたちも動き出した。アイリスを追って。

さらにそのシャルグランを追って動き出した影があった。

長い髪の美女――あやめである。

あやめはなんとしてもアイリスを助けると、シャトーブリアン伯のところを辞去してきたばかりだ。

「アイリス……」

決意と心配の入り交じった表情であやめはその名をつぶやいた。

一瞬強い風が吹いて、周囲の木々をざわめかせた。

あやめの髪もまた風に揺れていた。

9

パリには国鉄のターミナル駅が六つある。北駅、東駅、サン・ラザール駅、モンパルナス駅、オーステルリッツ駅、リヨン駅の六つで、パリッ子たちはそれぞれの目的地別に駅を利用する。すなわち、ノルマンディなどの北部へ向かうときは北駅。アルザスやドイツに向かうときは東駅。フランス中西部へはサン・ラザール駅。ブルターニュ地方へはモンパルナス駅。ロワールなどのフランス南西部へはオーステルリッツ駅。そしてマルセイユやイタリアに向かうときはリヨン駅……という具合である。

一九二一年六月十八日。この日、奇妙な四人組がオーステルリッツ駅に降り立った。妙にビクビクした様子の年長の少年以外はいずれも十歳前後の子供ばかりだった。

行き交う人々は、その中のただ一人の少女に目を奪われた。気品あふれる愛くるしさ。金髪でブルーの瞳。手にはクマのぬいぐるみを抱えている。それでなくとも目立つのに、残りの三人のみすぼらしい身なりが彼女をますます引き立て人々の瞳に映し込む。

「うふふ」

少女が軽やかに笑った。

彼女をじっと見つめていた人々の間からホウとタメ息がもれる。そのスター性は天性のもの。

そう、イリス・シャトーブリアン——愛称アイリスである。

アイリスのあまりの注目されように一緒にいるドレ三兄弟の長男ジャックは気が気ではなかった。目立ちすぎては計画に支障をきたす、と。

ジャックはまだアイリスを利用してシャトーブリアン家から身代金をとることをあきらめていなかった。もっとも計画といっても、シャトーブリアン家にどう接触するかも考えていない。第一、このパリまで来てしまったことだって、アイリスに引っ張られて——というほうが正しい。うやむやのうちにいつの間にか来てしまっていたのだ。

「い、行くぞ」

ジャックは二人の弟とアイリスを促して、その場を去ろうとした。

が——

「やだ」

アイリスの答えは短く、そして強固なものだった。人々の好意的な好奇の目はアイリスにとって心地よいものだ。というのも、今までソローニュ城の中でのアイリスへの視線は、敬いはあっても好意はなかった。底にあるのは恐れのみ。もうしばらく好意の視線の中に浸っ

ていたいと思うのは無理からぬことであったろう。

「やだって、おまえな……」

「やなものは、や！」

「と、ともかく、行くぞ！」

「やだぁ！」

パシイイイイイイイイイイン！

突如、駅構内にあったガラスが砕け散った。

「ひっ！」

動揺が周囲に広がる。人々はなにが起こったのか瞬時には理解していなかった。だが、彼らは感じたのだ。強烈な感情を。「いやだ」という拒絶の想いを。

「やだってば、やだっ！」

バシイッ！　バシイイイッ！　バシイイイイイイイイッ！

アイリスの叫びとともに、周囲の物が次々と弾けていく。窓ガラス、ベンチ、街灯、掲示板……。

「アイリス、まだここにいるの！」

バゴォオオオオオオオオオオン！

ついに停まっていた列車から大きな音が出て、車体が大きく傾いだ。見れば、車輪がはずれ、脱線してしまっている。

「あ……」

ようやくアイリスが平静さを取り戻したときには、アイリスのまわりからは三兄弟以外だれもいなくなっていた。人々はいきなり起こった怪異な出来事に驚いて逃げてしまったのだ。

「……つまんない。行こう、ジャンポール」

ジャンポールを抱いたまま、アイリスは歩き出した。

呆然と立ちつくしていた三兄弟は慌ててアイリスのあとを追った。

壊れた列車の陰から二人の男が啞然とした表情でアイリスたちの後ろ姿を見つめていた。

「なんだ、あれは……⁉」
「確かにあの娘が……」
二人は顔を見合わせて、しばし呆然としていたが、やがてハッと気づいたように列車の陰から飛び出した。
「俺はあいつらを追う！　おまえはシャルグラン様に連絡を！」
「わかった！」
二人の男はそれぞれ別の方向に駆け出していった。

10

フランスを代表するファッション・デザイナーであるガブリエル・シャネル——通称ココ・シャネルは一八八三年、ロワール河畔のソミュールで生まれた。
母親が早くに死に、孤児院で育てられたという過去を持つ。お針子や旅回りの歌手など、苦しい青春時代を過ごした彼女の転機はやはり一九一四年からの欧州大戦であった。
欧州大戦の間、男を戦場にとられた職場では代わりに女性が進出し、彼女たちは動きやすい服を求めていた。その欲求に応えたデザインをシャネルはいち早く発表し、一九二〇年、

三十七歳のときにカンボン通りに店を開いた。

社会に進出し始めた女性たちにシャネルの服は圧倒的な支持を受ける。シャネルはそれだけにはあきたらず、一九二一年にはデザイナーとして初めて香りのデザインを手がけた。名高いシャネル『NO.5』の登場である。

「アイリス、ここに来たかったの」

アイリスとドレ三兄弟の前には高級そうなブティックが建っている。

オーステルリッツ駅からセーヌ川にそって西へと向かい、橋を渡ってコンコルド広場を通り抜ける。マドレーヌ寺院を左手に見ながら東に少し行くと、そこにカンボン通りがある。

そして、フランス司法省の前にその店はあった。

ココ・シャネルの店『Chanel』。

「アイリスねえ、ママがつけていた香水を買うんだ！」

「お、おい！」

楽々と店内に入っていこうとするアイリスにジャックは焦ったように声をあげた。

「兄ちゃん、ここ……」

「ああ……」

ジャンとジョルジュは不安そうにアイリスとジャックの背中を見つめている。

ドレ兄弟はすでにその外観からして気圧されていた。貧富の差が激しかったこの時代、高級感を漂わせる店の敷居はどん底に位置するドレ兄弟たちのような人間にとって天よりも高い。

が、アイリスにはそういった認識はない。もちろん、そこにはアイリスがもともとこの国でも頂点に近い家に生まれたということもあるが、そういった感情そのものが欠如しているのだ。

かつて、フランス革命でギロチンにかけられた悲劇の王妃マリー・アントワネットは、パンを求める民衆の暴動を聞いて、つぶやいた。

「パンがないのならばお菓子を食べればいいのに」

これを聞いた民衆側は王妃の傲慢さに怒ったというが、果たして本当にマリーアントワネットは傲慢だったのだろうか。王妃は民衆をあざけるためにそのような言葉を吐いたのだろうか。

いや、そうではないだろう。当時のフランス王宮は財政的に危機に瀕していたとはいえ、王家の食事が質素になったということはない。マリー・アントワネットにとっては、もしパンがなければお菓子があるというのは彼女の現実だったのだ。それ以外の状況が彼女の前

に現出したことはない。少なくともその時点までは。彼女にとっては素直な疑問だったに違いない。
「なぜお菓子を食べないのかしら？　パンがなくなってもお菓子があるのに」
民衆の実状をいっさい知らない彼女にとって、それは純粋無垢な思いだった。しかし、時代はそれを許さなかった——
閑話休題。
ドレ兄弟にとって大胆に見えるアイリスの行動は、アイリスからすれば至極自然なそれであった。

バタン……
アイリスは店内に入った。
「ま、待てよ！」
「兄ちゃん！」
アイリスを追いかけて、勢いでドレ兄弟たちも店の中に足を踏み入れてしまっている。
「……!?」

何人かの店員がいっせいにアイリスたちのほうを見た。
「…………」
ドレ兄弟は感じていた。彼らの顔に徐々に不愉快そうな表情が浮かぶのを。彼らの目から放たれ、兄弟に向かってくる視線——それは今までにも何度も経験したことだった。食べ物を探してこの町を彷徨ったとき、道行く人々に投げかけられた視線。病気になったジャンのために医者のドアを叩いたとき、応対に出た男から受けた視線。すべては同じもの。
だが、ドレ兄弟がその視線を感じている時間は長いものではなかった。店員たちの目はすぐに兄弟から別の対象へと移らざるを得なくなる。
「わーっ、これこれ！」
いつの間にかアイリスが店内を走り回っていた。
「これもいい！　これも！　あ、こっちも！　欲しい、欲しい！　みんなちょうだい！」
長く閉じた世界で暮らしてきたとはいえ、アイリスは感情が希薄になってしまったわけではない。むしろ、人一倍豊かだった。アイリスは立ち並ぶ商品を見て、素直に感動していた。八歳の子供がなぜ、と思う向きもあるかもしれない。が、少なくとも彼女のいた世界では八歳の子供は他にいなかった。母親がわざわざパリから取り寄せ、悦にいる品々——そういったものがいつしかアイリスの中でも価値あるものとなっていた。

「これと、これと、これ」
あっけにとられる大人たちを前にアイリスは次々と気に入ったものを積み上げていく。
「あと、これも」
アイリスが小さな瓶を手にとった。発売されたばかりの香水『NO．５』。そのときになってようやく一人の女店員が叫んだ。
「お嬢ちゃん、なにやってるの！」
この店に勤めている店員たちには誇りがあった。パリのファションの先端にいるという誇りだ。その大切な職場を小さな子供にかき回されてはたまらない。
その思いが彼女にアイリスの手から『NO．５』の瓶を取り上げさせた。
「いいかげんに悪戯は……」
「それ、アイリスの！」
アイリスには遠慮がない。それもまた子供らしい素直な行動と言えるかもしれないが、アイリスの場合は危険だった。
霊力だ。
バリイイイイイイイイイイイン！

怒りの声とともにアイリスの力が爆発する。
香水の瓶は見事に砕け散った。
ただ、アイリスの場合も力を完全に制御しきっていたわけではない。勢いでやってしまったという側面が多分にある。
香水の瓶は女店員の手の中、アイリスの頭上で砕けたからたまらない。
「きゃっ！」
アイリスは頭から香水をすべてかぶってしまっていた。店内中に強烈な匂いが広がる。いくら素晴らしい香りとはいえ、ひと瓶一気に広がっては……。
「わーっ、なによ、これっ！」

バリバリバリバリバリバリバリバリバリバリッ！

「きゃあああああっ！」
店内で次々と悲鳴が響きわたる。アイリスの力によって陳列ケースのガラスが次々と飛び散っていった。

「わっ！」
「兄ちゃん！」
「に、逃げるぞ！」
さすがにドレ兄弟のほうは度重なるアイリスの行為に慣れ始めていた。
ジャックがアイリスを抱え上げると、そのまま走り出した。弟たちはあとに続く。
「ああん、アイリスの！」
「いいから、逃げるぞ！」
「だれか、だれか……！」
「わっ！ わわわっ！」
ドレ兄弟とアイリスたちがその店を飛び出した後も、しばしの間、店内はパニックが続き、とても四人を追いかけるどころではなかった。パリ女性の憧れの店はその日の午後だけ、臨時休業となったのだった。
「やりすぎだぞ、おまえ！」
走りながらジャックがアイリスに言う。横を走っているジョルジュもうんうんとうなずいた。ジャンは困ったような表情で兄とアイリスの顔を見比べている。ようやく自分の足で走

リ出したアイリスは口をとがらせたままだ。
「だって、アイリスの買おうとしたの取り上げるんだもん」
「だからって……」
「アイリス、怒(おこ)ると怖(こわ)いんだよ」
「えっ⁉」
「アイリスは好きなようにするの！　するの、するの、するの！」
駄々(だだ)をこね始めたアイリスを見て、ジャックとジョルジュは大きくタメ息をついた。
「わがままなやつ……」
「兄ちゃん」
ジャンはあいかわらず困ったような表情で兄とアイリスを見ていた。
シャネルの店を飛び出していくアイリスたちをまたもあの二人組が見つめていた。
いや、違う。二人だけではない。
二人組の背後(はいご)にはズラリと男たちが立ち並んでいる。
「いたぞ！」
「どうします、シャルグラン様！」

仲間から注目された中央の男――それは『白旗党』の大幹部エティエンヌ・シャルグランだった。
「追いかけるぞ！　なんとしてもあの小娘を捕らえろ！　少々の騒ぎは起こしてもかまわぬ！」
「はっ！」
走りだそうとした男たちの一人が、ふと気がついたようにつぶやいた。
「なんか匂いがするな……なんだ、こりゃ？」
「ん？」
他の男たちも、そしてシャルグランすらも立ち止まり、鼻をひくつかせる。
「これは……」
強烈な香水の匂いが駆け去るアイリスたちから流れているのだった。

11

ようやく脱線車両の撤去が終わったオーステルリッツ駅に予定よりかなり遅れて列車が到着した。

特等の客車からホームに降り立ったのは髪の長い東洋系の美女——藤枝あやめだ。ソローニュ城を訪問したときとは違い、軍服を着用し、手には長い刀を持っている。
あやめは油断のない目であたりを見回すと、刀を顔の前でまっすぐに立てた。
「我が神剣よ……力ある者の居所を示せ」
声とともに、刀はあやめの手を放れて、ゆっくりと空中に弧を描いて飛んだ。

カチャ……

あやめの手から放れた刀は地面に落ちなかった。驚いたことに、ちょうど人の腰の位置で地面と平行に浮かんでいるではないか。
「この方向は……」
刀は先端を南西に向けていた。
パリ郊外の南西にあるのがあまりにも有名すぎるヴェルサイユ宮殿である。
「史上、もっとも大きく、もっとも豪奢な宮殿を！」
太陽王ルイ十四世の号令のもと、一六六二年に始まった宮殿建設は、沼地を埋め立て、森

を動かし、川の流れを変えて、実に半世紀の歳月を経てようやく竣工した。

一九一九年六月十八日。欧州大戦休戦後のパリ講和会議のクライマックスが、宮殿の最も壮麗な場所である二階の鏡の間で行われた。ヴェルサイユ条約の調印である。

勃発するまで、従来のヨーロッパ大陸で行われていた戦いとなんら変わりがないと思われていた欧州大戦は、新兵器の出現によって大きく違った惨状を人々の目の前に現出させていた。

数多くの大砲の砲撃の後、騎兵の突撃が行われ、歩兵が占領をする——そんな旧態依然の戦いは機関銃という名の新兵器によって打ち崩された。突撃してくる騎兵は機関銃の前に無惨な屍をさらし、それ以降、騎兵という戦力そのものが用をなさなくなった。指揮官たちは機関銃という脅威から逃れるため、塹壕を掘り、敵陣へと近づく戦法を考え出した。しかし、その戦法ももう一つの新兵器の存在が効力を激減させていた。人型蒸気である。

アメリカ南北戦争の蒸気トラクターに端を発する人型蒸気は、欧州大戦で最も発達した兵器の一つであった。

塹壕は人型蒸気により蹂躙され、突破される。厚い装甲は機関銃も受け付けない。塹壕戦は成立しなかった。それでも初期の頃は落とし穴のような原始的な戦法である程度反撃できていたが、制御システム、運動性が格段に発達し、生身の人間ではいっさい対抗できなくな

った。

人型蒸気には人型蒸気で――

各国はこぞって人型蒸気の開発に邁進し、数多くの人型蒸気が戦場に投入された。それぞれの国の詳しい統計は戦争時のどさくさで失われてしまったが、一説にはこの時期合わせて一〇〇万を超す人型蒸気が戦場に投入されたという。

戦いは膠着状態に陥り、延々、砲撃音と人型蒸気同士の激突音が戦場に響きわたった。

戦いの当事国は戦況を好転させるため、あらゆる手段を弄し始めた。科学という名のもとに日陰に追いやられていた種々のオカルティズムもまた期待を持って戦場に引き出された。ザクセン妖魔騎士団、トランシルバニアの魔導士協会、アイルランドのケルト協会、チベット密教兵……などなど。彼らはある程度の成功を収めたものの、膠着状態を完全に打開するほどの戦果をあげることはなかった。

そうこうしている間にどの国も戦争継続を国内事情が許さなくなっていた。ロシアとドイツでは革命が起こり、それぞれ皇帝は追放され、オーストリア・ハンガリー帝国も民族紛争により瓦解した。イギリスとフランスは国内経済が崩壊し、戦時国債の償却の見通しが立たず、戦争継続が不可能になりつつあった。アメリカは結局参戦しなかった。

人的にも経済的にも、損害のあまりの大きさと、国内政情不安から、一九一八年十一月十

一日にドイツ共和国とフランス・イギリスの間で休戦条約が結ばれたことは極めて自然な成り行きだった。四年の長きに渡った戦争は終わり、ようやく平和が訪れた。その後のパリ講和会議を経て調印されたヴェルサイユ条約は、当事国同士いっさいの賠償金を放棄するという喧嘩両成敗的な内容で、以後のヨーロッパの平和を謳っていた。

「わぁぁぁぁぁぁっ！」
感嘆の声をあげて、アイリスが走っている。その動きに合わせて手をつないだ格好のジャンポールは大きく揺れる。
荘厳華麗な宮殿の建物を抜けると、そこには広大な一〇〇ヘクタールにもおよぶ庭園が広がる。ここはヴェルサイユ。
アイリスはその庭園を奥へと向かっていた。正面に四頭立ての馬車に乗る太陽神の石像のある〝アポロンの泉〟が見えてくる。
「あははは！」
ヴェルサイユに次ぐと言われたソローニュ城育ちのアイリスにしても、ヴェルサイユの荘厳さは驚きだったようだ。
その後ろをジャックたちがついていく。

「ふぅ……」
ジャックの口から出るのはさっきからタメ息ばかりだ。
「とんでもないことになったね、兄ちゃん」
兄の気持ちを代弁するかのようにジョルジュが言った。ジョルジュは三兄弟の中で、最も心配症なのである。普通、次男というのは気ままなものだが、ドレ兄弟の場合は長兄のジャックが行動的な性格のため、自然とジョルジュにそういった役割が回ってきたのだろう。
「はぁ……」
またしてもジャックはタメ息をついた。すでに彼の気持ちの中から、アイリスをダシにして金を儲けるという思いはかなり希薄になっていた。なんとなく疫病神に見込まれてしまった、という気分なのだ。
そんなジャックの耳に聞こえてきたのは末弟ジャンのひとことだった。
「かわいいね」
「えっ⁉」
ジャンは頬を紅潮させてアイリスを見つめていた。うれしくてしょうがないといった感じだ。
「本当にお人形さんみたいだ」

ジャンにはアイリスが今まで経験したことない不思議な存在となっていた。かわいらしい女の子。高貴で、自分たちと本来遠い存在。わがままで大人ぶっていて、それでいて憎めない性格――

ジャンにとって、女の子と出会うということ自体珍しいことだった。あの戦争以来、ドレ三兄弟はいつも三人だけだった。信じられるのも、生きていくのも三人。言うなれば、城の中に閉じこめられていたアイリスと立場はなんら変わりない。ジャンに至っては物心ついたときからこの状態。まさにアイリスだ。

「アイリス！」

ジャンが走り出した。

「あ、ジャン！」

「おい！」

兄たちの言葉も耳に入らず……いや、入ったのかもしれないが、ジャンはそれに反応せずアイリスのもとに駆けていった。

「なぁに？」

アイリスが気づいてジャンのほうを見た。

「あ、あのさ。オレさ……一緒に遊びたいと思って……」

アイリスに見つめられ、ジャンはなぜかしどろもどろになってしまっていた。アイリスは一瞬考え込むような表情をするが、すぐにニッコリと笑った。どこかジャンの心を見透かしたかのように、アイリスは大人びた口調で言う。
「いいわよ。アイリス、ジャンと一緒に遊んであげる」
「ホント⁉」
「ホントよ」
「あ、ありがとう」
「あは」
アイリスがジャンに向かって手を差し出した。ジャンはおずおずとその手を握り返す。幼い少年と少女は手をつなぐと、そのまま歩き出した。
歩きながらアイリスがジャンに言う。
「ジャン、アイリスのこと、好きなの？」
「えっ？　う、う～ん……わからない」
「だめ！」
「えっ⁉」
「ジャンはきっとアイリスのことが好きなのよ」

「そ、そうかな」
「そうよ。そうに決まってる！　だから、アイリスもジャンのこと好きになってあげる」
「あ、ありがとう」
「ジャンは……そうね、ジャンポールの次に好きよ」
　ぬいぐるみの次にされてしまったジャンだが、本人はそんなことまるで気にならなかった。それよりも、ジャンは新鮮な喜びに浸っていた。兄と一緒に旅していたときとは違うこの気持ち。女の子、そして同い年の友達というのがどういうものか――
　そして、それはアイリスがその瞬間感じていたこととまったく同じだった。
（なんだろな？　アイリス、よくわかんないや……でも……）
　それは恋とかそういったものと近そうでかけ離れた思い。けれど、それは温かさと無上の喜びを持っていて、彼らの心の隙間を埋めてくれる思い。
　ジャックとジョルジュはジャンとアイリスが手をつないで歩いていくのを見つめていた。微笑ましい光景――社会の荒波にもまれて育ってきた彼らがそんな気持ちを抱くことは、極めて珍しいことだった。
「兄ちゃん」

「ん？」
「妹がいたら、あんな感じかな……？」
「あん……ああ……」
二人はしばらくの間、アイリスとジャンの姿を目で追って、立ちつくしていた。
「ねえ、ジャン！　アイリスってわがままなの？」
「えっ？」
「だって、さっきジャックがアイリスのことわがままって言ってたよ」
「えっと……オレ、わかんねえ」
「わがままってどういうこと？　アイリス、普通だよ。いつもと同じだよ」
「えっと、えっと……よくわかんねえけど、兄ちゃんたちを困らせるのはよくないと思う」
「そうなの？」
「うん。兄ちゃんたちさあ、いつもはうるさいけど、いざとなったらちゃんとオレのこと守ってくれるもん。でも、あんまり困らせてると兄ちゃんたち、守ってくれなくなるかも……」
「……アイリスのことも守ってくれるの？」
「うん」

「そっか……あんまり人を困らせちゃいけないんだ」

アイリスは少し離れた所にいるジャックとジョルジュを見た。いざとなったら守ってくれるということがアイリスには実はもう一つわかっていなかった。両親から常に守られ続けていたアイリスにとって、守られるということは空気があるという事実のようにあたりまえのことだった。今さら実感としてわかない。いや、そもそもいったい何から守られるのかもはっきりしていなかった。

それでもわかることは、ジャックとジョルジュが悪い人間ではないということだった。彼らからアイリスは悪意を感じることはなかった。アイリスのことを誘拐して……などと言っているジャックからも。

「あ……」

悪意は別の方向から感じた。ヴェルサイユに入ってから、沈殿しているかのようななにか黒い感覚があった。ヴェルサイユの荘厳さに気をとられ、放っておいたそれがいきなり弾けた。

「ああ……!」

「えっ⁉」

突然、アイリスとジャンを取り囲むように男たちが出現していた。男たちは庭園の木々の

間からわき出るように現れたのだ。
「おじさんたちは……?」
「イリス・シャトーブリアンだな！」
正面に立った男が鋭い声で叫んだ。アイリスをにらみつけるような視線——シャルグランだ。が、もちろんアイリスは知る由もない。ただ、アイリスは正面の男から今までにない危険な感覚を受けていた。黒い悪意の塊——
「こっち！」
いきなりアイリスはジャンに手を引かれた。ジャンは走り出していた。アイリスのような超感覚はないが、ジャンは本能的にシャルグランの危険さを認識したのだ。
「捕まえろ！」
シャルグランの声に、男たちが動く。
「ああっ！」
二人の背後にいた男の一人がジャンとアイリスの前に大きく手を広げて立ちふさがった。ニヤニヤと侮蔑の笑みを浮かべている。弱者をいたぶることに喜びを感じているらしい。

ドガッ！

だが、その男の顔が背中からの衝撃で大きく歪んだ。
「ジャン！」
ジャックが男に体当たりをしていた。
「ジャン、早く！」
「うん！」
ジャックに促され、ジャンはふたたび走り出す。アイリスの手をひいて。
「待てぇっ！」
男たちも本格的に動き出し、庭園の中は一大騒動となった。
ジャックは走るのが遅いアイリスを背負っている。いつの間にかジョルジュも合流していた。
「………」
アイリスは不思議な思いに駆られていた。守られる、ということを初めて認識した結果だった。
（ジャンやジャックはあたしのことを守ってくれた……？）
悪意を遮る強い意志。それは心地よいものだ。

「なにをしてる！　早く捕まえろ！」

シャルグランが怒鳴っている。力やスピードは確かに大人たちのほうがあったかもしれない。しかし、ドレ三兄弟は広大な庭園をうまく使って、右に左にと逃げ回っていた。

「ちょこまかしやがって！」

男たちは怒りにまかせて汚い言葉を吐き捨てるが、身軽さでは少年たちにかなわない。

ジャックたちは庭園を抜ける建物の下までたどり着いていた。

「イリス以外は射殺しろ！」

ついに切れたようにシャルグランが叫んだ。

男たちがいっせいに懐から銃を取り出す。突き刺さるような悪意がアイリスを襲った。

「だめぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇっ！」

その瞬間、アイリスが叫んだ。スッと抜けるように力が解放されていた。

ドゴォォォッ！

パリィィィィィィィィィィィィン！

「わぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」

「なにっ⁉」
建物の一部が弾け飛んだ。
宮殿中の窓ガラスという窓ガラスが一気に割れる。

ドォォォォォォォォォォン！

それだけではない。アイリスたちが立っていた地面に亀裂が走り、次の瞬間、そこが大きく陥没していた。
「きゃっ！」
「うわああああああっ！」
皿状の地面に乗ったまま、アイリスたちの身体は一気に落下する。

ドンッ！

数十メートル落ちただろうか。しかし、彼らの身体が底に叩きつけられることはなかった。
「うわぁ……えっ？」

ふわりと彼らの身体はいったん空中に舞って、ゆっくりと底に着地していた。これもアイリスの力だった。
彼らの前には暗い通路が広がっている。
「ここは?」
「わからねえ! けど、逃げるんだ!」
「う、うん!」
ドレ兄弟は走り出した。アイリスはふたたびジャックに背負われている。
ジャックの背でアイリスはふと気づいていた。自分がソローニュ城にいたときよりも強い力を使えるようになっていることを。

「なんだ、今のは?」
男たちは愕然と目の前の光景を見つめていた。
ヴェルサイユ宮殿の一部が崩壊し、地面を大きな亀裂が走っている。目指すアイリスたちはその亀裂の中に消えていた。
シャルグランですらどこか呆然とした顔をしている。
「わからん……が、イリス・シャトーブリアンを捕まえるのが先だ! 例のものを!」

シャルグランが大きく手を振った。離れた仲間への合図だった。シャルグランの合図を見た仲間はなにかを連れて走ってくる。
彼の手には、紐があり、中型の犬が繋がられている。一九世紀末からようやく世に出始めた警察犬、ドーベルマンだった。

「停めて！」
ヴェルサイユに向かうタクシーの中にいたあやめは、パリを少し出たところで叫んだ。ちょうどアイリスが力を使った時刻だった。

カチャ……

あやめはその場でタクシーから降りた。
「…………」
例の刀があやめの手の中で小刻みに揺れている。先が示すのは下だ。
「……地下？」
あやめはもと来た道を戻り始めた。刀の揺れに導かれるかのように。

「それにしても……」
ポツリとあやめがつぶやいた。
（この都市も我が帝都と同じように霊的に封じられている。だからこそ、霊力を使ったとき、それは……）
あやめの視界にはパリの街並みがあった。

12

ベルサイユ宮殿から地下通路が延びているという噂は前からあった。その噂によると、フランス革命の最中、ルイ十六世が掘らせたものらしい。主に周囲の城塞や砦に通じていたが、そのうちの一本はパリまで延びているという話だった。
そして、それはどうやら本当のことだったようだ。
ドレ兄弟とアイリスは、もう暗闇の中を何時間も歩いていた。最初は怖がっていたアイリスもうすっかりと目が慣れてしまっていて、自分の足で歩けるようになっている。
「兄ちゃん、ここどこ？」
ジョルジュの不安そうな声はいったい何度目だろうか。

「うるせえな、わかんねえよ！」
答えはいつも決まっていた。その後はしばらくお決まりの沈黙——が、このときは違った。
「なに、あれ？」
「えっ⁉」
黒く長い物が、闇の中に見えた。
慌てて近づいてみる。
そこはT字路になっていて、横の通路を太い金属の管がどこまでも連なっている。パリの下水道本管であった。
「ここは下水だ……」
前に一度紛れ込んだことのあるジャックがつぶやくように言った。
パリの下水道はこの時点で全長一二〇〇キロメートルを誇り、その本管は直径一メートルを超える鉄の管でできている。その鉄の管のまわりは広く開かれていて、側道がずっと続いていてとても歩きやすい。
アイリスたちが紛れ込んだ所は、そんな下水道の一角だった。
「あれ……？」
全員が前方の下水管を見つめる中で、一人ジョルジュだけが背後を振り向いた。

カツ……カツ……カツ……
かすかな足音が響いてくるのだ。
「兄ちゃん！」
「なんだ⁉」
全員が耳をすました。足音は確実に大きくなっていく。
「やつらだ！」
ジャックは叫ぶや否や、まるで当然のようにアイリスを抱き上げた。
「あ……」
「逃げるぞ！」
そのまま兄弟は走り出した。
が、兄弟のあとを追う足音は確実に大きくなっていく。
ダアアアアアアアアアン！

「きゃっ！」
「うわっ！」
銃声が響きわたり、下水の中に反響した。閉じられた空間のため、それは思った以上に大きな音となってアイリスたちの耳に届いてくる。
不安な思い——恐怖がわずかにアイリスを襲った。
考えてみれば暗い空間にもう三時間以上閉じこめられているのだ。そして、銃声。いくら恐るべき霊力を持っているとはいえ、まだ八歳になるかならないかの少女の精神が不安定な状態に追い込まれないわけがない。
「こっちだ！」
ドレ兄弟はときには角を曲がり、なんとか背後の追っ手を引き離そうとする。けれどだめなのだ。彼らは確実に自分たちのあとを追ってくる。
「くそっ！」
「ねえ、ジャック、アイリスたちどうなっちゃうの？」
「…………」
「ねえ！」
「大丈夫だ！」

ジャックが怒ったように叫んだ。思わずアイリスはビクッとなって首をすくめる。が、ジャックの怒りはあくまで自らを奮いたたせるためのものだったようだ。

「おまえはオレたちの大切な金づるなんだ！　オレたちが守ってやるから！」

「守ってやるから！」

ジャンも声をそろえた。ジョルジュも不安そうな表情ながら、うんうんとうなずいている。

「兄ちゃん、ここ……！」

「なんだ……？」

ジャンが道脇に亀裂を見つけた。ちょうど人間が入れる大きさだ。

「…………！」

顔を押しつけたジャックは肌に空気の流れを感じていた。どこかにつながっているらしい。

「こっちだ！」

ジャックはアイリスを下ろしてその亀裂に入り込んだ。アイリス、ジャン、ジョルジュとそのあとに続く。

「ああっ！」

せまい岩の隙間から這い出したとき、いきなり彼らの前に視界が開けた。

「ここは……！」

そこには広大な空間が広がっていた。

13

パリの地下は空洞だらけである。しかも、人工的な。というのも、パリでは建築石材を他から運んでくるのではなく、地下から調達したのだ。パリの地下には質のよい石の層があり、ローマ時代から数多く採石場があった。
そんな採石場の一つに、十八世紀後半から一〇〇年間もかけて、六〇〇万体の無縁仏を葬ったのがカタコンブ（地下墓地）である。
アイリスたちが迷い込んだのは、そんな地下墓地にも匹敵するほどの採石場跡だった。
「すげえ……！」
そこはカタコンブより、天井も遙かに高かった。
「こんなもんがパリの地下にあるなんて……」
ジョルジュは呆然と天井を見つめている。上のほうは暗くてよく見えなかった。
そのジョルジュの耳に、ガサゴソという音が響いてくる。
「あ……！」

彼らは忘れていたのだ。自分たちが追われている立場だったことを。

ダッ！

「わあああああああああああっ！」

まず、黒いなにかが飛び出してきた。そいつはその場にいたジョルジュを押し倒す。訓練されたドーベルマンの為（な）せる技（わざ）だった。

「ジョルジュ！」

続いて、次々と男たちが飛び出してくる。

「ようやく追いついたぞ、ガキども！」

最後にシャルグランが現れて、空洞（くうどう）中に響く声で言った。

「なんでオレたちの場所が……」

「下水の中でもプンプン匂（にお）ったぜ。イリス・シャトーブリアンの身体（からだ）にかかっている匂いがな」

「えっ？　……あっ！」

イリスはあのシャネルの店で『NO（ナンバー）．5（ファイブ）』を頭からかぶっていた。その匂いをドーベルマ

ンに追わせたというわけである。
「ジョルジュを離せ！」
ジャックがドーベルマンに飛びかかった。
が、その前に男たちがジャックを捕まえる。

バキッ！　ドガッ！

「ぐわっ！」
男の拳がジャックの頬を吹き飛ばし、つま先が腹にめり込んでいた。
「兄ちゃん！」
ジャックは地面に倒れ込んでいた。ゴボッと腹の中のものが喉から逆流する。
「けっ、手こずらせてくれたぜ！」
「さあ、イリス・シャトーブリアン、こっちに来てもらおうか」
シャルグランがゆっくりとアイリスに近づいていく。
「ああああ……」
アイリスは愕然とその光景を見つめていた。ジャンもまた呆然と立っている。

アイリスの頭の中にあったのは、恐怖だ。暗闇を走っているよりも、シャルグランたちに襲われたときよりも、目の前でジャックが殴り倒されたときのほうがアイリスはより強い恐怖を感じていた。

自分を守ってくれると言ってくれたジャックが、そしてジョルジュが地面の上に倒れている。

「わぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」

突然、ジャンが叫びながらシャルグランに飛びかかる。もちろん八歳の子供が立ち向かってなんとかなるような相手ではない。

「ガキッ！」

シャルグランが大きく腕を振ると、ジャンは地面に叩きつけられた。

「うぐっ……」

そのまま身体を強く打ったのか、動かなくなる。

「ああ……ああ……」

アイリスは今にも泣きださんばかりの表情でその光景を見ていた。

シャルグランがアイリスを見据えていった。

「おっと、妙な力を出そうなんてしたら、こいつらの命は……」

もし、アイリスがもう少し年上で分別のある子供だったらこの脅しは効いたかもしれない。
だが、彼女は八歳の、しかも感情素直な少女なのだ。
「うわあああん！」
アイリスは泣き出した。そして、それがクライマックスだった。

ドガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガッ！
ガシイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイッ！
地面に、天井に、壁に亀裂が走る。それがいっせいに弾けた。

ドガアアアアアアアアアアアアアアッ！

天井は崩れ、壁は崩れ、地面は大きく裂ける。
「うわああああああああああああっ！」
岩石や瓦礫が落下し、男たちの何人かが生き埋めになった。

「ガ、ガキ、やめろ！　こいつらの命が……」
瓦礫の落ちる中、シャルグランはそれでもアイリスに向かって叫んでいた。まるで泣き出した子供が冷静に事態を判断するかとでもいうかのように。なんと、愚かな。

バリバリバリバリバリバリバリバリバリバリッ！

突如、シャルグランの足許の地面が大きく十字に裂けた。
「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ……」
シャルグランはぽっかり開いた大地の中に消えていった。

ドドドドドドドドドドドドドド……

白旗党の男たちが無惨な運命をたどったあとも、アイリスは泣きやまなかった。亀裂や瓦礫は倒れているドレ三兄弟にも迫る。

〈アイリス、みんなを守ってあげて！〉

暖かく、それでいて強い声がアイリスの脳裏に直接響く。
「えっ⁉」
シャルグランの声には反応しなかったアイリスが、ようやく顔を上げた。
アイリスの目の前で、瓦礫がジャック、ジョルジュ、ジャンにまさに到達しようとしていたところだった。
「だめぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇっ！」

バシュンッ！　バシッ！　バシュンッ！

三人に迫っていた瓦礫は砕け散った。
そして、倒れているジャン、ジョルジュ、ジャックを抱き起こす姿がある。
「えっ⁉」
三人をかばうように立っていたのはあやめだった。
「あなたは……だれ……？」
「あやめ……藤枝あやめよ」

あやめはニッコリとアイリスに笑いかけた。アイリスの中で興奮した気持ちがゆっくりと静まっていく。

だが、事態は完全に収まったわけではない。天井は今にも完全に崩れ落ちそうな状態だった。

「さ、アイリス、飛ぶのよ」

「飛ぶ?」

「あなたならできるわ。外に飛ぶの」

「外に……でも……」

「みんなを守ってあげて。そうしたら、みんなもあなたを守ってくれるから」

「みんなを……守る……」

カアアアアアアアアアアアアアアッ!

アイリスの身体が光り出す。その光がドレ三兄弟とあやめを包んだかと思うと、次の瞬間には全員が太陽の下にいた。

突然の陽の光がまぶしい。

目の前にはななめに大きく傾いた凱旋門がある。あの採石場は凱旋門の真下にあったのだ。
「あ……」
「よくできたわね、アイリス」
あやめが膝をついて、アイリスの顔をのぞき込んだ。
「うう……うわあぁあぁあぁあぁあぁあぁあぁあぁあぁあぁん！」
感情が爆発したように、あやめに抱きついてふたたびアイリスは泣き出した。今度はどこも崩れることはなかった。

14

オーステルリッツ駅、シャネル、ヴェルサイユ宮殿、凱旋門——これらの損害と修復はすべてシャトーブリアン家がまかなった。
ドレ三兄弟はシャトーブリアン家が養育費を出して育成することになった。ソローニュ城の一角にちゃんとした部屋をあてがわれ、ジャックもジョルジュもジャンも目を丸くした。
あやめはついにロベールとマルグリットのシャトーブリアン夫妻を説得するのに成功した。
ロベールはアイリスの並外れた力を見て、アイリスをこのまま城に閉じこめておくことの

非を悟ったのだ。

「アイリス、人はね、お互いに助け合わなければ生きていけないの。相手を守ったり、相手から守られたり……」

あやめはソローニュ城のベランダで星空を見ながらアイリスに語りかけていた。

「うん……アイリス、わかる気がする。だから、アイリス、友達をたくさん作りたいの」

「……ジャンたちにお別れは言ったの？」

「……ううん。ジャンたちは……アイリスがいると迷惑かけちゃうから」

「…………」

「アイリス、自分と同じ力を持ったお友達を作るんだ！」

「ええ。いるわ、帝國華撃団には」

「うん」

アイリスは満面の笑顔でうなずいた。

事件後の七月五日、満八歳の誕生日を迎えたアイリスは父親から豪華客船〝イリス号〟を贈られた。

アイリスがこのイリス号に乗って来日するのはこの年の十月のことであった。

あとがき

僕にとって『サクラ大戦前夜』は一つの挑戦です。

常々、ライトファンタジーノベルズは読み易さが一番大切と思ってきた僕でしたが、どうにもそこに物足りなさを感じていました。重厚とまではいかないにしても、もう少し硬いストーリーでもいいのではないか、と。

それまで僕がやってきたシリーズでは、そうしたほうがよいと思えるものはありませんでした（スニーカー文庫で執筆中の『天空戦記シュラト』は少し異色です。硬い文章がいいのですが、まだ迷っています）。

そこに現れたのが『サクラ大戦前夜』だったのです。

ゲームである『サクラ大戦』はシリアスばかりでなく、コミカルでラブコメあふれる作品となっています。が、そうしたところで活躍するキャラクターたちだからこそ、そこに至るまでいろいろな物語があったのではないか。『サクラ大戦前夜』はそんな彼女たちの過去を描いています。

ただ、『サクラ大戦』はすでに確立された世界観を持っています。多くの設定があり、それらを勝手に変更するわけにはいきません。本編に関わってきた者として、あくまで発信す

る物語はオフィシャルなものです。この点については総合プロデュースである広井王子さんや『サクラ大戦』の設定を作られたレッドカンパニーの金子さん、森田さんとも議論を重ね、監修をいただいています。また、同じくレッドカンパニーの北條さん、奥村さんにもご助力いただきました。ぜひ、『サクラ大戦』の隠された物語を堪能してください。

最後になりましたが、この物語を執筆するにあたって、さまざまな方にお世話になりました。前記の広井さん、金子さん、森田さんはもちろんのこと、表紙と口絵、挿し絵を描いてくださった松原さん、電撃ＳＥＧＡＥＸの長谷川編集長、今井さん、電撃コミックガオの横沢編集長、電撃文庫の担当の佐方さん、本当にどうもありがとうございました。また、『サクラ大戦』のすべてのスタッフの皆様に感謝の念を込めて。

一九九七年三月　あかほりさとる

【追伸】『サクラ大戦』の小説はまだまだ続きます。本編は書き下ろしを考えております。他にもぜひ「降魔戦争」を描いてみたいと思っています。

解説

広井王子

小説を解説してもしょうがないので、まあ、いきさつでも書こう。ゲームの発売後（発売96年9月）のサクラ旋風はすごかった。総合プロデューサーとしてのぼくの前にあらゆる事柄がジャッジを待って山積みされた。それも一段落した。

サクラ大戦を着想したのはいつのころだろう。そんなことを思える余裕が出てきた。

サクラ大戦の着想は90年ごろだろう。自由劇場の芝居「上海バンスキング」を観ていたとき、まったくぼくの個人的な思い出がわき上がってきた。そんな気持ちを作品にしたいと思い始め、ある日、軽い気持ちで作曲家の田中公平さんに「ミュージカルを作りませんか」と言ったのが結局はサクラ大戦のはじまりなのだろう。

だが、素人がミュージカルをつくれるわけもなく、簡単に挫折するわけだが、「キミがプロデューサーをやって、その世界をゲームでつくってみないか」とセガの入交副社長に誘われた。うれしかった。

それから、本気になって、スタッフを考えた。

曲は田中公平さん。キャラクターデザインは藤島康介さん。脚本はあかほりさとるさん。

当代の売れっ子たちである。

「サクラ大戦」のモチーフを説明するとみなさん快く引き受けて下さった。

まあ、ゲームはこうして立ち上がったのだ。

あかほりさんとのつきあいは意外と長いが、ぼくは仕事以外のつきあいはしないから、彼がどんな私生活をしているのかは知らない。ただ、いまぼくが最も信頼できる作家である。

ゲームの脚本が完成したとき、あかほりさんが、「渾身の力で書いたよ」と力強く言ったので「じゃあ、今度は小説として読みたいですね」と軽い気持ちで言ったら「どんな?」と、彼は真剣な顔をした。

「そうね、花組それぞれの過去かな」

「よし!　すぐ書く!」

しかし、実は、あかほりさんはすぐには書けなかった。相当に苦労したと聞いた。

だが、連載が開始された小説には苦労のかけらもない。

軽やかで、巧みで、なによりワクワクさせる。

まるで、帝国華撃団が、歴史のなかに存在していたかのような錯覚をおぼえる。

さすがに、うまいなあ。

あかほりさとるは当代一のエンターテイナーだとあらためて思った。

【参考文献】

『公爵家の娘　岩倉靖子とある時代』（リブロポート）
『古流剣術』（愛隆堂）
『別冊歴史読本特別増刊　戊辰戦争』（新人物往来社）
『歴史群像　一九九六年八月号』（学研）
『満族の家族と社会』（第一書房）
『中国女性の歴史』（白水社）
『中国近代東北地域史研究』（法律文化社）
『満州都市物語』（河出書房新社）
『中国の20世紀史』（東京大学出版会）
『航空図鑑』（マイクロソフト）
『航空機メカニカルガイド』（新紀元社）
『黎明期のイカロス群像』（グリーンアロー出版社）
『神戸外国人居留地』（神戸新聞総合出版センター）

『ヨーロッパ歴史地図』（原書房）
『世界歴史地図』（三省堂）
『クロニック世界全史』（講談社）
『20世紀の歴史　第一次世界大戦〈上・下〉』（平凡社）
『世界の生活史　フランスの歴史』（東京書房）
『フランス近代史』（ミネルヴァ書房）
『パリ歴史物語〈上・下〉』（原書房）
『１００年前のパリI・II』マール社）

◉あかほりさとる著作リスト

「ゲームブック・ジーザス」（エニックス文庫）
「小説・天空戦記シュラト1　修夜転生」（同）
「小説・天空戦記シュラト2　魔破隘路」（同）
「小説・天空戦記シュラト3　戦鬼邂逅」（同）
「小説・天空戦記シュラト4　不抜大我」（同）
「小説・天空戦記シュラト5　苦界彷徨」（同）
「小説・天空戦記シュラト6　刹摩哀史」（同）
「笑説・天空戦記シュラト　熱風怒濤」（同）
「NG騎士ラムネ&40EX　ビクビクトライアングル愛の嵐大作戦」（角川スニーカー文庫）
「NG騎士ラムネ&40EX2　ユラユラ銀河帝国大混戦！」（同）
「NG騎士ラムネ&40EX3　ラスト・ラスト」（同）
「NG騎士ラムネ&40外伝　ダ・サイダー伝説」（同）
「NG騎士ラムネ&40外伝2　ココアの恋の物語」（同）
「NG騎士ラムネ&40外伝3　レスカの愛の物語」（同）

「MAZE☆爆熱時空1　完全無欠の最強カップル」（同）
「MAZE☆爆熱時空2　天下無敵の大パーティー」（同）
「MAZE☆爆熱時空3　永遠不変の異邦人」（同）
「MAZE☆爆熱時空4　純情可憐の聖少女」（同）
「MAZE☆爆熱時空　外伝　ミルちゃんの奥様な一日♡」（同）
「MAZE☆爆熱時空　外伝2　比翼の兄弟」（同）
「KO世紀ビースト三獣士1　神霊機のピラミッド」（富士見ファンタジア文庫）
「KO世紀ビースト三獣士2　ウラノスの空中城」（同）
「甲竜伝説ヴィルガスト1　琥珀色の城塞」（同）
「甲竜伝説ヴィルガスト2　朱鷺色の洞窟」（同）
「小説・あのこに1000%①～⑤」〈原作・北川みゆき〉（小学館パレット文庫）
「小説・プリンセスARMYウエディング★COMBAT」〈原作・北川みゆき〉（同）
「ソーサラー狩り　爆れつハンター　血封印」（電撃文庫）
「ソーサラー狩り　爆れつハンター②　魔法大工」（同）
「ソーサラー狩り　爆れつハンター③　転輪王〈前編〉」（同）
「ソーサラー狩り　爆れつハンター④　転輪王〈後編〉」（同）
「ソーサラー狩り　爆れつハンター⑤　魔人形」（同）
「ソーサラー狩り　爆れつハンター⑥　黒衣の聖母」（同）
「ソーサラー狩り　爆れつハンターSpecial①②③」（同）

本書に対するご意見、ご感想をお寄せください。

■
あて先

〒101-8305 東京都千代田区神田駿河台1-8 東京YWCA会館
メディアワークス電撃文庫編集部
「あかほりさとる先生」係
「松原秀典先生」係

■

電撃文庫

サクラ大戦(たいせん)

前夜(ぜんや)

あかほりさとる

監修・原案／レッドカンパニー

セガサターンソフト「サクラ大戦」より

発行　一九九七年五月二十五日　初版発行
一九九八年九月二十五日　三版発行

発行者　佐藤辰男

発行所　株式会社メディアワークス
〒一〇一-八三〇五東京都千代田区神田駿河台一-八
東京YWCA会館
電話〇三-五二八一-五二〇七（編集）

発売元　株式会社主婦の友社
〒一〇一-八九一一東京都千代田区神田駿河台二-九
電話〇三-五二八〇-七五五〇（営業）

装丁者　荻窪裕司（META＋MANIERA）

印刷・製本　加藤製版印刷株式会社

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。
定価はカバーに表示してあります。

Printed in Japan
ISBN4-07-306199-2　C0193

電撃文庫創刊に際して

文庫は、我が国にとどまらず、世界の書籍の流れのなかで〝小さな巨人〟としての地位を築いてきた。古今東西の名著を、廉価で手に入りやすい形で提供してきたからこそ、人は文庫を自分の師として、また青春の想い出として、語りついできたのである。

その源を、文化的にはドイツのレクラム文庫に求めるにせよ、規模の上でイギリスのペンギンブックスに求めるにせよ、いま文庫は知識人の層の多様化に従って、ますますその意義を大きくしていると言ってよい。

文庫出版の意味するものは、激動の現代のみならず将来にわたって、大きくなることはあっても、小さくなることはないだろう。

「電撃文庫」は、そのように多様化した対象に応え、歴史に耐えうる作品を収録するのはもちろん、新しい世紀を迎えるにあたって、既成の枠をこえる新鮮で強烈なアイ・オープナーたりたい。

その特異さ故に、この存在は、かつて文庫がはじめて出版世界に登場したときと、同じ戸惑いを読書人に与えるかもしれない。

しかし、〈Changing Time, Changing Publishing〉時代は変わって、出版も変わる。時を重ねるなかで、精神の糧として、心の一隅を占めるものとして、次なる文化の担い手の若者たちに確かな評価を得られると信じて、ここに「電撃文庫」を出版する。

1993年6月10日
角川歴彦